

Journal of Civic Engagement Research

シビックエンゲージメント研究

---

第2号



## 刊行によせて

センター長挨拶 益々動き出した市民協働	5
副センター長挨拶 紀要『シビックエンゲージメント研究』第2号の刊行に寄せて	6
シビックエンゲージメントセンターについて	7
コーディネーター挨拶	8
学生スタッフ	9

## I 研究論文・実践報告

### 実践報告

カンボジアとのオンライン日本語レッスン活動	
—コロナ禍でのボランティア実践の評価— (秋元みどり)	13
学生の主体性を引き出すボランティア活動支援制度の変遷と課題	
—青山学院大学ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度の実践報告から— (島崎由宇・三神憲一)	21
相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト「わかば」実践報告	
—プロジェクトの立ち上げ— (水谷耕平・「わかば」2023年度学生メンバー)	37
横浜市市民プロジェクト「Yocco18」公式 SNS 投稿の英訳を通じた、横浜の魅力の 英語圏への紹介活動 (宮本恵太)	59

## II シビックエンゲージメントセンター活動報告

コンテンツガイド (2023年度シビックエンゲージメントセンター活動)	73
2024 (令和6) 年能登半島地震への対応	75
《ボランティアプログラム》	
もしもプロジェクト青学	78
落書き対策ボランティア	79
広尾中学校アフタースクールボランティア	80
渋谷区こどもテーブルボランティア	80
渋谷・笹塚プロジェクト「夏の草むしり隊ボランティア」	81
相武台団地活性化プロジェクト	82
藤野プロジェクト	82
相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト (わかば)	83
相模原市立小学校連合運動会ボランティア (相模原地域小中学校等連携事業)	85
淵野辺小学校連携企画 (相模原地域小中学校等連携事業)	86
富士見小学校連携企画 (相模原地域小中学校等連携事業)	86
なな山緑地ボランティア	87
カンボジア日本語サロン	88
《イベント》	
学生ボランティア団体合同説明会	89
ボランティアカフェ (ボラカフェ)	90
ボラカフェ第1回: 何ごとにも挑戦～先輩OBの巻戻まれ力とツナガル力～	90
ボラカフェ第2回: トルコ・シリア大地震と国際協力	91
ボラカフェ第3回: ウクライナ侵攻と避難民	91

ボラカフェ第4回：奄美大島のノネコ問題と保護活動	92
ボラカフェ第5回：なぜ青学から介護の世界に進み、そして市議会議員に?!	93
ボラカフェ第6回：障害ってどこにある?あなたの「ふつう」はみんなの「ふつう」?	93
ボラカフェ第7回：なぜ青学を卒業して、国際機関で国際協力事業に携わるようになったのか?!	93
青山学院大学 学生ボランティア・フォーラム 2024	94
作ろう! My らぶらび	95
ヒューマンライブラリー@青学 2023	96
障がい WEEK	97
ユニバーサルマナー検定3級(障がい WEEK 企画)	97
ボラカフェ：障害ってどこにある?あなたの「ふつう」はみんなの「ふつう」? (障がい WEEK 企画)	97
バリアフリーまち歩き(障がい WEEK 企画)	98
手話コミュニケーション講座(障がい WEEK 企画)	99
アート企画展(障がい WEEK 企画)	99
《ソーシャルビジネス》	
藤野特産品(地産ガチャ)	100
《講座・セミナー》	
認知症サポーター養成講座	101
災害救援ボランティア講座	102
2023年度国際協力プランナー入門	102
防災ボランティア講習(無線機を使ったコミュニケーションを体験しよう)	103
学生×子どもの居場所づくりセミナー	104
《各種サポート制度》	
災害・復興支援活動に対するサポート制度	105
教職員ボランティア活動補助プログラム	105
ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度(通称ボラサポ)	105
【スタートアップコース】	
脱ビニール袋使い捨てプロジェクト	106
青山学院大学難民映画祭	107
青学生と子どもたちの「ゆめどこ」	107
【ステップアップコース】	
あらとう青山祭 2023	108
ペットボトル灯籠プロジェクト~より多くの住民の参加を目指して~	108
AOGAKU ボランティアネットワーク	109
シビックエンゲージメントセンター勉強会	110
《青山スタンダード科目》	
正課科目への協力	111
青山スタンダード科目「ボランティア・市民協働論」の実施	112
《学生スタッフの活動》	
学生スタッフによる SNS (Instagram) 運用	113
学生スタッフによるボランティア広報誌「CEC TIMES」	113
第21回相模原祭への出展	114
ユニコムプラザさがみはら「まちづくりフェスタ」の展示	115
関東地区大学ボランティアセンター 学生スタッフサミット —学生スタッフの世代交代と継承について—	116
<b>III 資料</b>	
シビックエンゲージメントセンター利用状況	119
シビックエンゲージメントセンター規則	123
シビックエンゲージメントセンター運営委員、実務委員、学生スタッフ	126

刊行によせて





## 益々動き出した市民協働

シビックエンゲージメントセンター センター長  
飯島 泰裕

紀要『シビックエンゲージメント研究』も第2号を刊行することとなりました。2016年に生まれたボランティアセンターは、ボランティア活動を通じて、豊かな人間性と独創性を備えたリーダーシップを発揮する人材を育成する目的で設立され、2022年には青山学院大学シビックエンゲージメントセンターに改組され、ボランティアに留まらず、シビックエンゲージメント（市民協働）へ活動の範囲を広げて広く社会貢献し、それを教育にも活かしております。

2023年度は、コロナ禍も一段落し徐々にその活動の機会も広がってきました。街中清掃 Green Up Project、手話コミュニケーション講座、オンライン日本語サロン、渋谷区版こども食堂「こどもテーブル」、相模原地域小中学校等連携事業、広尾中学校アフタースクールボランティア、落書き対策プロジェクト、大規模災害時に渋谷の災害を軽減する「もしもプロジェクト青学」、カンボジア日本語サロン、多様性や共生社会実現に向けた彩プロジェクト、ヒューマンライブラリー、国際協力プランナー入門、認知症サポーター養成講座、防災ボランティア講習、こどもの居場所づくりセミナー、ユニバーサルマナー検定取得支援などを実施しております。また、2024年1月1日に能登半島地震が起き、募金活動やボランティア派遣も行なっています。

この他、狭い意味でのボランティアから地域活性化と活動の幅を広げ、自然体験プログラム、相武台団地活性化プロジェクト、相模原市中央区「わかば」プロジェクトなども実施しております。困っている人たちのお助け隊としてのボランティアから一歩進み、自然に触れることが少なくなった学生や我々が、里山再生活動を通して、自分ごととして、これからの自然や社会を考えていく活動で、相模原藤野地区と多摩市ななやま緑地で行っています。また、高度経済成長期に発展した相模原市相武台団地ですが、時代を経て、高齢者世帯の多く、衰退の様相を呈す地域となっております。認知症サポーターとして始めた活動ですが、明るい青学生が寄り添い、みんなでお菓子を作り、キーホルダーを作ることで、高齢者だけでなく、小学生を含む若い地域の皆さんを取り込んだ、地域の元気を取り戻す活動に広がっています。「わかば」プロジェクトは、相模原市中央区の魅力を発見し、発掘し、発信するという相模原市役所と協働で進めたプロジェクトです。インスタグラムで発信したり、魅力体験ツアーをしたりしましたが、相模原で葡萄を栽培しワイン製造している地元企業と協働して、収穫製造の体験だけでなく、新製品のスパークリングワインのラベル開発をしました。出来た製品は、1ヶ月を待たず完売となり、相模原の魅力とものづくりの面白さを実感したことと思います。

さらに、ソーシャルビジネスとして、金沢 Outsider Art Project（障害者のデザインセンスを活かした自立支援）、シヤフォント、相模原市藤野地区地産ガチャの活動も行っています。青学生の普段見えないアートセンスや、流行に敏感なセンスの良さに、驚かされました。

こうした活動の他に、青山スタンダード科目「ボランティア・市民協働論」も実施しました。シビックエンゲージメントセンターの活動を学問的に見つめ直し、多くの学生に市民協働やボランティアの知識を得てもらうための活動です。また、市民協働やボランティアの体験を人生に役立つ体や心で学ぶ学習として、「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」、「サービス・ラーニング I、II、III」について実施協力を行っています。より多くの青学生に、ボランティア活動を知ってもらい、社会への貢献を考えてもらう教育です。こうした知識や体験の上に、専門科目で学ぶ知識や技能、研究が加われば、素晴らしい成果が期待できますし、社会へ出ても大きなキャリアとなるでしょう。

社会へ出た後の皆様からも協力を得られました。いわゆる校友の皆様ですが、そのボランティア活動や国際貢献事業について、ざっくばらんに参加できるボラカフェで講演頂きました。学生にとっては体験したことのない世界の話を見聞きして、心に何か響いていると感じています。

ボランティアセンター時代からセンターを支えてくださった、佐藤コーディネーター、島崎コーディネーターは、新たな道に歩み出されます。これからも益々のご活躍をお祈りしております。また、後任の方も2024年4月より着任されます。大変業績豊かな方々で、本センターでのご活躍も期待しております。

最後に、2020年に拝命したセンター長職ですが、2024年3月をもって退任致します。シビックエンゲージメントの活動を、真に支え実施してくれたコーディネーターの皆様、学外から色々と協力してくれた行政、企業、団体の皆様、そして諸先輩となる校友の皆様、深く感謝して御礼申し上げます。

市民協働の活動は、まさに「地の塩、世の光」への道です。2024年度から新センター長のもと、益々の発展をお祈りしております。皆様におかれましては、今後を見守ると同時にご支援ご協力を切にお願いいたします。



## 紀要『シビックエンゲージメント研究』 第2号の刊行に寄せて

シビックエンゲージメントセンター 副センター長  
左近 豊

2024年の初日に能登半島を襲った地震によって、多くの家族の団欒が引き裂かれ、住み慣れた故郷を追われ、寄る辺なさに打ちのめされた方たちの悲しみを想像し、思いを寄せています。シビックエンゲージメントセンターでは、地震発生後、スタッフが迅速に情報収集にあたり、物資の支援、ボランティアの派遣、支援金の募金に向けて準備に取り掛かりました。刻一刻と変わる状況に柔軟に対応しながら、まず全学で取り組めることとして、支援金の募金を、冬休み明けからすぐに宗教センターと一緒に始めました。ガウチャー記念礼拝堂、ウェスレー・チャペル、それぞれのセンター事務室、青学購買会を通じて構内セブンイレブンなどに募金箱を設置し、教授会等でも呼びかけました。3月には学生ボランティアが2回に分けて現地に派遣されました。これらの活動の陰には、たくさんの祈りと、「右の手のしていることを左の手に知らせない」（聖書・マタイによる福音書6：3）学内外の多くの方たちの尽力と支えがあったことを覚えます。感謝いたします。

昨年の創刊に続く今回の紀要には、シビックエンゲージメントセンターに連なる方々のボランティア活動や市民協働、地域連携等に関わる学術的な研究、そして実践の報告が載せられています。多様な働きの数々が、執筆者らの経験と知識と知恵に裏打ちされて、センターの活動に豊かな彩りをもたらしていることに気づかされます。紀要を通して、青山学院大学に蒔かれた種が大きく実を結ぶのを遥かに望み見ながら、芽生え育ちゆく姿を確認し、与えられている恵みを数えることができる幸いを味わっています。

この紀要に原稿を寄せてくださった方々、査読にあたった先生方、そして編集の労をとられた皆様に感謝を申し上げます。

## 青山学院大学シビックエンゲージメントセンターについて

青山学院大学シビックエンゲージメントセンターは2022年4月に開設しました。

青山学院のスクール・モットーである「地の塩、世の光」を体現する人物、サーバント・リーダーの育成に向け策定されたAOYAMA VISIONに基づき、前進であるボランティアセンターを改組した組織です。

2011年の東日本大震災以降、青学生が主体的に展開してきたボランティア活動を発展させつつ正課との接続を強化させ、サーバント・リーダーシップ教育に取り組みます。

■設立 2022年4月設立（2016年に設立したボランティアセンターより改組）

■所在地 青山学院大学青山キャンパス1号館1階  
青山学院大学相模原キャンパスF棟2階

### ■センターの特色

「地の塩、世の光」となり地域社会や国際社会に貢献する  
「知（学問）の力」「若い（学生）力」「スマート（サーバントリーダー）な力」を活用する  
社会のニーズにあったボランティア活動を組織的に展開する

### ■センターミッション

- ①大学と社会の繋がりをつくる  
学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること
- ②より良い社会をつくっていく  
大学の持つ専門性や強みを活用してボランティアや市民協働活動の社会的効果を向上すること
- ③社会から学び、自分の力へ  
社会貢献活動への参加に伴う教育的効果を向上させること



【センター外観 青山（左）、相模原（右）】

## コーディネーター挨拶

### 青山キャンパス

新型コロナウイルス感染症が5類に移行したこともあり、キャンパス内には賑わいが戻り学生たちの輝かしい笑顔に包まれた一年でした。一方で学生たちの学生生活の過ごし方には変化が生じ、ボランティアプログラムの成果が期待通り得られないことも多々ありました。人と人、人と社会の関係性のあり方が変容していく中で、これからも学生と地域の繋がりを丁寧に紡いでいけるセンターであり続けられるよう、これからもご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

佐藤 亜希

コロナ禍を経た今、様々な活動の実施形態として、対面かリモートか、あるいは両方の形式をうまく組み合わせることが増えてきました。活動の目的や関係者の状況に応じた取組を通して、より柔軟な協働が生まれたように感じます。同時に、変化が多い状況のなかで、学生の活動受け入れ先となる団体や担当者との真摯なコミュニケーションを通じた信頼性や継続性に基づくパートナーシップの構築が、実践の質に影響することも実感させられる1年でした。今後も、学生とともに、地域に学び成長していくことのできるセンターを目指して参ります。

秋元 みどり

今年度は全面的に地域での活動を（自主的な感染対策を前提に）制限なく開催することができました。夏の草むしり隊ボランティアでは学生が地域の方と交流し、笑顔を共にする姿がありました。コロナ禍以前であれば日常の光景かもしれませんが、あらためてボランティアから生まれる個人との出会いや感動があることへの気付き直しと、市民協働の在り方が形成されていくのを実感した1年でした。今後もCECが地域と学生との架け橋となれるよう、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

島崎 由宇

### 相模原キャンパス

シビックエンゲージメントセンターが開設して2回目の刊行となりました。本センターの機能を認知してもらいながら、これまでボランティアセンターで実施してきたプログラムを「市民協働プロジェクト」と称して発展させてきました。今後も大学の社会貢献の一端を担う部署として地域と大学をつなぎ、皆様にとって馴染みのあるセンターとなるよう尽力してまいります。引き続きご支援・ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

三神 憲一

この1年間は相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクトや相模原地域小中学校等連携事業など、新たな企画を立ち上げ運営してきました。私自身相模原の魅力や地域性についてはまだまだ知らないことばかりですが、活動のコーディネートを通して、また学生たちと一緒に活動をしていく中で相模原地域の事を知り、これまでより身近に感じる事ができた1年でした。今後も学生の学びや成長をサポートしながら、地域に愛される青山学院大学であり続けられるよう、尽力してまいります。

水谷 耕平

## 学生スタッフ

シビックエンゲージメントセンターでは、センターが掲げるミッション実現に向けて、コーディネーターと共に青学生のボランティア活動や社会貢献活動を促進し、学生と地域をつなぐ役割を担う学生スタッフ制度を設けています。

学生スタッフとしての活動を通して、ボランティアや社会貢献活動に関する視野を拡げ、さまざまな地域や団体との連携から社会について学び、CECと共に青学生の社会貢献力を高めたい！そんな強い意志と行動力をもつ学生たちが活動しています。

### 主な活動

- ・センター主催事業の企画や運営
- ・本学学生に向けたボランティア活動や市民協働活動の啓発や促進・情報発信
- ・その他、センターが必要とする活動の補佐業務

### 青山キャンパス

6人（4年生4人、3年生1人、1年生1人）

### 相模原キャンパス

4人（4年生2人、2年生1人、1年生1人）

### 学生スタッフの声

今年度、学生スタッフは渋谷区笹塚地域における「まちのお手伝いマネジャー」への参加と、SNS発信を行いました。「まちのお手伝いマネジャー」では、地域にある課題やそこでボランティアすることの意義を身をもって体感することが出来ました。ほんの少しのお手伝いでも、必要としている場所があると痛感し、自分たち学生に出来ることはたくさんあると気付かされました。SNSの発信では、シビックエンゲージメントセンターの認知度を上げるために、シビックエンゲージメントセンターの概要や、イベントの広報などを行いました。また、ミーティングでは、個々の活動についても共有し、それぞれの学生スタッフが自分ごととして捉えることで学びとなりました。学生スタッフとして至らない点も多くありましたが、私たちの活動に興味を持ってくださったり、協力してくださった方々に感謝いたします。



青山キャンパス学生スタッフ  
文学部日本文学科4年  
福井 咲希



相模原キャンパス学生スタッフ  
コミュニティ人間科学部  
コミュニティ人間科学科4年  
小泉 彩乃

今年度は、学生スタッフ2年目の活動として青学生のボランティア活動の広報や外部研修への参加、学生同士の交流企画を実施しました。特にボランティア広報誌「CEC TIMES」の作成においては、自分も含め学生がボランティア活動を通じて感じたものをリアルに言語化することで、活動を振り返り次へと繋げていく機会を作ることができたと思います。前例のない中で、様々な人と協力して一つの形を作り上げていく作業はやりがいがあり、活動を通じて様々な出会いや経験を得ることができました。温かく見守り適切なサポートを提供してくださったコーディネーター・事務職員の方々、活動を通じて出会うことのできた素敵な学生メンバーにはとても感謝しています。



# I 研究論文・実践報告



<実践報告>

# カンボジアとのオンライン日本語レッスン活動 －コロナ禍でのボランティア実践の評価－

秋元 みどり

青山学院大学 シビックエンゲージメントセンター

Online Japanese Lesson with Cambodia:  
Assessing Student Volunteer Practice during the Coronavirus Crisis

AKIMOTO Midori

Aoyama Gakuin University Civic Engagement Center

## 要旨

2020年以降、全世界でパンデミックとなったコロナウイルスの感染拡大は、社会経済に多大な影響を及ぼしたと同時に、大学における学生のボランティア活動の継続や活動のあり方にも変化をもたらした。本稿では、コロナ禍とされる非常事態の期間中、シビックエンゲージメントセンター事業の一つとして開始した学生ボランティア活動である、カンボジアとのオンラインによる日本語レッスンの実践の実施内容について報告を行う。また、本活動を通して、カンボジア側と学生側の相互に生じた影響に基づき、学生の異文化理解に対する自己認識やボランティア活動の捉え方の変化といった気づきについて述べ、コロナ禍で実践した学生のボランティア活動に対する評価としての考察を行う。

キーワード：コロナ禍、オンラインボランティア活動、異文化理解、カンボジア、日本語レッスン

## Abstract

The spread of the coronavirus, which has become a worldwide pandemic since 2020, has had a tremendous impact on the socio-economy and at the same time has brought about changes in the way student volunteer activities at universities. This paper reports on the implementation of the practice of online Japanese language lessons with Cambodia, a student volunteer activity started as one of the Civic Engagement Center projects during the period of the state of emergency considered to be a coronavirus disaster. Based on the mutual influence that occurred between the Cambodian and the student through this volunteer activity, this paper shows the students' self-awareness of cross-cultural understanding and the change in the way they perceive volunteer activities and discuss the results as an evaluation of the student volunteer activities practiced during the Corona Disaster.

**Key Words:** Coronavirus Crisis, Online Volunteer Activity, Cross-cultural Understanding, Cambodia, Japanese Lesson

## 1 はじめに

### (1) コロナ禍における学生ボランティア活動をめぐる状況

COVID-19の世界的な感染拡大による影響は、社会生活における制限や人々の意識や行動を変化させた。それまで当たり前で営まれていた様々なことが、「不要不急」でない限りは中止、または延期が余儀なくされ、大学生活においては、多くの戸惑いと不安を学生にもたらした。教室での授業はオンラインやオンデマンドに切り替えたリモート形式で実施することになり、部活やクラブ活動といった課外で人と人が直接に集まる活動は全面的に停止や大幅な制限がなされた。これまでに経験したことのない事態のなかで、学外の様々なコミュニティや地域社会のフィールド実施するボランティア活動や体験学習のプログラムは、先行きの見えない状況に陥った。

全国各地の大学ボランティアセンター間では、それぞれのボランティアセンターの運営状況や、ボランティア活動を希望する学生への対応を共有し、今後の取組みの可能性を探ることを目的としたオンラインでのセミナーが次々と開催された。また、社会福祉協議会を中心とした、地域の福祉的ニーズに対応している機関や団体からは、コロナ禍におけるボランティア活動への注意喚起の情報も共有されるとともに、非接触のリモート形式で実施可能な活動の事例も徐々に紹介されていった。さらに、海外での体験学習のプログラムでは、日本にいる学生が現地の人々とオンラインツールを活用し、リアルタイムで繋がる試みなど、新たな活動の形での継続を模索する段階へと入っていった。

この間、青山学院大学シビックエンゲージメントセンター(2020年度時点では青山学院大学ボランティアセンター)においても、ボランティア活動に関わる学生に対する注意喚起を行うと同時に、リモート形式で参加可能なプログラムや学生相談の対応を実施してきた。本稿で、実践報告として述べていく「カンボジアとのオンライン日本語レッスン」は、こうしたコロナ禍の状況下で新しくスタートした活動である。活動実施に至る経緯とその背景については、以下の通りである。

### (2) 本活動の経緯と背景

カンボジアとのオンライン日本語レッスンの活動は、2020年9月にスタートし、現在(2024年2月)まで継続している。前述したコロナ禍という非常事態において、様々なことが制限されるなか、2名の本学学生から、コロナ禍でもできるボランティア活動があるのか、という問い合わせがあったことが開始のきっかけとなった。大学での授業や、サークル活動、アルバイトに出掛けて行く日常が一変し、終日自宅でオンラインの授業を受講する日々が続く、家族以外は人との関わりもなく、時間を持て余しているということであった。彼らが以前に国際ボランティア活動を行っていたことや、海外と繋がることに興味があることから、カンボジアで教育支援を行っている団体(NPO法人グローブジャングル(1):以下、GJ)より、過去に寄せられたニーズへのマッチングの可能性を探ることとなった。

そのニーズとは、GJがカンボジアで運営しているフリースクールで働く教員や、孤児院の子どもたちと、本学学生がオンラインでリアルタイムに繋がり、日本語の会話レッスンを通じた交流を実施することが可能であるか、という内容であった。GJが主催するカンボジアでのスタディツアーの中で、現地を訪問する日本人と出会うカンボジアの人々の中に、日本への興味や日本語学習への関心が高まっていることから、大学生とオンラインで繋がり、日本語会話に触れる機会を作ることができないか、というニーズであった。

このニーズと活動の提案をいただいた当時は、カンボジア側の人々と学生側の時間調整が難しく実現に至らなかったが、コロナ禍という状況になり、前述の通り学生の生活時間も変化したこと、また、内容的に国際的なボランティア活動であることから、双方のマッチングができるのではないかと検討することとなった。また、カンボジア側の状況としても、コロナ禍で、それまで行われてきたスタディツアーが中止となり、今後の実施の見通しが立ちにくい中で、現地を訪れる日本人との交流機会がなくなってしまったため、学生とオンラインでコミュニケーションできる機会を作ることが望まれた。

本学とGJとの関係については、青山女子短期大学(2022年閉学)の正課科目として長年実施されてきた、カンボジアでの体験学習プログラムが背景にある。このプログラムは、学生がカンボジアの社会経済状況を理解するとともに、開発途上国の人々との共生について考察を深める内容となっている。GJによってカンボジアでの活動がコーディネートされ、現地でのフィールドワークに参加する前後の学習においても、GJスタッフによる講義が授業内で実施され、GJと青山女子短期大学が構築してきた相互

の信頼関係に基づくパートナーシップを本学の学生の学びや、ボランティア活動に引き継ぐことが模索されていたことが、このカンボジアとのオンライン日本語レッスンの実施に至る背景としてある。

以上の経緯、および背景のもと、具体的にオンラインでリアルタイムに海外と交流するボランティア活動の実施に向けて、有志学生とともに本活動の計画と実施に向かうこととなった。

## 2 活動の目的と実践内容

### (1) 本活動の特徴と、取組みで目指すこと

本活動の特徴は、第1に、カンボジアにいる人々と学生が、オンラインツールを活用して、リアルタイムで繋がり、日本語会話でのコミュニケーションを行うことである。一般的に、海外に関わるボランティア活動では、英語でのコミュニケーションや開発途上国への援助活動が第1にイメージされるが、本活動では両者の共通言語としての英語はあくまでも補助的なツールであり、日本語での会話がメインとされている。日本語に触れたいカンボジアの人々のニーズに対して、日本語を母語とする学生と一緒に会話を楽しむということが中心にある。

第2に、日本語会話を通じた交流の過程で、相互に自国の文化と異なる文化や生活習慣への気づきが生まれることを目的としており、カンボジアの人々の日本語能力向上を重点的に目指すものではないという点である。なぜならば、学生にとっては、日本語教育の専門的知識や経験を持ち合わせていない状態でも参加できる活動として、このボランティア活動を位置付けているからである。したがって、日本語レッスンでは、相互の言語や生活、文化に触れることや、コミュニケーションを通してお互いを知ることのきっかけとなる内容を中心に構成されている。

このような特徴と目的を持って本活動に取り組む理由は、パートナーとなるGJが団体の設立目的として掲げる、「HAPPYの連鎖＝皆が笑い合い、応援し合う社会の輪のモデル作り」という理念に関わっている。国際協力を行う市民活動団体の規模や性質、目的がそれぞれに異なる中で、GJが目指す社会像「当たり前前の幸せの価値観を共に創造する」のなかに、支援活動を行う上で出来る人と人との繋がりや、その過程に意義を見出すことによって、支援する側とされる側がお互いに喜びを受け止め、継続的な支援活動を循環させることが目指されている。それは、まるで止まることのない回転エネルギーに皆が乗り込んで、楽しみながら回し続けていく遊具の「グローブジャングル」のようなものである、ということがGJの団体名とビジョンを込めてなぞらえていることにある。

そして、日本語会話を通じたコミュニケーションを行うという点においては、GJが支えるカンボジアの人々にとってのエンパワメントに深く関わっている。GJが行うカンボジアでの事業は、主に子どもの教育と女性の自立のための支援である。支援の対象となる人々の多くは農村の人々や貧困の課題を抱えている。1970年代のポル・ポト独裁政権の歴史がカンボジアの人々に与えたものは、今日のカンボジアにおける社会課題と複雑に絡み合い、教育や、民主的な社会の発展に影響を及ぼしているとされる。国際的に明示される基準では、カンボジアはすでに義務教育が実現しているとされるのはあくまで制度上のことであり、その現実、公教育を安定的に受けることができない人々が農村には多い。また、出稼ぎ目的以外で、都市部や他の国との接点を持ちにくい人々にとって、GJが提供する教育活動に参加することや、日本人との交流を通して異文化に触れ、新たな関心や可能性を見出すことは、将来への希望を抱くこと、それを支えてくれる仲間の実感できることであるとされる。

海外とつながるボランティア活動では、その規模や目的がそれぞれに異なるが、学生がグローバルに社会に生きていることを感じ、社会課題とされる困難の当事者との関わる経験の中で、他者のために行動し、共生社会の創造のプロセスにいる自己の価値を見出す取組みを目指し、コロナ禍でも実践することのできるものとして、本活動を継続している。

### (2) 日本語レッスンの実践内容1 (マンゴースクール)

ここからは、オンライン日本語レッスン(以下、レッスン)として実践している具体的内容について述べていく。

まず、カンボジアのシェムリアップ近くの農村にあるマンゴースクールの教員の方々とレッスンのことである。マンゴースクールは、様々な事情で公教育にアクセスしにくい子どもたちを対象に、GJが2018年に設立したフリースクールである。児童数は幼稚園児から中学生全体で、約250名、教員は

5名で運営されている。レッスンは、毎月1回、60分間、ここで働く教員4～5名に対して、月毎に担当となる2～3名の学生で実施している。学生側のオンラインツールへのアクセスは、各自のデバイスで行なっている。

レッスンは、毎年初めにこの活動に参加を希望する学生が集い、年間のカリキュラムと月毎の教材作成の担当を検討して決定する。毎月のレッスンに備えて、教材作成の担当者がパワーポイントのスライドにレッスン内容を作成する。スライドには、日本語、英語、クメール語の表記を併記し、トピックや内容の理解を促すイラストや図、短い文章で構成されている。また、日本文化を紹介する動画（季節の行事や食べ物、自然風景等）も入れ込み、カンボジア側の参加者とそれらへの感想を共有している。学生が紹介した内容にちなんで、カンボジア側の参加者から、カンボジアの伝統的習慣を紹介されることもある。

レッスンで使用するトピックは、日本語会話練習のテキスト等から選定し、言葉や文章には、日本で生活や習慣、食事に関する内容を意図的に反映させている。それらの内容がカンボジア側の人々に分かりやすい示し方になっているか、また、クメール語の併記が正しい翻訳になっているかという確認を、レッスン実施前にGJのカンボジア人通訳スタッフに確認してもらい作業を経て、レッスンを実施している。レッスン中は、学生がオンラインツールの画面共有で教材となるスライドを提示して説明し、会話の練習や動画の視聴をリードし、日本語での説明部分はカンボジア人の通訳スタッフがクメール語に逐次通訳を行うことによって進め、カンボジア側からの質問を受ける。

このレッスン開始当初は、カンボジア側も学生側もオンラインツールの使用に慣れていないことによって起こるトラブルや、カンボジア側の天候やインターネットの接続環境による途中切断、停電が予期せぬ中で度々発生し、その都度対応に戸惑うことも多かった。また、レッスン途中に、カンボジア側の教員同士がクメール語で会話を始め、学生側が取り残されてしまう場面や、カンボジア人通訳スタッフとの通訳のタイミングがうまく取れないゆえに、レッスンをリードするペースが掴めないという難しさにも直面し、大小様々な想定外の出来事に直面してきた。しかしながら、これらの状況に対して、カンボジアに滞在しているGJの日本人スタッフがレッスンの運営をサポートしてくれたことをはじめ、マンゴースクールの教員がこのレッスンを楽しみにしてくれている様子を学生に伝えてくれることによって、学生側もより良いレッスンの運営のための工夫を重ねて、継続的な取り組みをしていくことができていた。

学生にとっては、こうした初めての取組みに伴う困難から、国や環境が異なる人々とリアルタイムでオンラインによるコミュニケーションを行うことによって生じることへの臨機応変な対応や、自分とは異なる他者の会話のペースや学習スタイルに伴走する姿勢を徐々に認識するプロセスになったことが、学生間の活動に対する振り返りの場面からも見えてくるようになった。また、言葉の表現やフレーズ選びに、無意識に日本人特有の「当たり前」が反映されていることを、レッスン中のカンボジア側の人々の反応から自覚される場面も多くあり、それらの気づきは学生にとって驚きと共に、興味深い自国の文化や習慣への気づきとなっていった。

### (3) 日本語レッスンの実践内容2（くっくま孤児院）

次に、首都プノンペンにある、くっくま孤児院の子どもたちを対象としたレッスンについてである。くっくま孤児院は、2011年以降にGJによって運営がスタートし、現在、22名の子どもたちが暮らしている。日本人を含む3名のスタッフが居住を共にして子どもたちの日常生活を支え、子どもたちは地域の公立学校に通っている。また、子どもたちはカンボジア伝統舞踊の稽古を継続しており、公の祭事やイベントで舞踊を披露している。

くっくま孤児院には、GJの日本人スタッフが在駐していることや、GJのスタディツアーで定期的に日本人が訪問することもあり、子どもたちは日本語への親しみが強い。しかしながら、コロナ禍の期間は日本人来訪者がなく、また、学校が休講であったことから、オンライン日本語レッスンを開始することとなった。すでにマンゴースクールとのオンライン日本語レッスンを実施していたことや、カンボジアの子どもたちとの関わりを学生が希望したこともその理由としてあった。レッスンへの参加を希望する5名の子どもたち（小学校高学年の固定メンバー）と、学生2～3名が毎月2回、1回30分間レッスンを実施している。

マンゴースクールでは、大人を対象としたレッスンであるが、くっくま孤児院では子どもたちが日本

語に触れることを楽しみ、基礎を習得していくことができることを目的に、カリキュラムや教材の作成を行っている。過去に、くっくま孤児院で育った子どもがGJからの支援を受けて、日本の大学に進学したことや、日本で働いているカンボジア人がいることから、日本語を学ぶことは自分の将来につながるという意識を子どもたち自身が持てるようにという、くっくま孤児院の方針が反映されている。レッスンでは、ひらがなとカタカナを正確に覚えることから開始し、子どもたちの生活に馴染みがある言葉や表現のフレーズを選んで教材づくりを行っている。海外でも人気のある日本のアニメにちなんだスライドや、言葉のイメージがわかりやすいイラストを中心に、教材準備を担当する学生が、毎回オリジナルの教材を作成している。また、子どもたちが自然な日本語に直接触れることができるように、クメール語や英語は併記せず、すべて日本語で教材を作成し、レッスンをリードしている。説明部分のみ、GJのカンボジア人通訳スタッフがサポートを行っている。さらに、子どもたちが学習意識や日本語への関心を継続できるように、レッスンを担当する学生が、毎回宿題を出し、次のレッスンで宿題を確認する場では、子どもたち1人1人が自分の成果を発表することを行っている。

学生にとっては、オンラインの画面越しに見える子どもたちが新しいことに挑戦し、学ぶ姿や、日本語の習得の速さ、大人の学習者と比較して発音になまりがないこと等、新鮮な発見が多く、自分自身の大学での学びや将来に対する姿勢に強い刺激を受ける場となっている。この3年間の間に、子どもたちから卒業する学生に対してお礼の意が込められた、イラスト付きのメッセージカードやビデオメッセージが贈られることもあり、子どもたちに直接会ったことはないものの、定期的なオンラインでのコミュニケーションやレッスンを通して、子どもたち一人一人の特性を知り、相互に顔の見える関係になっていった。さらに、くっくま孤児院のスタッフから、子どもたちの背景や現在のカンボジア社会で自立していくに伴う困難といった、福祉や教育的な現状についてお話を聞く機会も設定し、この活動を通して、学生が子どもたちに関わることへの影響や意義について理解を深めることもできた。

### 3 実践の評価

#### (1) 活動の振り返り

ここからは、オンライン日本語レッスンの活動を、学生ボランティア活動としてどのように評価することができるのかについて述べていく。

ボランティア活動において、一般的には、ボランティアする側の主体性や自発性、活動内容の社会性や創造性が重要なポイントとされるが、本稿ではより具体的な実践内容や、活動の特性に即して、これまでの活動によって生じた様々な影響に焦点を当てて考察していきたい。活動の評価を考えるにあたり、まず、本活動で行っている振り返りによる実践のサイクルについて述べる。

マンゴースクールとくっくま孤児院の両方のレッスンに対して、毎月振り返りの場を設定し、各レッスン後に担当者の学生が記入した報告書をもとに、レッスン内容の確認やレッスンを受ける側の様子、学生側の取組み全体についての意見交換を学生とコーディネーター間で行っている。その報告書や振り返りの中で出される事項、例えば、インターネットの接続が安定しない場合や、カンボジア側とのコミュニケーションをうまく進めることができなかつた場合、といった予期せぬトラブルが発生する度に、それらへの対応方法を検討し、以降のレッスンがスムーズに行えるための工夫を編み出し、レッスンの流れを阻害する要素を徐々に改善していった。

また、レッスン実施の経験を重ねるに連れて、学生がレッスン中のカンボジア側の人々の反応や表情から、相手の理解度の確認を行うことができるようになり、対話を進めるスピードの調整を適宜行うことや、参加している全員が発言できるような工夫を仕込んでみるなど、学生側の観察から出される意見や創意を重ねて現在に至っている。学生側の発信が一方的に偏ることがなく、カンボジア側と双方向のコミュニケーションになるために、マンゴースクールの先生たちから、それぞれの日常生活を紹介してもらう時間や、くっくま孤児院の子どもたちの好きなものを紹介してもらう時間を取入れたり、ブレイクアウト・ルームの機能を活用して、少人数で話すセッションも行った。その際には、レッスン内容の変化に混乱が生じないように、GJのスタッフとの確認を経て行っており、レッスンに対するカンボジア側の感想や要望についても、GJスタッフを通して、学生側に伝えられてきた。

この報告書の記入・確認と振り返りを定期的に行い、実践に生かしていくサイクルは、2022年後半以降のコロナ禍の規制が無くなりつつある段階では、学生が大学で対面参加とオンラインでのリモート

参加とハイブリッドでの実施、または、全員リモート参加という形式で柔軟に行っている。学生側の思いや、実施後の改善点、新たなアイデア等を共有し続けることがより一層可能になった。海外に関わるボランティア活動であっても、オンラインツールを活用することによって、単発ではなく、長期的に自分の学生生活の一部として、継続的な活動への参加が可能になった様子がうかがえる。

## (2) 学生の気づきと学び

次に、本活動を通じた学生の気づきと学びについて述べる。前述した振り返りの内容を実践に生かすサイクルを繰り返していく過程で、カンボジア側の人々やGJのスタッフからの反応や意見をもとに、様々な気づきを得ることは言うまでもなく、活動に共に参加している学生間においても、レッスンを組み立てて準備し、運営をしていくなかで発生する様々なハプニングへのサポートや、わかりやすい教材作りのアイデア、子どもたちへの話し方やリアクションの仕方と、相互に学ぶことは非常に多い。以下、2023年度の総括振り返りの場で、学生から出されたコメントの記録に基づいて、学生自身が気づいたことと学びや、自己の内面的な変化について述べていく。

まず、そもそもこの活動に参加した動機については、「異文化交流に興味があった」、「教育に興味があった」、「アジアの国の人と交流してみたい」、「海外ボランティアや貧困支援に興味があった」、「コロナ禍でオンライン形式の活動を試してみたかった」、「私にできて将来の可能性を広げる日本語教育だから」、「青学だからできることにチャレンジしてみたかった」等が挙げられた。コロナ禍であっても海外や社会課題とつながることができ、学生として特別なスキルがなくても活動に参加できることがきっかけになっていた様子がうかがえる。

2つ目に、学生自身の気づきと学びについては、「相手にわかりやすく伝えるように話すこと」、「通訳が訳しやすい話し方を意識すること」、「相手の立場、目的、文化、理解に立つこと」、「個人として対等に接すること」、「仲良くなろうという気持ちを持つこと」、「継続することが信頼になること」等が挙げられた。異文化理解や異なる立場の人とのコミュニケーションには多くのハードルがあることを理解していると自分で思っているものの、実践で直面する場面で戸惑ったことによって、無意識にある自己のコミュニケーションスタイルや、他者に対する姿勢のあり方に自発的に気づき、修正していく意識の変化が見えてくる。

3つ目として、ボランティア活動に対する捉え方については、「相手のためにするもののイメージから、自分も学び得る交流に変化」、「色々なニーズがあるが、必ずしもハードルが高いものではない」、「自分と何かしら違いがある人との関りから、視野が広がる」、「近況が報告し合える関係性になれる」、「けっこう楽しい」等が挙げられた。

これらの意見は、参加する活動の種類や性質、現場で関わる人々によって、異なる観点から挙げられる可能性が高く、ボランティア活動を通じた気づきや捉え方として一般化できるものではない。しかしながら、本活動がカンボジアとのオンライン日本語レッスンを通して目指してきたこと、また、GJが掲げるカンボジアへの支援活動の理念に照らし合わせた際には、活動を開始した当初には実感を伴い得なかったことの成果として、これら関係者が相互に関わり合うことによって生まれる影響は、本活動の評価を検討する上で重要なものであると考えることができる。

## (3) オンラインでのボランティア活動

従来行われてきた対面でのボランティア活動が大幅に制限される中で、オンラインツールを活用し、関係者がリモート形式で同時に活動に参加するというボランティア活動の新しい形態の試行錯誤について、本活動の経験からどのような検討ができるだろうか。この点について、活動を行っている学生からは、「画面越しではあるが、楽しくコミュニケーションが取れる」、「積極的に学ぼうとする子どもたちの姿が嬉しい」、「どこからでも参加することができるから、ボランティア活動の参加へのハードルが低い」、といったポジティブな印象が挙げられた。その一方で、「相手の様子が直接見られないために、相手が求めていることやわからないことがある場合は、空気を読み難い」、「時差があるので時間を合わせるのが難しい」、「通訳者とタイミングを合わせにくく、進め難い」といった、画面上に限られたコミュニケーションや海外、外国語とのやり取りに伴う困難も挙げられた。

しかしながら、これらオンライン上でのコミュニケーションの限界や難しさに直面したことによって、「通訳に上手に合図すること」の工夫や、「聞き取りにくいことや判断できない状況に対して、率直に相

手に聞き返すこと、自分から言い直すことを躊躇なく行うことができるようになった」という対応の変化と進め方の改善も生まれていったことも事実である。必要に応じて相手のニーズに積極的に介入していくことや、相手のレッスン内容の理解度が把握しにくい状況において、「レッスンを進めて良いか」という確認の問いかけを、自然に行うことができるようになっていったという学生の自己省察からの行動の変化は、本活動での関わりを通して、より主体的な態度が引き出されたことの結果として考えることができる。

対面でのコミュニケーションやボランティア活動を経験することによる気づきや学びは、そこで交換される、可視化されない情報や影響も含めて、計り知れないものがある。しかしながら、コロナ禍でオンラインツールを活用し、リモート形式でのボランティア活動という未経験の形態を経験したことによって、限られた環境条件のなかで、いかに活動の目的を達成することができるか、という自発的な試行錯誤を生み出す学生のエネルギーに繋がった。したがって、本活動においては、成果と課題が表裏一体のものとして、新たなボランティア活動の実践知の形成に繋がったと捉えることができる。

#### 4 おわりに

2024年2月現在、コロナ禍という非常事態は収束し、社会生活や学生ボランティア活動もコロナ禍以前の実施形態をほぼ取り戻している。オンラインツールの活用は一層広がり、用途や状況に応じて、対面またはリモート、あるいはハイブリッド形式と、ボランティア活動の実施形態も多様化し、より多くの人々がボランティア活動や市民活動に繋がりがやすくなっている。今後も、様々な技術的革新や社会の変化にともなって、大学や学生のボランティア活動をめぐる状況や、それに対する受け止め方、活動へのモチベーションも変化し続けていくであろう。日本社会の歴史的な節目に、学生のボランティア活動が自発的に生まれ、全国に活動が広がり、自然災害の発生を背景に大学ボランティアセンター設立や、学生の活動を後押しする様々な仕組みが制度化してきた中で、コロナ禍での経験もまた一つ、学生のボランティア活動における新たな節目であると位置付けることができるのではないだろうか。

#### 謝辞

本活動を支え、日々の学生の実践をカンボジアの人々と繋いでくださっているNPO法人グローブジャングルの皆様に感謝申し上げます。また、NPO グローブジャングルと学生が繋がり、有意義な活動の展開にきっかけを与えてくださった、河見誠先生（コミュニティ人間科学部教授）の多大なはたらきに感謝いたします。

#### 注

(1) NPO 法人グローブジャングルの団体情報、事業内容は以下を参照

<https://glojun.com/>



<実践報告>

# 学生の主体性を引き出すボランティア活動支援制度の変遷と課題

－青山学院大学ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度の実践報告から－

島崎 由宇<sup>1</sup>・三神 憲一<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東海大学 健康学部 健康マネジメント学科

<sup>2</sup> 青山学院大学 シビックエンゲージメントセンター

Changes and Challenges in the Volunteer Activity Support System that Encourage Students' Independence:  
Aoyama Gakuin University Volunteer and Social Contribution Project Support System in Practice

SHIMAZAKI Yu<sup>1</sup> MIKAMI Kenichi<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Department of Health Management, School of Health Study, Tokai University

<sup>2</sup> Civic Engagement Center, Aoyama Gakuin University

キーワード：ボランティア助成制度、ボランティア、社会貢献、実践報告

## 1 はじめに

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター（以下、「CEC」とする）では、センターが掲げるミッション<sup>(1)</sup>のもと、青山学院大学の学生・教職員が主体となって実施するボランティア活動ならびに社会貢献活動を支援する助成制度の一つ<sup>(2)</sup>として、ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度（通称ボラサポ 以下、「ボラサポ」とする）を実施している。2023年度で7年目を迎えるボラサポは、これまで多種多様なプロジェクトを採択し、青山学院大学の学生・教職員が活動を実施してきた。学生に対するボランティア活動ならびに社会貢献活動への助成制度は、全国の大学で運用されているが、制度を活用した個々の活動報告はあれ、制度それ自体の実践を振り返った報告は少ない。また、本学においてもボラサポ採択団体の活動報告は活動報告書やCEC Webサイト内で掲載しているものの、年度毎の採択プロジェクトの採択結果と概要紹介に留まり、制度そのものを整理した実践報告はされていない。そこで、本稿ではボラサポの制度概要とこれまでの制度運用の流れと変化を整理し、特徴的な採択プロジェクトの報告からその実績と成果をまとめ、制度の課題を考察したうえで、今後の制度運用における見通しを述べる。

## 2 大学ボランティアセンターにおけるボランティア支援と資金援助制度について

まず、大学ボランティアセンター<sup>(3)</sup>が実施する支援事業について整理する。東京ボランティア・市民活動センターが2021年に全国の大学等1117校を対象に実施した「大学ボランティアに関する全国実態調査報告書」（2021:7）によれば、全国の大学のうち約8割の大学で学生のボランティア活動支援が行われており<sup>(4)</sup>、それら活動支援部署が実施する13項目の支援事業<sup>(5)</sup>のうち、約6割で実施されている事業は「情報収集提供活動」60.2%、「アドバイザー活動」66.9%、「マッチング活動」46.8%である。資金援助制度に着目すると、項目は「資源提供活動<sup>(6)</sup>」に含まれ、その割合は39.7%であり、資金援助活動にあたる「学内助成金」は15.3%、「学外助成金情報」の割合は15.6%の実施率である。このように、学生がボランティア活動を行うための情報提供やアドバイザー活動は全国で広く行われている一

方で、資金提供など学生の活動を物質的に援助する支援は決して多くはない。

次に、大学生のボランティアの参加状況や参加動機についても触れたい。国立青少年教育推進機構(2020)が行った調査では、ボランティア活動・社会貢献活動へ参加したことがある大学生(n=2176)は37.5%である。また、活動参加経験者の参加動機で最も高いのは「自分の成長につながると思ったから」(45.4%)、ついで「さまざまな人と関わりたかったから」(28.5%)であり、自己実現のためや人間的自立といった利己的な動機でボランティアを始める学生が多くいることがうかがえる。また、公益財団法人日本財団ボランティアセンター(通称Gakuvo旧:日本財団学生ボランティアセンター)が2017年に大学生1万人を対象に行ったアンケート調査がある。「ボランティア活動をはじめた最大のきっかけ」の項目では、「団体や知人との関係性」30.4%、「自己実現・自分自身のため」27.5%、「その団体への共感」21.1%、「社会貢献の意識」8.2%であり、こちらは大学生のボランティア活動の動機として、利他的な動機が割合として高く出ている。そのうえで、大学生のボランティア活動に対する支援のニーズに着目すると、前述の国立青少年教育振興機構の調査では、「大学生のボランティア活動のために求められる支援」の質問項目のうち、「ボランティア活動のための資金の援助」は、「とても重要だと思う」(29.7%)「少し重要」(44.2%)と合わせて7割を超える。資金援助が特に必要とされる活動には、災害・復興支援、地方創生など国内での遠隔地による現地活動や、国際協力・支援における海外渡航を伴う活動が大部分であり、現地までの交通費や宿泊費の金銭的負担は大学生には大きく、大学ボランティアセンターにおける学内外の資金援助に関連した支援の必要性が言えよう。

また、本学においては、CECが2019年度から実施している「ボランティア活動に関するアンケート」の調査結果において、9割の学生が「ボランティアに興味あり」と回答しているものの、過去1年間の活動経験については3割に留まっており、関心はあるものの実際の活動には繋がっていない学生が多くいることが分かる。加えて、過去1年間のボランティア活動経験はないが、「機会があれば参加したい」という潜在的関心層のボランティア活動分野においては、2019年度～2022年度のいずれにおいてもトップは「国際協力・交流」であり、活動に参加するために大学側に求めるサポートとして、「アサイン・マッチング」「共に活動するネットワークづくり」といった制度・サービス面の他、「情報」「活動場所」「活動資金補助」といった物質的援助のニーズが多く見受けられている。

### 3 ボラサポの制度概要

CECでは、2017年度から学生・教職員のボランティア活動の促進と可視化を目的にボラサポを実施してきた。制度の対象は、青山学院大学の学生・教職員が主体となって実施するボランティア活動ならびに社会貢献活動であり、学生のみならず教職員も対象としている。企画が認められ、採択を受けることで、CECから経費支援や活動のサポートを受けることができる。

ボラサポには目的に沿った制度運用によるプロジェクト支援を行うため、「スタートアップコース」と「ステップアップコース」の2つに分かれたコース設計を2019年より行っている。以下に2023年度時点での各コースの特徴と両コース共通した制度としての特徴を述べる。(表1)

#### (1) スタートアップコースの特徴

##### a. コーディネーターの伴走

スタートアップコースは、学生・教職員が取り組むボランティア活動や社会貢献活動の立ち上げ・基盤形成のフェーズにあるプロジェクトを主な対象としている。コースとしての大きな特徴の一つとして、その企画の中身作りから実施段階までをCECコーディネーターが伴走を行うことにある。1つのプロジェクトに対して一人のコーディネーターが伴走を担当し、プロジェクト開始から活動実施、報告書の作成・提出までのサポートを行う。学生・教職員の想い描くプロジェクトに対して、その現状課題や取り組み内容を整理し、情報提供や環境整備を行い、当初想い描いていたプロジェクトをより具体化し実現に向けた企画とし、報告書の作成まで伴走することで、活動の振り返りや今後の展開を明確化し、さらなる発展へつなげていく。

##### b. 申請期間

2023年度より、スタートアップコースの申請期間は年度初頭(4月)から年度内(1月末迄)であればいつでも申請することができる。申請期間を特定の短い期間に定めないことにより、学生が正課授業

のなかで社会課題に関心を深め、その課題に対して「こんなことがやりたい！」と思い立ったタイミングで申請へと結びつけることができる。CECに訪れる学生のなかには、部活動やサークルの活動、外部団体等での経験やスキルを基に地域に貢献できることに取り組みたいといった類の相談も多く、そうした相談に対して、スタートアップコースを活用し採択を受ければ、CECによるサポートのもと取り組めることも案内できることで、学生がプロジェクトを計画するうえでのモチベーションにつなげる狙いがある。

#### c. 補助金額とサポート内容

補助金額の上限は5万円の設定としている。サポート内容としては、CECコーディネーターがプロジェクトに伴走する形で企画への助言や、学内施設の事務手配補助のほか、CECが管理するZoomアカウントや機材の貸出も受けることができる。補助金額は決して大きな額ではないが、スタートアップコースの場合、多くは資金補助の側面よりも、実施までの助言や事務的なサポートに求められることが多く、限られた予算のなかで取り組めるプロジェクトを検討していくことや、足りない予算をどのように工面するかも含めて、プロジェクト立ち上げの課題としてサポートを行っていく。

#### d. 審査

企画書と予算書を含めた申請書類による書類審査と、CECコーディネーターによる面談の結果をもとに採択が審議される<sup>(7)</sup>。企画書は、プロジェクトを企画することに至った背景・動機と、プロジェクトの達成目標が大枠にあり、それらをもとに現状の課題分析と、課題に対する活動内容、プロジェクトの終了後に期待する変化、成果指標、今後の展開を順に記載することで、プロジェクトの概要が一つの表として俯瞰できる書式となっている。これらを書き込んでいくこと自体がプロジェクトの整理につながり、活動を具体化させていく作業となっている。

### (2) ステップアップコースの特徴

ステップアップコースは、スタートアップコースと比較して、すでに取組みを継続してきた活動や活動基盤が整っているプロジェクトを対象としている。幅を広げた経費支援や活動サポートを行うことで、既存の活動をよりダイナミックな取組みや挑戦の機会として、発展につながることを目的としている。

#### a. 補助金額

補助金額の上限は30万円であり、交通費に限っては半額補助の設定である。交通費半額に関しては、遠隔地での活動は人数や場所によっては交通費だけで上限を超えてしまうことも多いが、予算が交通費に全て充てられるのではなく、活動費全般に活用してもらおうことを狙いとしている。

#### b. 審査

書類審査とプレゼンテーションによる二つの審査を行い、複数の審査員による審議によって採択を決める<sup>(8)</sup>。書類審査は、実施計画の具体性や活動内容の妥当性などをもとに評価し、活動の実現性や実施まで自立した取組みが可能であるかが評価のポイントとなる。プレゼンテーション審査は2023年度から導入し、申請書の企画内容だけでは汲み取れないプロジェクトに対する想いを審査基準にも含める目的や、書類上では読み取れない活動に対する想いや懸念事項等詳細を確認する場としての意味がある。

### (3) 両制度共通の特徴

両制度に共通する特徴として、ボラサポが決して資金援助のみを目的とした制度ではなく、教育的側面が込められている点にある。

まず、申請書の作成に取り組むこと自体が、漠然と頭の中で描くプロジェクトのイメージを言語化し具体化する作業であり、プロジェクトマネジメントの視点や能力を養う狙いがある。申請書は活動を整理するためのサポート機能を果たすツールとしての意味があり、設定された項目を埋めていくことで、プロジェクト目標の明確化、課題や背景の整理、解決のために行う活動と、その評価指標の設定、今後の展開の想定を行う。書面上での審査が中心となる以上、第三者に分かりやすく伝える工夫を凝らし、プロジェクトの可視化に挑戦することを狙いとしている。

ボラサポの審査項目は、書類審査が「活動ニーズ」「活動動機」「実施計画」「受益者・連携団体」「自身の成長」の6項目で両コース共通であり、ステップコースに限っては、書類審査に加えて、プレゼン審査による「意欲」「構成」「明確性」の3項目があり、これら項目に対して採点を行い評価し審査、採択を決定する<sup>(9)</sup>。

また、ボラサポでは採択回数の上限を定めている。スタートアップコースであれば一度きり、ステップアップコースであれば連続採択は2回までの条件である。これは、将来的に、採択されたプロジェクトがボラサポによる助成に依存せずに活動を継続し、自立した活動への成長を期待しており、ボラサポはそのための一歩として活用してもらうことを想定している。そのため、採択プロジェクトには活動の自立・発展に繋げるための具体的計画を持ち、その計画の実施に必要なかつ使用目的が明確な資金の申請であることや、ボラサポの支援に依存しない運営が可能な資金計画があることも重要といえる。ボラサポがあくまでも団体への支援を目的としたものではなく、プロジェクトを対象とした制度としての特徴であり、申請条件には団体の設立維持・継続や備品購入が主目的ではないことは、その要項にも明記されている。

表1：2023年度ボラサポ制度コースの概要

スタートアップコース		ステップアップコース	
趣旨	プロジェクトの新規立ち上げ、基盤強化。 企画の中身作りや実施段階までコーディネーターのサポートを受けて進めていく。	趣旨	社会課題に対してそれまでの活動の幅を広げた挑戦的・発展的なプロジェクトの支援。
申請期間	2023年4月1日～2024年1月31日までの期間、いつでも申請可。	申請期間	2023年5月29日(月)～6月2日(金)18:00まで
審査	書類審査・面談	審査	書類審査・プレゼンテーション審査
助成内容	活動費補助 1件辺りの上限5万円	助成内容	活動費補助(交通費のみ半額補助) 1件当たりの助成上限30万円
活動サポート	・プロジェクトの企画・準備・実施・広報など ・CECコーディネーターの助言や学内事務手続き等の協力 ・Zoomプロアカウント、センター備品貸出	活動サポート	・Zoomプロアカウントの貸出 ・学内の広報や会場手配等
条件	採択は1度きり。	条件	過去2年間のうち連続2回まで。
採択件数	10件程度	採択件数	4件程度

#### 4 ボラサポの実施状況

##### (1) 制度設立の背景

2016年10月にCECの前身であるボランティアセンターが開設した当初、センターが独自に実施する事業は少なく、2011年の東日本大震災発生直後に発足した大学公認学生ボランティア団体「ボランティア・ステーション」の学生たちを中心に、学生が企画するボランティアプログラムを支援するのが主な役割であった。センターが掲げるミッションのもと、既存の学生団体との関係性に留まらず、より多くの学生や教職員にボランティア活動への参加機会を提供し、学内のボランティア活動の可視化と学内外の組織・人材との連携、そして広くセンターの存在を知ってもらうことを目的に、青山学院大学の学生と教職員すべてを対象にした助成制度として、ボラサポ制度の開発が検討され、2017年4月から運営が始まった。

## (2) 2017～2018年度

制度運用の初年度となる2017年には第1期（前期）に8件、第2期（後期）に4件、合わせて12件のプロジェクトから申請があり、そのうち7件のプロジェクトを採択した。採択されたプロジェクトの多くは震災・復興支援に関連した活動であり、そのほか国際支援や地域での清掃活動などジャンルは多様であった。また、申請は学生団体の他、体育会や教職員による企画もあり申請者の属性も様々で、審査においても制度運用のスタート期として多様なボランティアプロジェクトを採択する結果となり、学生に留まらない幅広い活動のサポートへと繋がった。2017年11月に開催された青山学院大学ボランティアセンター開設1周年記念シンポジウムでは、3つの採択プロジェクトから活動報告が行われた。2018年には第1期、第2期合わせて8件の申請、7件のプロジェクトを採択。2017年同様に災害・復興支援や国際支援の活動が多く採択され、そのなかでも動物保護といった啓発活動を主としたプロジェクトはスタートアップとしての発展の期待を込めて採択された。

2017～2018年度の1期・2期合わせて4回実施するなかで、課題も浮かび上がってきた。プロジェクトの審査において、活動実績を十分に積んできた団体が作成する申請書の企画内容と、これから活動をスタートさせる団体が作成する申請書の企画内容では、その企画の具体性に大きな差が生まれてしまい、採択の基準をどのレベルに合わせるかといった審査上の困難が生じた。多くの学生にとっては、助成金の申請経験はなく、企画書の作成も初めてというなかで、企画書作成は心理的ハードルが高く、新しくプロジェクトを立ち上げたばかりのプロジェクトには制度の申請自体が難しく、制度利用者の幅が限定的になることが懸念された。そこで、既存の活動や実績がなくても、想いと仲間が集まれば活動を実現できることを応援するための制度とすべく、制度運用の見直しが行われた。

## (3) 2019年～2020年度

2019年からは、より制度利用の幅を広げるため、プロジェクトの立ち上げを応援するためのスタートアップコースと、これまでの取り組みをより発展させることを応援するためのステップアップコースの2つによる目的別コースを創設した。同時に、申請期間中に制度申請のポイントを伝えるための制度説明会・ワークショップを開催し、過去に採択経験のあるプロジェクトの学生から、制度活用のメリットや申請書作成のポイントを伝えてもらい、より多くのプロジェクト申請につながる取り組みを行った。

スタートアップコースにおいては、2019年第1期に3件のプロジェクトから申請があり、2件を採択した。採択されたプロジェクトの一つ「世界のダイヤモンド問題を考えよう～映画『ダイヤモンドの来た道』～」は、正課の授業での学びから、身近にあるファッションや愛の象徴であるダイヤモンドが作られる背景に犠牲となっている問題があることを知ったことをきっかけに有志メンバーが立ち上げたプロジェクトであり、審査においても正課の学びによる関心から仲間を集め、社会課題に対して挑戦するその意欲がスタートアップコースの趣旨に沿うものとして評価され、コーディネーターが伴走を行うことで、外部ゲストの招致や学内での映画上映会の開催を実現させた。ステップアップコースでは、海外での国際支援活動と東北での復興支援活動を行う3件のプロジェクトが採択され、各コースの趣旨に沿った活動が実施された。しかし、年度後期に募集を行った第2期は申請件数が0件と申請者が集まらず、学内での広報等、制度の周知に課題が残る結果となった。加えて、2019年度末には新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、大学内での授業ならびに課外活動に制限が生じたことにより2020年度内のボラサポの実施は断念した。

## (4) 2021～2022年度

2021年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響のもと、飲食を伴うイベントや宿泊を伴う活動は対象外とする制限が生じたがボラサポの募集は実施した。2021年度は両コース合わせて11件と最多の申請があり、スタートアップコースが9件、ステップアップコースが2件である。両コースの申請数の差から、コロナ禍の自粛や制限下で何か新しいことに挑戦したいという想いを持つ多くの学生が新たなプロジェクトを生み出した一方で、もともと活動を継続してきたプロジェクトは活動することが叶わず、申請に結びつかなかったと推察する。プロジェクトは、子どもの支援や女性のキャリア、生理をテーマとした活動など、SDGsの流行に伴い、アドボカシー活動に関連した内容が多いことも特徴的といえる。また、活動方法の点でも、オンラインツールを駆使したイベントや、SNSを積極的に活用した啓発活動が展開したことはコロナ禍ゆえに発展した活動形態である。これまで国際支援や震災・復興支援の活動が申請

の殆どを占めていたため、センターとのつながりや制度利用者の幅が広がった年であるといえる。

2022年度は8件のプロジェクトから申請があり、スタートアップコース2件、ステップアップコース3件の、合わせて5件を採択し、いずれのプロジェクトも対面での活動に取り組んだ。コロナ禍以前に採択されていた東北での復興支援プロジェクトも再度採択され、現地での活動を再開することができた。2023年3月には、CEC主催の青山学院大学学生ボランティアフォーラムを開催し、スタートアップコースとステップアップコースそれぞれの採択プロジェクトメンバーから活動の報告がされた。

2021、2022年度の審査においては、数として多くの申請があったものの、プロジェクト実施にあたっての目標設定や活動内容が十分に検討されていないものも散見し、採択率としては低くなっている。

#### (5) 2023年度

2023年度は各コースの審査や採択方法の大幅な見直しを行った。スタートアップコースは、これまで年に一度の申請受付としてきたが、年度内(4月から翌年1月末まで)であればいつでも申請を可能とした。また、これまでは3人以上のグループであることが条件であったが、個人からの申請も対象とし、申請書の提出とCECコーディネーターによる面談をもとに採択審議を行うことで、申請から採択までの流れを簡略化した。これにより、プロジェクトを立ち上げたいと思ったタイミングで、スムーズにサポートを行うことが可能な運用となった。また、ステップアップコースは、それまで申請書のみでの審査で採択を審議していたが、申請書のみでは読み取れないプロジェクトの意図や確認事項も多いことや、ボラサポの利用を通じてプロジェクトメンバーとCECとの連携、つながりをより増やしていくことを目的にプレゼン審査を取り入れた。2023年度はスタートアップコースの申請が3件、ステップアップコースは2件であり、いずれのプロジェクトも採択している。また、ステップアップコースに採択されたプロジェクトの一つは、2022年度にスタートアップコースに採択された団体であり、スタートアップでの活動経験から団体としての基盤を整え、ステップアップの挑戦へとつながったプロジェクトである。

#### (6) 採択プロジェクトの傾向

2017年から制度を開始したボラサポであるが、これまでの運用からその制度の形も柔軟に変化を重ね、これまで52件の申請のうち36件のプロジェクトが採択されてきた。(資料「ボラサポ制度採択プロジェクト一覧」参照)

採択プロジェクトの傾向や構成メンバーに着目すると、海外での活動を伴うプロジェクトには、グローバルな実践に重点をおく地球社会共生学部の学生が多く、本制度を活用することで自己実現や社会課題解決への挑戦を実現させている。また、動物保護やジェンダー、エシカル消費など、社会や青学生への啓発活動を行うプロジェクトには国際政治経済学部の学生の割合が高い。そのほか、こどもの支援や教育に関するプロジェクトには教育学部の学生が多く、プロジェクトのテーマに応じた学部の傾向がうかがえる。

教職員が主として実施したプロジェクトは全体として少ないが、2022年採択の「古着回収プロジェクト」においては、相模原キャンパス事務部学務課の職員が主導となり、教員や学生、職員が学部として一同で取り組んだプロジェクトとして特筆したい<sup>(10)</sup>。

### 5 採択プロジェクトの内容と成果

本節では、ボラサポの採択を受け活動を行ったプロジェクトのうち特徴的な活動を紹介する。制度を利用したことでの活動の発展、その後の展開について触れる。

#### (1) ペットボトル灯籠プロジェクト(採択:2019年度ステップアップコース)

本プロジェクトは、学生団体Youth for Ofunatoが岩手県南部の大船渡市三陸町越喜来地区で毎年開催される三陸港まつりの開催支援を中心とした活動であり、ボラサポの採択が最も多いプロジェクトである。団体としては、2011年の東日本大震災発災後に認定NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパンが大船渡市で展開した支援活動に青学生が参加したことを契機として、同年10月に学生団体を立ち上げ、「大船渡と私たちの未来のために」をビジョンに掲げ、大船渡市越喜来地区の住民との関係を構築し、地域コミュニティの課題や地域活性化を目指して活動を10年以上継続している。ボラサポのプロジェクト

クト採択は制度開始初年度の2017年から始まり、震災によって加速した少子高齢化と人口減少に伴う祭りの担い手不足の課題に取り組むべく、三陸港まつりに地域住民が主体的に参加できる機会の創出として、ペットボトル灯籠を活用し住民参加型のイベントを企画することで祭り全体を盛り上げる活動を行ってきた。プロジェクトとしては、ペットボトル灯籠の作成を主軸としながら、地元の中학생や高校生を企画運営に巻き込むことで、世代間継承や多世代交流による地域の活性化に取組み、まつりの担い手の増加や地域の繋がり強化を目指している。また、近年は中學生への学習支援や剣舞・獅子舞などの文化継承に取り組んでいる。(図2)

同プロジェクトは夏と冬または春に開催するイベントの派遣に加えて、複数回の事前派遣も毎年行っており、それらを合わせると総額100万円を超える活動である。学生団体としての資金繰りは常に課題となっており、その点においてボラサポ制度の資金援助としての役割は強いといえる。ボラサポのステップアップコースは上限30万円までの補助であるためそれ単体でプロジェクトの総額を賄うことはできないが、同団体はボラサポ以外の外部助成金にも積極的に応募し、資金確保に取り組んでいる<sup>(11)</sup>。しかし、継続して採択が受けられる助成金も限られており、ボラサポも採択限度回数には限度が定められているため、回数制限の撤廃に対する要望も挙がっている。資金援助以外の側面としては、同団体が本学の公認団体ではなく、任意団体として活動を行っているため、ボラサポへの採択を得ることが大学の公認を受けた活動である証明になり、連携団体や社会的信用を得る意味でも制度もたらず役割があるといえる。

図2：2019年度ペットボトル灯籠プロジェクト 中學生と作成したメッセージパネル



出典：青山学院大学シビックエンゲージメントセンターボラサポ2019年度第1期結果  
[https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/1st2019\\_result/](https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/1st2019_result/)

## (2) Tetote ～みんなで「生理」と向き合おう～（採択：2021年度スタートアップコース）

本プロジェクトは2021年度にスタートアップコースで採択されたプロジェクトで、学生団体Tetoteの有志メンバーによる活動である。同年12月～翌年1月にかけて本学17号館の男子・女子・多目的トイレに生理用品の無料設置ならびに生理の理解に関するポスターの掲示やSNSを活用した啓発活動を行った。生理用品の設置期間中、プロジェクトメンバーが毎日交代で生理用品の消費量の確認と補充を行い、青学生を対象としたGoogleフォームを用いたアンケートを実施し、プロジェクトへの意見・感想、生理用品を学内トイレに設置することの賛否を問うた。また、本学保健管理センターとの共催で青学生に向けたオンラインイベント「Tetote × 保健管理センター～みんなで『生理』と向き合おう～オンラインイベント」を開催している。生理用品は約1ヵ月半の実施期間のうち、4000個近くが消費され、アンケート結果から、学内に生理用品を設置することの是非に関して9割から賛成の回答(n=178)が得られた。「生理用品が手元になく困っていたので助かった」というコメントもあり、緊急的な支援の役割も果たすことができた。また、男性トイレに生理用品を設置したことに対する反応には、「自らは使用しないがパー

トナーと生理について話すきっかけとなった」というコメントがあり、「生理の有無にかかわらず誰もが生理の理解を深め、生理の話題をタブー視しない環境を作っていく」というプロジェクトの目標にもつながる反応を得ることができた。(図3)

同プロジェクトはボラサポの活動期間終了後、2022年5月にプロジェクトを通して得たアンケート結果をもとに学内で報告会を開催した。プロジェクトの上位目標でもあった「学内トイレの生理用品常設」を求めるため、その必要性や学生たちの想いやニーズを教職員や外部に向けて発信し、その様子はメディアにも取り上げられた<sup>(12)</sup>。

図3：トイレに設置する生理用品を補充するプロジェクトメンバーの様子



出典：青山学院大学シビックエンゲージメントセンターボラサポ 2021年度ボラサポ採択結果・プロジェクト報告  
[https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/2021\\_result/](https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/2021_result/)

本プロジェクトにおけるボラサポの活用がもたらす効果として、まず学内の施設利用許可の補助が大きい。学内トイレに生理用品を設置することは学内での施設利用許可を得ることであり、学生のみで許可を得るハードルは高い。ボラサポに採択され、センターによる公認を受けて実施することが活動の前提条件にもなっていた。また、学生が閲覧するポータルサイト上へのアンケート調査掲載など、学内周知の協力も役割として効果的であった。また、本学保健管理センターとのイベント共催は、プロジェクトを伴走したコーディネーターによる学内での情報共有がきっかけであり、学生への周知に限らず、学内部署や他センターを横断した連携ができたことも活動の幅の広がりにつながったといえる。

### (3) しぶっこ主催のこどもテーブル「しぶテ」(採択：2021年度ステップアップコース)

しぶっこは、渋谷区こどもテーブル事業<sup>(13)</sup>に参加した学生ボランティアの有志が集い2020年に結成された学生団体である。こどもテーブルを軸に地域交流を促す主体となり、情報・魅力を発信することを団体のミッションに掲げ、こどもテーブル活動へのボランティア参加や取材を行い、団体SNSでこどもテーブルに関連した記事やスライドを作成し、こどもテーブル団体の活動紹介や参加レポートの発信を行う。それまでのしぶっこの活動は、SNSによる情報発信が活動のメインであるが、団体メンバーが増えたことをきっかけに団体としての活動の幅を広げるため、ステップアップコースへの挑戦を行った。プロジェクトの内容は、これまでに活動に参加し関係性を構築したこどもテーブル団体と連携する形で、ねりきり作りとキャンドル作りの活動を2日間行った。コロナウイルスの感染拡大防止のため、やむなくオンライン開催となったが、参加する小学生たちを飽きさせないための工夫や雰囲気づくりを学生視点で行っている。(図4)

これまでボランティアとしてこどもテーブルに参加する側であったしぶっこが、こどもテーブルの魅力発信するという団体の理念はそのままに、自分たちが主催のプロジェクトに挑戦し、子どもたちや団体同士のつながりを狙った活動を行ったことは、ボラサポの趣旨に適ったものであり、団体としてのステップアップにつながるプロジェクトであったと受け止める。

図4：Instagramでオンラインイベント開催の様子を発信



出典：青山学院大学シビックエンゲージメントセンターボラサポ 2021 年度ボラサポ採択結果・プロジェクト報告  
[https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/2021\\_result/](https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/2021_result/)

#### (4) タイ北部山岳地域オーガニック・コーヒー農家支援プロジェクト（採択：2018 年度）

本プロジェクトは、タイへの学部留学を経験した地球社会共生学部の学生が中心となって実施したプロジェクトである。留学中にタイ北部チェンライ県にて山岳少数民族の支援団体「ルンア ルン・プロジェクト」の中野穂積氏（本学の卒業生）に出会い、彼女の活動と、この土地の人々が丹精込めて栽培している有機コーヒーに感銘を受けたことがきっかけとなり、このコーヒーを通じて山岳少数民族の暮らしや、現地の魅力を日本の若い世代へ伝え広めていくことを目的としたプロジェクトが立ち上がった。実施内容としては、夏期休業期間を利用してプロジェクトメンバー全員が現地調査に赴き、コーヒー生産者の文化や生活状況について理解を深めた後、相模原祭にて、現地から仕入れたタイ北部産のコーヒーの提供資料の展示を行った。また、青山学院高等部にて開催された Global Week II にて「コーヒーを通じた国際協力～東ティモール VS タイコーヒーで村おこしディスカッション～」と題した企画が実施され、高等部の生徒自主学习団体「BLUEPECO」と共に登壇し、それぞれの活動報告と、お互いのフィールドから見えてくる国際協力の在り方について活発な議論がなされた。本プロジェクトの主な成果としては、これらの実践を通して、幅広い世代へタイ北部産のオーガニック・コーヒーの魅力や、山岳少数民族の暮らしとその文化的背景について伝えることができたことであったといえる。また、センター事業としては、本学の卒業生とつながりを持ちながらプロジェクトが進められたことや、大学（ボランティアセンター）と高等部が連携して企画が実現されたことから、ボラサポ制度を通じて本学のネットワークが強化される可能性が示唆された。なお、翌年の 2019 年度においても、同地域をフィールドとし、同支援団体を協力団体としたプロジェクトが新たなメンバーのもとで申請され、採択されている。

#### 6 制度の課題・今後の見通し

これまで制度の概要と変遷を整理し、ボラサポを活用した特徴的なプロジェクトについて報告してきた。本節では、これまでの採択団体の傾向から現在のボラサポにおける制度の課題を整理し今後の見通

しについてまとめる。

### (1) 申請数の停滞

ボラサポの申請数は年によりバラツキはあるが、最も申請数が多かった年は2021年の11件で、2019年・2022年は8件の申請、2023年には5件と減少している。特にステップアップコースは2021年と2023年が2件の申請に留まっており、制度としての採択予定件数を割っている状況である。より多くのプロジェクトをサポートし、活動を促進させていくためには、制度の存在や活動内容を多くの学生や教職員に周知することが重要課題としてある。特にスタートアップコースの対象となる新規のプロジェクトや興味を持つ学生を増やすためには、普段からセンターが主催するイベントや活動に参加する学生へ制度を紹介していくことが効果的と考える。

また、申請書作成による申請ハードルの高さもあるといえる。NPO 法人アクションポート横浜が実施する「横浜アクションアワード」は、書類審査とオンライン審査、プレゼンテーション審査の3つの審査で構成されているが、書類審査の対象となるエントリーシート自体がPowerPoint形式のプレゼン仕様となっており、視覚的にも企画が整理しやすい構成かつ、その後の審査にも活用されていくため、学生にとっても負担に感じにくい工夫がされている。申請書の内容を簡素化することは教育的観点からも慎重に行うべきであるが、学生がプロジェクトの目的や課題をクリアにし、整理しやすくする工夫は検討の余地がある。そのほか取組めることとしては、ボラサポに限らず外部助成金への申請も視野にいれた助成金申請と活用のための研修機会を設けることなども考えられる。

### (2) 活動範囲の拡大と管理の難しさ

制度創設当初、その申請の多くは復興支援や国際支援に関連したプロジェクトであったが、利用するプロジェクトの増加により、その活動範囲やジャンルの多様化が進んでいる。これに伴い活動の管理や審査の難しさも増しており、柔軟な制度運営が求められている。日本財団ボランティアセンター（当時は日本財団学生ボランティアセンター）が明治学院大学とのパートナーシップを結んで実施した「Gakuvo Style Fund<sup>(14)</sup>」は2019年にその助成事業を終了した。事業終了の明確な理由は不明だが、支援する立場から見た課題として波多野(2019:35)は、「制度に対する支援する側とされる側の意識の乖離」があったことを指摘している。支援側は助成金を活用することでの学生の成長を望むが、支援される側は当面の活動が成功裡に終われば良いという認識が、特に常連団体に顕著にあり、「活動自体は安定しているものの、結果として3回目、4回目の申請で成長が見込めない団体よりも荒削りでも成長の期待が持てる団体に援助する結果となって現われた。」と述べているように、制度の趣旨に沿った採択のバランスを管理する難しさがある。

また、惜しくも採択から漏れてしまい不採択となったプロジェクトに対するフォローやサポートも重要な課題といえる。プロジェクトを計画し、申請書を作成・完成させ、ようやく申請まで漕ぎつけたプロジェクトに対して、不採択通知のみで繋がりが途切れてしまうことは、CECとしてのつながり・連携の幅を狭めることでもあるため、金銭的補助は行わないまでも、一部の事務的サポートや、企画をブラッシュアップするための場の設定、制度外の助成金や連携団体の紹介など、何らかの支援を行えることが望ましい。

### (3) 市民協働を推進する制度としての仕組みづくり

現状、ボラサポの運用にかかわるのはCEC関係者と申請者のみであり、学内に限定されていることも課題といえる。CECが2022年にボランティアセンターから改組し、これまでのボランティア活動支援に加え、市民協働活動の強化に取り組んでいくうえで、ボラサポも制度として市民協働を促進するための仕組みづくりを検討していく必要がある。例えば、学内外へ向けた報告会を設定することも一つである。また、聖学院大学が実施する「ボランティア・まちづくり助成事業<sup>(15)</sup>」のような、審査段階で地域の小中学校や地域住民を巻き込んだ地域参加型助成制度とすることも、広くボラサポやプロジェクトの取組みが認知され、学生にとっては連携先や支援先を増やす機会となり、大学にとっては地域連携の機会創出となる。このような市民協働活動を推進するための仕組みづくりも今後検討の余地があるといえる。

## 7 おわりに

これまでボラサポの概要や制度の変遷を整理し、特徴的なプロジェクトについて触れた。ボラサポは本学の学生・教職員が主体となって取り組むプロジェクトを対象とした助成制度であり、その役割は資金援助のみならず、アドバイザー活動、マッチング活動、資源提供活動、広報活動、基盤強化等の機能を備えている。申請書を作成していく過程での課題分析や目標の可視化を行い、第三者へ伝わる企画書づくりを行うことや、大学として認めたプロジェクトとして活動先に対する信頼感を得て活動を行えること、資金援助やコーディネーター伴走のもとで活動後の発展を見据えたプロジェクトを実施していくことは、制度を利用した学生にとっての成長の機会として果たす役割も大きい。

本論では、制度を利用することでの学生の学習的貢献度を指標として示すことは困難であり今後の課題とする必要がある。2022年度採択の「共生社会実現へのメイクアッププロジェクト」では、メイクを得意とする青学生が、障がいのある人とオシャレを楽しむ活動に取り組み、当時4年生の代表学生はその後就職先として障がい福祉サービスをメイン事業とする企業に就職を果たした。このように学生がプロジェクトに取り組むことでその後の進路への影響や就職活動における貢献等も一つの定性的指標として着目していきたい。

制度としての課題は未だ多いが、これまでも制度運用のなかで課題を常に検討し、活用しやすい制度となるよう修正を行ってきた経緯もある。2023年度は前節で述べたとおり、各コースの申請期間や審査方法を大きく変えて実施しており、その成果については今後検証していく必要がある。制度の中身を修正していくだけでなく、目的に応じて、ボラサポとは異なる新たな補助制度を創設していくことも求められよう。

2017年から2023年までの7年間で、多種多様なプロジェクトがボラサポを活用して発展してきたように、ボラサポもまた、より青学生・教職員にとって利用しやすく、活動の幅が広がるための教育的側面と社会貢献に資する制度としていくことを今後の検討課題としていきたい。

## 注

- (1) シビックエンゲージメントセンターが掲げるミッションには、「学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること」「大学の持つ専門性や強みを活用してボランティア活動や市民協働活動の社会的効果を向上すること」「社会貢献活動への参加にともなう教育的効果を向上させること」の3つがある。
- (2) 2023年度時点CECではボラサポの他、青学生を対象とした災害および復興支援ボランティアの旅費を補助することを目的とした「災害・復興支援活動に対するサポート制度」と、教職員の自発的な社会活動への参加を促進するための「教職員ボランティア活動補助プログラム」がある。
- (3) 大学ボランティアセンターとは、大学内に設置される中間支援機能を持った部署であり、主に地域からのボランティアニーズの集約とボランティア活動を希望する学生とのマッチング機能を有している。名称はボランティアセンターに限らず、ボランティア情報室、ボランティアステーション、サービスラーニングセンター等多様な名称がある。
- (4) 調査では、ボランティア活動を専門に担当する部署がある」は約2割(127大学)、「他業務とともに、ボランティア活動を担当する部署がある。(学生部、教務部、宗教部等)」は6割(379大学)の結果となっている。
- (5) 同調査における13の支援項目は、1情報収集提供活動、2アドバイザー活動、3マッチング活動、4学習支援活動、5プログラム開発・運営活動、6資源提供活動、7調査研究活動、8広報・認知度アップ活動、9ネットワークワーキング活動、10一般啓発活動、11基盤強化活動、12授業支援活動、13災害支援活動、14その他に分類されている。
- (6) 資源提供活動の項目は、ミーティングスペースや作業スペースなどの「場所」の提供と、センター内パソコン、図書、文房具などの「もの」、学内助成金、学外助成金、ボランティア保険の保険料助成の「お金」の主に3つに分類されている。
- (7) 面談はCECコーディネーター1～2名程度で実施し、企画の概要や活動計画を聞き取る。その後、CECコーディネーター、センター長、副センター長、所管事務内で採択協議を行い、CEC実務委員会にて採択・不採択が承認される。審査期間は申請から採択通知まで3～4週間程であり、採択・不採択にかかわらず、評価

に関するアドバイスを申請者には行う。

- (8) 審査委員は年度により増減はあるが、CEC 実務委員会より5～7名程度で構成され、申請から採否通知まで約1か月の間で行われる。採否の結果にかかわらず、結果の理由を伝え、今後の活動に活かしていくことや、経費支援を必要としない活動にはアドバイスを行うことを通知している。
- (9) これら審査項目は募集要項に記載されており、申請者は企画段階でそれら項目を意識したプロジェクト立案を行うことができるかが評価のポイントでもなる。
- (10) 青山学院大学 HP. 「【地球社会共生学部】 タイ北部の山地民の方々に衣服をお届けすることができました！」  
参照先 : [https://www.aoyama.ac.jp/faculty112/2023/news\\_20240117](https://www.aoyama.ac.jp/faculty112/2023/news_20240117) (2024.1.17)
- (11) 同団体はボラサポの他、一般財団法人学生サポートセンターの学生ボランティア団体助成事業の採択(2021年度) 全国被災地子ども支援 3.11 基金の採択(2022年度) など、外部助成金に積極的に獲得、活用している。
- (12) 東京新聞. (2022年7月23日). 男性のトイレ優しく発展中「困らず使えることは人権を守ること」. 参照先 : <https://www.tokyo-np.co.jp/article/191358>
- (13) 渋谷区子どもテーブル事業は渋谷区社会福祉協議会が運営する事業であり、渋谷区版ども食堂として、「身近な地域でつながり支えあう基盤づくり」を活動理念に渋谷区内各地で活動が広がっている。2023年5月時点で子ども食堂団体は64団体、居場所づくり・学習支援団体は50団体と、100以上の団体となっている。
- (14) 日本財団学生ボランティアセンター(現:日本財団ボランティアセンター)が2014年に創設した全国規模の学生を対象とした助成事業。5年間で全209団体を支援しており、本学にも採択を受けた学生ボランティア団体がある。
- (15) 聖学院大学では、「ボランティア・まちづくり活動助成事業」として、学生が取り組むボランティア活動の応援や活性化を目的に、同窓会と共催による公開審査会・ドネーションパーティーをおこなっている。それには同大学所在の上尾市内の小中学生が審査員として関わっている。

## 引用文献・参考文献

Youth for Ofunato. (2024年2月). Youth for Ofunato 公式サイト.

参照先 : <https://youthforofunato311.jimdofree.com/>

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター. (2022年3月). 「2022年度学生ボランティア・フォーラム開催報告」.

参照先 : <https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report/20230303/>

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター. (2023). 「シビックエンゲージメント研究第1号」, 70.

青山学院大学ボランティアセンター. (2017年11月18日). 青山学院大学ボランティアセンター開設1周年を迎えて  
～” 経験” ×” 繋がり” で更なる「発展」を!～.

参照先 : <https://www.aoyama.ac.jp/info/event/2017/02355>

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター. (2020). 「大学生のボランティア活動等に関する調査報告書」, 20.

佐藤亜希. (2023). 「コロナ禍における学生のボランティア活動動機の変化 - ボランティア活動に関するアンケートから -」.  
『青山学院大学シビックエンゲージメント研究第1号』, 32-33.

聖学院大学地域連携・教育センター. (2021). 「聖学院大学大学地域連携事業報告」, 10-11.

東京ボランティア・市民活動センター. (2021). 大学ボランティアに関する全国実態調査報告書, 7

日本財団学生ボランティアセンター, 2017, 「全国学生1万人アンケート～ボランティアに関する意識調査 2017～」

波多野洋行. (2019). 「明治学院大学ボランティアセンター報告書第16号」, 35.

資料

ボラサポ制度採択プロジェクト一覧

年度・件数	プロジェクト名	キーワード	構成メンバー
2017年 第1期 申請数：8件 採択件数：4件	三陸港まつり開催支援「ペットボトル灯籠」の作成を通じた地域住民の参加機会の創出	復興支援、学生団体、国内遠方	学生9名（国政経8、国政経研究科2） 一般1名（他大学） 卒業生1名
	体育会レスリング部 大島クリーンプロジェクト	清掃活動、部活動	学生24名（経済11、経営7、総文3、社情2） 職員3名
	Samaritans Place 支援プログラム	国際支援、遠方	学生4名（教育3、国政経1） 一般2名
	韓国スタディツアー	文化交流、海外、遠方	学生17名（地球17）
実施サポート2件	飯館村写真展とギャラリートーク	復興支援、職員企画	職員3名 教員1名（教育）
	相模原キャンパス周辺地区での清掃活動+ a	清掃活動、職員企画	職員3名
2017年 第2期 申請数：4件 採択件数：3件	Table For Two 寄付金付きドライブルーツ販売	国際支援、復興支援、学生団体	学生13名（総文5、文3、経営2、教育1、法1、国政経1） 卒業生1名
	猪苗代応援スタディーツアー	復興支援、国内遠方	学生10名（文9、教育1） 教員1名（講師）
	大船渡地域活性化プロジェクト	復興支援、学生団体、国内遠方	学生10名（国政経8、国政経研究科2） 一般1名（他大学） 卒業生1名
2018年 第1期 申請数：4件 採択件数：3件	タイ北部山岳地域オーガニック・コーヒー農家支援プロジェクト	国際支援、国外活動	学生3名（地球3） 教員2名（地球2）
	相馬市海浜地域学習支援プロジェクト	正課発展、復興支援、国内遠方、教員企画	教員1名（教育） 学生15名（教育15） 職員1名
	相模原自然教室プロジェクト	自然体験、こども支援	学生16名（地球16）
2018年 第2期 申請数：4件 採択件数：4件	Samaritans Place 交流プログラム	国際支援、海外	学生7名（教育5、国政経2）
	フィリピン食育&衛生知識プロジェクト	国際支援、海外	学生18名（地球18）
	猪苗代魅力発信スタディーツアー	正課発展、復興支援、国内遠方	学生6名（教育6） 教員1名（講師） 一般1名
	動物保護、啓発活動	啓発活動、動物保護、団体立ち上げ	学生6名（国政経6）

2019年 第1期  応募総数：8件 スタートアップ：3件 ステップアップ：5件  採択件数：5件 スタートアップ：2件 ステップアップ：3件	世界のダイヤモンド問題を考えよう ～映画『ダイヤモンドの来た道』～	スタートアップ、エシカル消費、映画上映、啓発活動	学生3名(文3)
	～顔と顔が見えるつながり～タイ北部オーガニックコーヒープロジェクト	スタートアップ、正課発展、国際支援、海外	学生3名(地球3) 教員1名(地球)
	相馬市立中村第二中学校での夏休み学習支援プロジェクト	ステップアップ、正課発展、復興支援、国内遠方	学生9名(教育9) 一般5名(他大学5)
	ペットボトル灯籠プロジェクト	ステップアップ、復興支援、学生団体、国内遠方	学生12名(国政経8、国政経研究科2、法1、経済研究科1) 一般2名(他大学2) 卒業生1名
	子どもの意識改革プロジェクト	ステップアップ、国際支援、学生団体、国外活動	学生12名(地球10、理工1、コミュ1)
2019年第2期	申請プロジェクトなし		
2020年	新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、実施なし。		
2021年 申請数：11件 スタートアップ：9件 ステップアップ：2件  採択件数：5件 スタートアップ：4件 ステップアップ：1件	渋谷区×女性議員×青学～キャリアの選択肢を広げよう～	スタートアップ、トークイベント、ジェンダー平等、オンラインイベント	学生8名(国政経4、教育2、総文1、文1)
	子供の居場所作りプロジェクト	スタートアップ、こども支援、学生団体	学生5名(地球1、コミュ1)
	Free&Smile～生理期間をもっと自由にもっと笑顔で～	スタートアップ、ジェンダー平等、啓発活動	学生3名(地球2、コミュ1)
	Tetote～みんなで「生理」と向き合おう～	スタートアップ、ジェンダー平等、啓発活動、学生団体	学生9名(文3、経営2、国政経2、法1、教育1) 教員1名(法)
	しぶっこ主催のこどもテーブル「しぶて」	ステップアップ、こども支援、学生団体、オンライン	29名(教育8、文6、法6、国政経4、総文3、地球1、コミュ1)

2022年 申請数：8件 スタートアップ： 4件 ステップアップ： 4件  採択件数：5件 スタートアップ： 2件 ステップアップ： 3件	共生社会実現へのメイクアッププロジェクト	スタートアップ、障がい者支援、学生団体	学生3名（法2、文1） 一般2名（他大学2）
	あらとう～innovation around 20～ スタートダッシュ企画	スタートアップ、エシカル消費、学生団体	学生4名（国政経2、経営1、教育1）
	Let's Open New Doors!	ステップアップ、こども支援、社会体験、学生団体	学生7名（教育3、コミュ3、文1）
	古着回収プロジェクト「北タイに幸 服を届けタイ」	ステップアップ、国際支援、寄付、職員企画	学生15名（地球15） 職員8名 教員1名（地球）
2023年 申請数：5件 スタートアップ： 3件 ステップアップ： 2件  採択件数：5件 スタートアップ： 3件 ステップアップ： 2件	ペットボトル灯籠プロジェクト「未 来を灯そう～越喜来 2023～」	ステップアップ、復興支援、学生団体、国内遠方	学生6名（法5、交換留 学生1） 一般2名（他大学1、一 般1）
	脱ビニール使い捨てプロジェクト	スタートアップ、啓発活動、環境問題	学生2名（文1、総文1）
	6大学連続難民映画祭	スタートアップ、難民支援、映画上映	学生6名（国政経3、地球3）
	青学生と子どもたちの「ゆめどこ」	スタートアップ、子ども支援、工作	2名（コミュ2）
	ペットボトル灯籠プロジェクト～よ り多くの住民の参加を目指して～	ステップアップ、復興支援、学生団体、国内遠方	学生5名（法3、文1、 教育1） 一般9名（他大学8、一 般1）
あらとう青山祭 2023	ステップアップ、エシカル消費、学生団体	学生8名（経営3、国政 経2、経済1、教育1）	

出典：青山学院大学シビックエンゲージメントセンター HP レポートボラサポをもとに筆者作成  
 ([https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report\\_category/v-support/](https://volunteer-aoyamagakuin.jp/report_category/v-support/))



&lt;実践報告&gt;

# 相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト 「わかば」実践報告 －プロジェクトの立ち上げ－

水谷 耕平<sup>1</sup>・「わかば」2023年度学生メンバー<sup>\*2</sup><sup>1</sup> 青山学院大学 シビックエンゲージメントセンター<sup>2</sup> 青山学院大学

Practical Report on the “Wakaba” Project (Discovery, Creation and Dissemination  
Project of Sagami-hara City Chuo Ward’s Attractiveness) :Project Launch

MIZUTANI Kohei<sup>1</sup> “Wakaba” Student Members for the 2023 Academic Year<sup>2</sup><sup>1</sup> Civic Engagement Center, Aoyama Gakuin University<sup>2</sup> Aoyama Gakuin University

キーワード：大学と自治体の連携、地域魅力化、市民協働、ボランティア

## 1 はじめに

本稿は2023年度、青山学院大学（以下「本学」とする）シビックエンゲージメントセンター（以下「CEC」とする）主催の新たな市民協働プロジェクトとして発足した、「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト」（愛称：「わかば」）について、その発足の背景と立ち上げ1年目の活動経緯について報告するとともに、同プロジェクトの活動を基に、地域活性化に大学生が関わることの意義についても考察を試みるものである。

大学における地域連携・地域活性化の取り組みについての実践報告や実践報告的側面を持つ研究論文等は大宮（2005）や橋本（2010, 2012, 2014, 2015, 2021）、山田（2017）、鎗田（2005）など数多くあるが、課外活動としての地域活性化等の取り組み事例について書かれたものは少なく、あるとしても各大学ボランティアセンター等の年次報告書等に報告として簡単に記述されている程度であることが多い。そこで本稿では、実践報告として課外活動としての市民協働プロジェクトの取り組みを振り返り、考察するものである。加えて、プロジェクトの担当コーディネーターと参加学生の共著とし、実践報告の執筆自体もプロジェクトの一部に組み込んでいることが本稿の特徴である。

## 2 プロジェクト立ち上げの背景及び経緯

相模原市の概要については三神・水谷（2023: 39）において解説されているため、ここでは割愛するが、中央区<sup>(1)</sup>はその相模原市の約38%に当たる274,356人<sup>(2)</sup>が居住している地域である。これは中央区だけでも福島市や水戸市、青森市など他県の県庁所在地にも匹敵する人口規模であることを意味している<sup>(3)</sup>。

本学相模原キャンパスのCECでは、これまで「相武台団地活性化プロジェクト」、「藤野プロジェクト」という二つの市民協働プロジェクトを実施してきた。相模原市内3区のうち、前者は南区、後者は緑区をそれぞれ活動のフィールドとしているが、キャンパスが所在する中央区では市民協働プロジェクトが実施されていなかった。それは裏を返せば、中央区はそこまで大きな課題が目に見えて現れている

\* 相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト（愛称：わかば）の2023年度学生メンバーは次の通り：泉隼人、伊東舞波、岩本愛佳、宇治学人、江頭花華、大河原遥夏、大原亜里咲、大林慈、春日茉莉香、小泉彩乃、佐々木歩里、椎野愛実、平賀一輝、若槻真凜（五十音順）

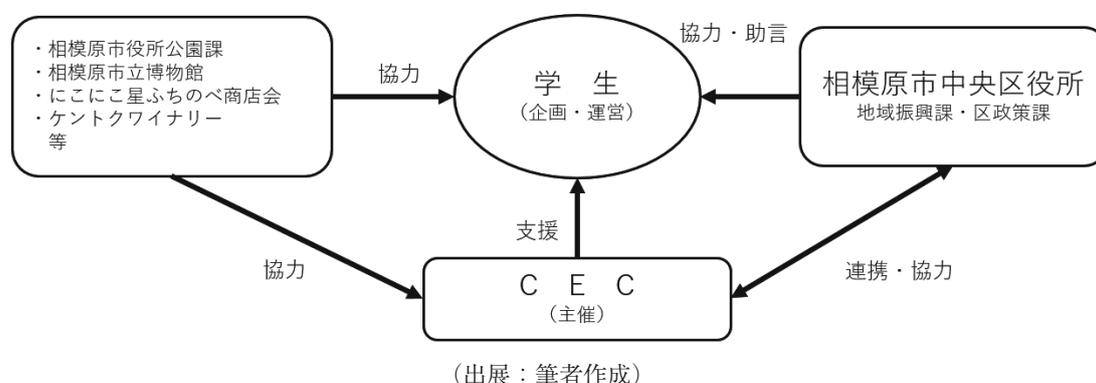
わけではなく、むしろより課題の表出している地域に優先して市民協働プロジェクトを走らせてきたということでもある。しかし、中央区においても将来的に人口減少は予測されており、なによりも本学が所在し日々学生たちが通うこの地域において、本学が地域の活性化に取り組むことで貢献する意義はあるといえる。また、旧ボランティアセンターから CEC へと改変され、その業務として地域社会との連携・協働がより一層求められる中で、キャンパス周辺地域とのさらなる連携・協働の方法を模索し、地域と学生をつないでいくことは CEC の重要な使命の一つでもある。同時に、中央区役所からは度々本学の学生に対してボランティア等の協力依頼を受けており、内容は様々だがその多くは中央区の魅力が学生の目線で見出し、発信してもらいたいという趣旨のものであった。

こうした背景から、学生たちが中央区の魅力を発掘し発信していく市民協働プロジェクトの構想に至った。また、学生たちが地域で活動することにより将来的に新たな魅力の創出にもつながることを期待し、プロジェクトの名称は「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト」とすることが決まった。

### 3 プロジェクトの設計

プロジェクトの大きな目的は前述の通り、中央区の魅力を発掘し発信していくことだが、この活動を通して学生たちにどのような経験が提供できるかという点をまず検討した。既存の2プロジェクトとも差別化する必要があると考え、行政との連携、具体的にはミーティングに区職員にも加わっていただくことで、学生たちに地域の発展を担う行政の視点、また社会人としての仕事の進め方・考え方などに触れる機会を作るといったことをプロジェクトの進め方として盛り込んだ。また、運営方法については、コーディネーターがある程度枠組み作りや助言等をしつつも基本的には学生たちの自発性を重視し、学生主体で運営していくこととした(図1)。ボランティア活動としてのプロジェクトである以上、教員や区職員からの指示や指導ではなく、学生の自発性を最優先することが重要であると考えたためである。その一方で、ボランティアとしては相手方のニーズを重視することも当然重要であり、区政策課から要望のあった中央区公式 Instagram への関与については、プロジェクトの企画として組み入れることとした。

図1：プロジェクトの運営体制



プロジェクトの設計としては1年間での完結型とし、基本的知識の修得、課題や魅力についてのリサーチ、事業の企画立案、実施計画の策定、広報、実施、振り返りとまとめ、成果の報告という一連の流れを参加学生が主体となって経験できる内容を目指した。

今年度、同プロジェクトには15名の学生が集まったため、15名で一つの企画を実施するのではなく、3チームに分けて活動することとなった。具体的には中央区公式 Instagram の内容を検討・企画する「Instagram チーム」、中央区内を巡るツアーを検討・企画する「ツアーチーム」、その他自由に企画を検討・実施する「自由企画チーム」の三つである。

さらに、各チームに取りまとめ担当、スケジュール管理担当、記録担当、広報担当、活動報告会担当を設け、参加学生全員がいずれかのチーム、いずれかの担当に就く形とし、自らのチームや担当に責任感を持たせる形とした。第2回全体ミーティングにおいてチーム分け及び担当決めを行った結果、表1のようなメンバーの割り振りとなった。プロジェクトの各企画については基本的にチームごとに検討・企画・実施するが、例えば全体ミーティングの議事録作成は各チームの記録担当が協力して行うなど、

担当同士での連携も促す形とした。

また、プロジェクト終了時に活動報告会と実践報告の執筆を行うことで、自らの活動を振り返り、まとめ、伝える機会を設定した。そのため本稿も同プロジェクトの活動の一環として担当コーディネーターと参加学生が共同で執筆したものである。

表1：プロジェクト内のチーム・担当配置及び人数

担当	チーム	Instagram チーム	ツアー チーム	自由企画 チーム	
取りまとめ担当		1名	1名	1名	
スケジュール管理担当		1名	1名	1名	
記録担当			2名	1名	
広報担当		1名	1名	1名	
活動報告会担当		1名	1名	1名	
計		4名	6名	5名	15名

なお、自由企画チームは途中で1名辞退となったため4名（プロジェクト全体では14名）となり、その1名が担当していた広報担当はスケジュール管理担当と記録担当の学生が兼務することとなった。

（出典：筆者作成）

コーディネーターとしては、同プロジェクトを通して、参加学生が課題を発見する力、その課題を解決するための企画を考え実行する企画・計画力と実行力、そして区職員をはじめ学外の人と接する中でコミュニケーション力をそれぞれ身につけ、向上させることを期待し、上記のようなプロジェクトの設計とした。

なお、プロジェクト立ち上げの初年度となる2023年度は「プロジェクトとしての骨格を作る」ということを目標とし、学生による企画・実施・振り返り・報告の流れと中央区役所との連携という形をまずは一通り参加学生とコーディネーターで作りに上げていくこととした。

#### 4 プロジェクト全体の流れ

本節では同プロジェクトの立ち上げ1年目となる2023年度の活動について全体的な流れを概説する<sup>(4)</sup>。なお、各チームの具体的な活動については第5節、第6節及び第7節で述べることにする。

##### (1) 告知及び募集

4月12日よりCECWEBサイト及び学生ポータルでの告知を開始し、4月26日には3プロジェクト（本プロジェクト、相武台団地活性化プロジェクト、藤野プロジェクト）合同での説明会をオンラインで実施している。こうした告知期間を経て、合計で15名の学生が本プロジェクトの学生メンバーとなった。なお、本プロジェクトは単発のボランティアではなく1年間のプロジェクトであり、プロジェクトの設計上途中離脱者が多数発生することは好ましくないため、申し込みの際には「参加動機、やってみたいこと」（200文字以上）の記入を課すとともに、活動時間の確保（月1回のミーティング、チームごとのミーティングや作業等）への同意等を求めた<sup>(5)</sup>。学生メンバーの学部・学年の内訳は表2の通りである。参加した学生はコミュニティ人間科学部と地球社会共生学部の2学部からの学生であり、特に前者の学生が圧倒的多数を占めた。地域社会での諸活動や社会の様々な課題について学ぶ同学部の特性から、同学部の学生にとって本プロジェクトのように学部での学びを実際に地域で実践する活動は一定のニーズがあるものと思われる。この傾向は相模原キャンパスCECで実施する他の市民協働プロジェクトやボランティア企画においても同様である<sup>(6)</sup>。

表2：学生メンバーの内訳（学部・学年）

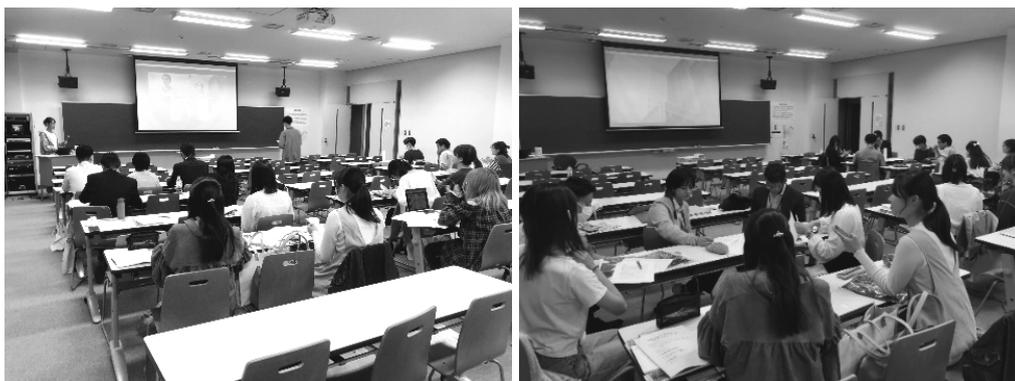
学部 \ 学年	1年	2年	3年	4年	計
コミュニティ人間科学部	4名	4名	3名	2名	13名
地球社会共生学部		2名			2名
計	4名	6名	3名	2名	15名

なお、途中で1名辞退（コミュニティ人間科学部4年）となったため、最終的には全体で14名となっている。  
（出典：筆者作成）

## (2) 全体ミーティング

5月以降は概ね毎月1回の頻度でプロジェクトの全体ミーティングを行い、各チームの企画について進捗状況の報告、ディスカッション等を行った（図2）。これらの定期的な報告に加え、プロジェクトを実施する上での前提知識やスキルの向上を目的として、中央区の概要や特徴を理解するための勉強会、メールの書き方講座なども行っている。プロジェクトの後半に差し掛かるころには社会情報学部で中央区との連携事業として卒業研究に取り組んでいる学生2名から研究成果の報告を聞く機会も設けられた。

図2：全体ミーティング



（写真：筆者撮影）

全体ミーティングには毎回区役所職員が5～6名程度参加し、学生たちの活動について助言をいただくとともに、活動内容によっては関連企業や相模原市役所内の関連部署への連携・調整を担っていただいた。

## (3) 相模原市中央区を知るためのツアー

6月には中央区について知るためのツアーを実施した（図3）。訪問・見学場所については担当コーディネーターが検討・調整し、相模原市立博物館、宇宙航空研究開発機構（JAXA）相模原キャンパス、鹿沼公園、にこにこ星ふちのべ商店会とした。これらはいずれも本学相模原キャンパスから徒歩圏内にあり、中央区の特徴的なスポットでもある。このツアーで上記の各所を訪れたことは、商店会との連携の模索や公園をテーマにしたツアーの検討、Instagram 企画での取材対象など、その後の各チームの活動にも一定の影響を与えたものと思われる。

図3：相模原市中央区について知るためのツアー



(写真：筆者撮影)

#### (4) プロジェクトの愛称決定

6月14日の第3回全体ミーティングではプロジェクトの愛称が決定された。本プロジェクトは「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト」という比較的長い名称であり、より気軽に日常的に呼称できる愛称として、学生メンバーの投票により「わかば」という愛称が選ばれた。わかばのように大学生の若い力でプロジェクトを作り育てていくという思いが込められている。また、「相模原市民若葉まつり」<sup>(7)</sup>の会場も中央区であり、中央区を拠点とする本プロジェクトとして「わかば」は大学生と中央区両方を同時に表すことができる愛称でもある。

#### (5) 補助事業への申請

わかばプロジェクトを遂行し、各チームが企画案を検討している中、本学相模原事務部学生生活課よりCECに「さがみはら青少年チャレンジ応援事業」の案内が送られてきた。同事業は相模原地域のシビックプライド向上を図るために青少年の活動に対して補助金を交付する相模原市の取り組みである。申請の過程で企画書等の書類審査とプレゼンテーション審査を実施するため、担当コーディネーターとしては学生たちが同事業に申請し企画書の作成やプレゼンテーションを経験することで企画の具体化が図られると考え、学生メンバーに対し同事業への申請を提案し、学生たちが自らの活動として同事業への申請を行った。結果としては学生たちの申請は不採択に終わったが、審査の過程で各チームの企画内容が極めて具体的になっていったといえる。夏休み期間前の時期に各チームの企画内容を具体化できたという意味では同事業への申請は一定の意義があった。特に取りまとめ担当の学生をはじめ、書類審査やプレゼンテーション審査に臨んだ学生たちにとっては、企画の意義や実現性について文章やプレゼンテーションで他者に伝えるという貴重な経験の機会となったといえよう。

#### (6) 活動の広報

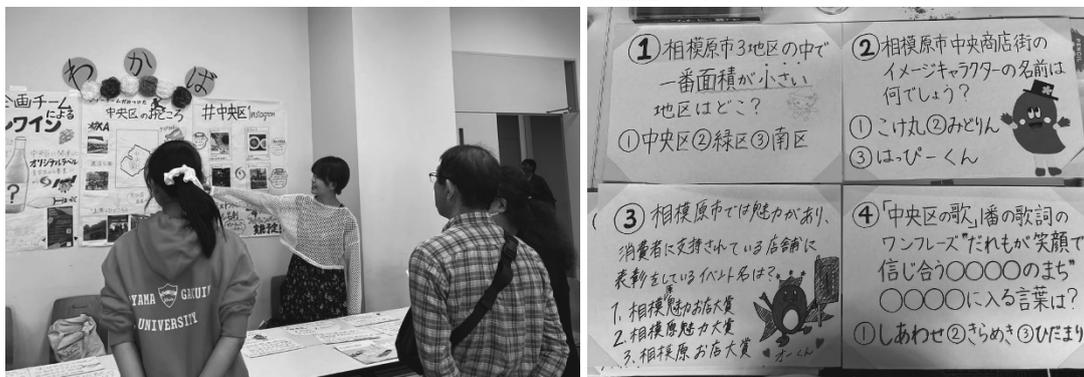
##### i. 大学祭への出展

本学相模原キャンパスにおける大学祭「第21回相模原祭」(2023年10月7日(土)、8日(日))において、「CEC市民協働プロジェクト活動展示」と題して教室企画に出展した(図4)。これは相模原キャンパスCEC主催の三つの市民協働プロジェクトの合同出展として、CEC学生スタッフが企画したものであり、本プロジェクトからは学生メンバー5名が準備及び当日の運営に参加した。3プロジェクトがいずれも相模原市内で活動しているということもあり、この教室企画では各プロジェクトの活動地域の紹介や関連する商品の販売、ワークショップの実施等を行い、2日間で約300名の来場者があった。わかばプロジェクトでは活動の展示に加え、中央区に関するクイズを企画・実施し、このクイズ企画には2日間で述べ130名が参加し、中央区をはじめ相模原市内各所の魅力を多くの来場者に発信することができた。また、クイズを作成する過程でメンバー自身が中央区についての知識を深め、魅力を知ることができたようである。さらに、相模原の他地域で活動する他の2プロジェクトのメンバーと準備や当日の運営を通して交流することで、緑区や南区の様子を知り、自然と中央区との比較や中央区の特徴に目を向ける機会となったといえる。

ii . 学生新聞からの取材

10月18日、『青山学院大学新聞』から取材を受け、学生メンバーのうち広報担当の学生4名とコーディネーター1名、区職員2名が記者からのインタビューに対応した。プロジェクト発足の経緯や中央区の魅力、現在の活動などについて話をし、11月発行号に記事として掲載されている（青山学院大学新聞2023）。

図4：「相模原祭」への教室企画出展



(写真：筆者撮影)

iii . 市広報紙への企画参加

相模原市が発行する広報紙『広報さがみはら』では中央区版ページの特別企画として毎年本学の学生が取材及び記事の作成に参加している。2021年度は相模原市立博物館の紹介記事（相模原市中央区役所区政策課 2022）、2022年度は地元のラグビーチーム、三菱重工相模原ダイナボアーズの紹介記事（相模原市中央区役所区政策課 2023）に本学の学生がそれぞれ参加してきたが、2023年度の同企画にはわかばプロジェクト広報担当の学生が参加し、各チームの活動を紹介する記事を作成している（相模原市中央区役所区政策課 2024）。

iv . コミュニティ放送への出演

相模原市中央区に本社・送信所を置くコミュニティ放送、エフエムさがみのラジオ番組『大好き！中央区』に学生メンバーのうち3名（各チームから1名）がゲストとして出演し、活動を通して知り得た中央区の魅力などを語った<sup>(8)</sup>（図5）。

図5：コミュニティ放送への出演



(写真：筆者撮影)

相模原祭への出展は、学内外からの来場者に対して学生メンバーが直接中央区の魅力を発信する場となった。一方、『青山学院大学新聞』からの取材及び『広報さがみはら』、エフエムさがみ『大好き！中央区』への企画参加・出演は、直接中央区の魅力を発信するというよりも本プロジェクトの活動を紹介するものではあるが、これらを通して間接的に中央区の魅力を学内外、そして地域に発信することができ、その意味で本プロジェクトにおける「発信」の機能を担う活動であったといえるだろう<sup>(9)</sup>。

## (7) 活動の振り返り及び報告

プロジェクトの設計段階から、担当コーディネーターは学生メンバーが自らの活動を振り返る場を設けることが重要であると考えていたため、活動を言葉にして振り返り他者に説明する機会として活動報告会を、そして文章で自らの活動を整理し、その意義を他者に説明する機会としてCEC紀要『シビックエンゲージメント研究』への実践報告の執筆・投稿を設定した。学生向けのボランティア企画では、振り返りの会や報告会を実施するケースは見られるが、参加者が論文として査読付きの紀要に文章を投稿することを設計に含んでいる例は多くない。しかし、本プロジェクトでは一年間の活動を振り返り、文章として論理的に自らの活動の意義を説明し、形にすることが重要であると考え、プロジェクトの一部としてCEC紀要への投稿を組み込んだ。

報告会については、11月15日に中間報告会を実施し、各チームが企画の背景や目的、その時点までの活動状況と今後の計画などを発表した。そして3月13日には、最終の振り返り及び活動成果の報告の場として活動報告会を行った。これら報告会には中央区役所の地域振興課・区政策課各課長も参加し、学生たちの発表に対して助言と激励をいただいた。

## 5 Instagramチームの活動について

### (1) 企画の内容及び背景と目的

Instagramチームの活動全体は資料2に示しているが、主に中央区公式Instagramでの継続的な投稿とフォトキャンペーンという二つの企画を実施した。前者は、週に一度中央区公式Instagramにて、「中央区さんぽ」と題し、チームメンバー4名が区内で撮影した写真とそのコメントを投稿するというものである。後者は、参加者に区内で撮影した写真をInstagramにて、「#中央区冬のキラキラ」をつけて投稿してもらうというものであり、投稿者には抽選で中央区オリジナルグッズをプレゼントした。

これらの企画に至った背景には、中央区にある多くの魅力に気づいていない人が多いのではないかとこのメンバーの意識があった。本学の学生の中には、中央区を「大学がある地域」としか見ていない者も少なくなく、「中央区には何もない」という意見を友人の学生から耳にしたというメンバーもいた。またInstagramは、視覚的にアピールでき、区外の人々など地域を超えて中央区の隠れた魅力を発信できると考え、今回の企画を検討するに至った。そこで、継続的な投稿により、地域や学生を含む若者への中央区の魅力を浸透させ、フォトキャンペーンにより、地域から区内外への魅力が発信されることを目的とした。

### (2) 成果と考察

#### i. フォトキャンペーンの成果及び考察

フォトキャンペーンの期間は12月4日から1月15日とし、この期間中、前述の条件を満たした投稿は25アカウントから延べ36件であった（協力団体としての投稿である相模原市立博物館及び中央区アカウントからの投稿を除く）。各投稿日や撮影場所は表3の通りだが、季節柄、イルミネーションや神社・チャペル等の写真が多く投稿され、年始に中央区各所で実施されていた「謹賀新年×中央区花手水」に関連する写真も多く含まれていた。

同企画は表4に示した各種方法によって告知を行った。若い世代をターゲットにした企画であったが、投稿者のアカウントを見ると学生等と思われるものは少なかった。学内へのポスター掲示等だけでは若者へのアプローチとして不足しており、より直接的に若者に届く告知が必要であったといえる。また、「中央区のキラキラな瞬間」という抽象的なテーマ設定であったが、投稿数を増やすためには、より対象者を絞ることも有効な手段の一つと考えられる。今回の投稿者の過去の投稿を見ると、ブログのように日常的に趣味や行ったことを投稿している者も多く、テーマをより具体的に示すことで、ブログ的投稿層に訴求することができるのではないだろうか。

表 3：フォトキャンペーン期間中の投稿概要

投稿日	撮影場所等	備考	投稿日	撮影場所等	備考
11月25日		期間外	20 1月3日	亀ヶ池八幡宮 花手水	
11月27日	さがみはランタン	期間外	21 1月4日		
1 12月4日		一般社団法人	22 1月4日	氷川神社	
2 12月6日	横山公園		23 1月4日		
3 12月6日			24 1月4日	青山学院大学内チャペル	
4 12月11日	氷川神社		25 1月5日	横山公園	
5 12月11日	氷川神社		26 1月6日	淵野辺 相模原	
6 12月11日		市社協	27 1月6日	花手水	
7 12月12日	区内紅葉		28 1月7日	相模原駅イルミネーション	
8 12月15日	氷川神社		29 1月7日	亀ヶ池八幡宮 花手水	
9 12月16日	淵野辺イルミネーション		30 1月8日	相模原駅イルミネーション	
10 12月18日			31 1月8日	亀ヶ池八幡宮 花手水	
11 12月18日	上溝さくら公園イルミネーション		32 1月9日	亀ヶ池八幡宮 花手水	
12 12月23日	にこ星商店街イルミネーション		33 1月10日	上溝	
13 12月23日	区内公園		34 1月13日	青山学院大学	
14 12月31日	花手水		35 1月15日	亀ヶ池八幡宮	
15 12月31日	亀ヶ池八幡宮 花手水		36 1月15日	氷川神社 花手水	
16 1月1日	亀ヶ池八幡宮		1月16日	上溝さくら公園	期間外
17 1月2日	亀ヶ池八幡宮 花手水		日付不明	亀ヶ池八幡宮	リール動画
18 1月2日	亀ヶ池八幡宮		日付不明		リール動画
19 1月3日	亀ヶ池八幡宮 花手水				

		フォロワー数
12月4日	開始日	2,479
1月15日	終了日	2,786
	期間中増加数	307
	※うち、別イベントでの増加	229
	実質増加数	78

※1/6,7に別イベント「わんわんマルシェ」が区内で開催されており、ここでは中央区公式Instagramをフォローすることでプレゼントがもらえる企画が実施されていた。そのため、この2日間における増加は「わんわんマルシェ」によるものと推察される。

期間内の投稿数 36 件、投稿者数 25 アカウント（市立博物館、中央区公式アカウントによる投稿を除く）  
（出典：中央区提供データを基に筆者作成）

表 4：相模原市中央区フォトキャンペーン告知方法

	告知方法	媒体
1	広報さがみはら「ちゅうおう区版」12月15日号	紙
2	花手水設置場所でのPRポップ設置	紙
3	中央区インフォメーションコーナーでのポスター掲出	紙
4	中央区内公共施設へのポスター掲出	紙
5	淵野辺駅・南橋本駅自由通路でのポスター掲出	紙
6	にこにこ星ふちのべ商店会へのポスター掲出依頼	紙 ★
7	青山学院大学内でのポスター掲出	紙 ★
8	わかばの取材先へのポスター掲出	紙 ★
9	PR TIMES	電子
10	相模原市立図書館公式 X	電子
11	相模原市立博物館キャラクター「さがぼん」の X	電子
12	相模原市立図書館 Facebook	電子
13	中央区役所デジタルサイネージ※	電子
14	淵野辺駅デジタルサイネージ	電子
15	中央区役所 WEB サイト	電子
16	中央区役所 Instagram	電子
17	中央区役所 Facebook	電子
18	青山学院大学関連 SNS での周知	電子 ★

※区役所及び大野北・田名・上溝の各まちづくりセンター内  
★ = Instagram チームが実施したもの。  
それ以外の項目は区役所にご協力いただき、対応いただいたもの  
（出典：中央区提供データを基に筆者作成）

ii. 継続的な投稿の成果及び考察

継続的な投稿「中央区さんぽ」については、2023年8月14日から2024年2月13日まで概ね週1回の頻度で合計27回行った（表5）。

この継続投稿について、本チームでは投稿に対する「いいね」数が200を超えること、またフォトキャンペーンも含め企画実施期間内に中央区公式Instagramのフォロワー数が200以上増加することを目標として設定した。「いいね」数の平均は145.9であり、平均では達成できていないが、投稿中1件（1月15日：貝ガラ屋、214いいね）が目標を超えるいいね数となった。フォロワー数については期間中の別イベント「わんわんマルシェ」による増加を除いた実質増加数は233であり、目標値を達成することができた。

投稿のジャンル別に見ると、1月に2件投稿した神社の投稿は時期的な要因もあり反応が大きかったが、期間全体を通して平均的に良い反応を得られたのはグルメ関係の投稿であった（図6、図7）。インプレッション数は平均で2,000を超えており、平均いいね数も160.7と、全体的に高い。近年若い世代を中心にラーメン店巡りが流行しており、Instagramにも多くのラーメンの写真が投稿されているが、今回の継続的な投稿の中で最も多くのいいね数を集めた投稿がラーメン店「貝ガラ屋」の写真であることも、そうした若い世代の傾向を反映している可能性がある。加えて、アンドリュースや貝ガラ屋など、有名店を取り上げた投稿は反応も大きく、影響力の大きい飲食店を取り上げた投稿がInstagramユーザーの注目を集めることが実証されたといえる。

表5：継続的な投稿「中央区さんぽ」の概要

	テーマ	ジャンル	投稿日	いいね数	コメント数	保存数	インプ数※	リーチ数	内訳 (フォロー/フォロー外)
1	博物館	博物館	8月14日	120	0	2	1,733	1,242	1,022 / 220
2	花 (横山公園)	花	8月21日	129	0	1	1,520	1,033	785 / 248
3	公園 (鹿沼公園)	公園	8月28日	140	1	2	1,730	1,242	1,003 / 239
4	グルメ (カフェ・アンドリュース)	グルメ	9月4日	192	1	20	2,445	1,791	1,248 / 543
5	花 (鹿沼公園)	花	9月12日	118	0	2	1,601	1,194	790 / 404
6	花 (横山公園)	花	9月19日	114	1	1	1,462	1,029	789 / 240
7	公園 (鹿沼公園)	公園	9月25日	119	1	2	1,723	1,251	988 / 263
8	博物館 (レトロ編)	博物館	10月2日	106	0	3	1,555	1,013	762 / 251
9	グルメ (宝来堂伊藤製菓舗)	グルメ	10月10日	142	0	4	1,986	1,351	1,132 / 219
10	グルメ (ソラ珈琲&食堂ヒュッテ)	グルメ	10月16日	165	0	11	2,482	1,664	1,198 / 466
11	公園 (淵野辺公園)	公園	10月24日	109	0	0	1,752	1,100	885 / 215
12	グルメ (カフェ・トガシ)	グルメ	10月29日	159	0	7	2,179	1,610	1,102 / 508
13	青山学院大学相模原キャンパス	青山学院大学	11月5日	96	1	2	1,533	1,152	928 / 224
14	花 (上溝さくら公園)	花	11月13日	114	1	1	1,277	983	794 / 189
15	グルメ (クレープミン)	グルメ	11月19日	177	2	16	2,460	1,920	1,335 / 585
16	グルメ (イモンチ)	グルメ	11月27日	152	0	7	1,773	1,307	1,057 / 250
17	グルメ (焼きそばかみ家)	グルメ	12月4日	180	1	6	2,065	1,474	1,286 / 188
18	グルメ (Pain de LUNARA)	グルメ	12月11日	129	0	7	1,932	1,456	1,017 / 439
19	公園 (横山公園)	公園	12月18日	119	0	0	1,527	1,085	888 / 197
20	グルメ (カミゾコーヒー)	グルメ	12月25日	154	0	9	2,242	1,652	1,317 / 335
21	氷川神社	神社	1月4日	193	0	3	2,128	1,628	1,305 / 323
22	青山学院大学&淵野辺駅	青山学院大学	1月10日	158	0	2	1,972	1,470	1,254 / 216
23	グルメ (貝ガラ屋)	グルメ	1月15日	214	1	8	2,455	1,870	1,451 / 419
24	亀ヶ池八幡宮	神社	1月22日	183	0	3	1,912	1,470	1,265 / 205
25	グルメ (ユトピーデュパン)	グルメ	1月29日	151	2	15	2,333	1,825	1,414 / 411
26	グルメ (古本屋カフェサニーデイリング)	グルメ	2月4日	113	0	12	1,781	1,400	1,065 / 335
27	最終回		2月13日	193	3	9	1,908	1,514	1,381 / 133

総計			3,939	15	155	51,466	37,726	
----	--	--	-------	----	-----	--------	--------	--

投稿開始時のフォロワー数	2,364
2024.2.25時点のフォロワー数	2,826
期間中増加数	462
うち「わんわんマルシェ」での増加分	229
実質増加数	233

※インプ数=インプレッション数  
投稿が表示された回数 (延べ数)  
(同じアカウントが複数回見た場合、見た回数分計上)

リーチ数  
投稿を見たアカウントの数 (実数)  
(同じアカウントが複数回見ても1としてカウント)

各投稿に対する反応の各データは2023年2月25日時点のもの。  
(出典：中央区提供データを基に筆者作成)

図6：ジャンル別平均インプレッション数

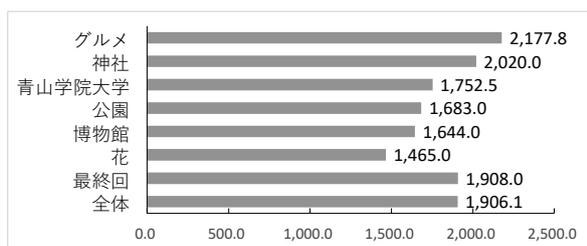
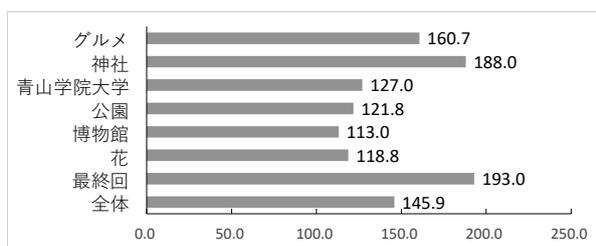


図7：ジャンル別平均いいね数



平均値は小数第二位を四捨五入している。  
(出典：中央区提供データを基に筆者作成)

## 6 ツアーチームの活動について

### (1) 企画した背景・目的

わかばプロジェクトは本学の学生に中央区の魅力を感じてもらい、中央区に対して愛着を持たせ、関係人口を増やすことをその目的の一つとしている。本チームではこの目的に照らして最も効果的な活動はツアーの開催であると考えた。また、ツアーを開催するにあたり中央区の特徴・魅力は「自然」であるとの意見がメンバーから出された。そこでツアーの条件として、①「自然」に焦点を当て、中央区内の施設や公園等のスポットを巡るツアーとすること、②ツアー対象者が本学の学生であることから、普段学生たちが訪れないような場所を本学の学生の視点で深掘りできる場所であること、そして③徒歩で参加できるエリアであることとして検討を行った。以上三点を考慮した結果、「上溝駅周辺」をツアーの舞台として設定することとした。

ツアーの目的としては、ツアーに参加することで普段、大学と家を行き来しているだけの学生にも、中央区の魅力を感じてもらい、「大学がある」というだけの中央区のイメージを変え、また地域の魅力に直接触れることで地域に対する愛着をもってもらおうこととした。加えて、参加した学生同士が交流することや、参加後に参加者が他の人に感想を伝えることで関係人口が増加することも企図した。

### (2) 企画・実施した内容

ツアーチームの1年間の活動の概要は資料3に示した通りだが、活動は2023年6月から本格的に開始し、ツアーの目的、対象者、訪問候補地の選定とルートの検討を進めた。7月時点では、アクアリウム相模原、道保川公園などをバスで回るルートを検討していたが、さがみはら青少年チャレンジ応援事業の不採択を受け、徒歩で回るルートに変更した。その後は大学祭でのピラ配りや、大学内における看板の設置、学生ポータルでの配信などを通し、ツアーの周知と参加者の確保を進めた。

そして、11月18日に「魅力発掘！相模原市中央区ツアー」を実施した(図8)。以下ルートを記述する。上溝駅に集合し、出欠確認、自己紹介を行った後、当日の流れの説明を行った。その後、亀ヶ池八幡宮・ゴールド神社に向かい、境内を散策した。最初は緊張していた参加者も、少しずつ打ち解け、参加者同士の交流を楽しんでおり、特に留学生が七福神に興味を持ち、日本文化を楽しんでいる様子が印象的であった。続いて、上溝商店街に向かい、昼食やお土産購入などの自由時間とした。昼食後は横山公園に向かい、相模原市役所公園課職員の方々に横山公園の案内をしていただいた。そして最後に、さがみはらグリーンプールを見学し、施設職員の方の案内の下、飛び込み台にも登らせていただいた。参加者たちは怖がりながらも貴重な体験を楽しんでいる様子であった。そして上溝駅に向かい、メンバーの代表が総括を行い、解散となった。

図8：「魅力発掘！相模原市中央区ツアー」



上段左：ツアー募集のポスター  
 上段中：亀ヶ池八幡宮散策の様子  
 上段右：横山公園内グリーンプール見学の様子  
 下段：亀ヶ池八幡宮での集合写真  
 (写真：筆者撮影)

### (3) 実施結果の考察と今後の課題

最後にツアー終了後に実施した参加者アンケートから成果を分析する。アンケートは参加者のうちチームメンバーを除いた12名中6名から回答を得た。

満足度を聞く項目では回答者全員が「非常に満足」もしくは「満足」と回答していることから、多くの参加者に満足していただくことができたと考えられる。また、自由記述欄の回答では、普段行くことがない地域に行くことで新しい施設や飲食店を知ることができたという回答が多く、中央区の魅力を発掘し、本学の学生に向けて発信するというツアーの目的は達成されたといえる。スポーツ施設を含め、整備された公園が多いことや、横山公園内のグリーンプールをはじめ運動をするための場所が多いことなどから、健康的な暮らしを送ることができるという点も中央区の魅力として挙げられた。

今後は今回の反省や参加者からの指摘をもとに次のツアーに向けた検討を行う予定であるが、参加者数やコースに合わせて時間やルート进行调整する必要がある。今後のツアーの対象者としては、本学の新生や相模原市民が候補として挙げられており、また場所に関しては今回の参加者アンケートから需要が高いと思われるエリアを検討している。

## 7 自由企画チームの活動について

### (1) 企画・実施した内容

自由企画チームの1年間の活動の概要は資料4に示した通りだが、本チームでは、中央区地域振興課、ケントクワイナリーと連携し「さがみわいん」のラベルデザインとPR・販売企画を実施した。「さがみわいん」とは、2021年に相模原市が認定された「ワイン特区」制度を活用し、市内でブドウの栽培か

らワインの醸造まで一貫して行うケントクワイナリーの自社醸造ワイン(「相模原ワイン」)である。チームでは2023年6月からミーティングを開始し、7月末にケントクワイナリーにて同ワイナリーの代表との顔合わせを行った。その後、デザインの募集に係る調整等を行い、9月～10月に本学の学生からデザインを公募した。応募があった7件の中から選考を行い、区職員を通じワイナリーに文字入れ・印刷を依頼しラベルを作成した。10月、11月にはワイン造りの作業を体験し、12月にはワイナリー代表へのインタビューを実施した。ボトルにはラベルの他、動画視聴用のQRコードを付けることとし、メンバーが作業体験やインタビューを通して感じ得た「さがみわいん」の魅力や今回の企画内容についてまとめた動画を作成した。完成したボトルワインは、市内で100本の限定販売となった。

## (2) 企画した背景・目的

第2回全体ミーティング時に区職員からケントクワイナリーの製造するワインについての案内があり、意外性と現在の認知度を踏まえ魅力発掘、創造、発信につながるのではないかと考えた。また、ラベルのデザインを本学の学生から募集することで中央区にキャンパスを持つ本学との協同企画であることを強調しつつ、本学の学生への認知拡大も企図した。中央区で生産された商品の紹介を通して区内の魅力を発信すること、本学の学生と中央区の関係性を深めることを目的とし活動してきた。

## (3) 企画の成果と今後の課題

デザイン募集からブドウの収穫、瓶詰めやラベル貼りなど、一つのワインを作り上げるまでの多くの工程に携わったり、ケントクワイナリーの紹介や相模原ワインの魅力を発信する動画を作成したりした。これらの活動が相模原ワインと本学の学生の架け橋となり、大学のある相模原市中央区の魅力を発掘・創造・発信することができた。

これらの企画の実現を可能にしたのは、ケントクワイナリー代表や区職員の方々など、ワインや中央区に関するプロフェッショナルの方々の存在であり、そうした皆様のご支援が企画の実現性や具体性を高めるカギとなった。このように、漠然とした学生たちの「やりたいこと」が地域社会にとって意味のある「やるべきこと」に変わっていったと考えられる。

企画内容が自由であったため、様々な企画案を出し実行してみたものの、手一杯になってしまい、本来のワイン企画に取り掛かるのが遅れてしまった。しかし、当初検討した中央区のマップ作成のために区内を視察したり、にこにこ星ふちのべ商店会会長のお話を伺ったりしたことなどを通して、チームで試行錯誤することの大切さを学び、中央区の魅力をより深く知ること、ワインラベル企画を通して中央区の魅力を発信させることができると気づいたため、様々なことに挑戦し、行動することの大切さを学ぶことができた。ワイン企画では、やるべきことが多すぎてスケジュールがハードになってしまい、楽しんで発信させていくという本来の目的を忘れてしまった。そのため、後先まで考えて区職員の方々やワイナリー代表と余裕を持った日程調整などを行うべきであった。また、ワイナリー代表とは、ワイン造り体験の参加やインタビューなどでお会いした程度であったため、企画や発信についてももう少し深く議論する余地があったといえる。最後に、中央区の魅力は未だ多岐にわたり、その魅力を発信していくことが、地域貢献に繋がると考える。そのため、自由企画で知られざる中央区の魅力を発掘し、発信していくことを今後の課題としたい。

## 8 プロジェクト1年目としての成果

以上、本稿ではわかばプロジェクト設立の経緯と背景、立ち上げ1年目の活動について概説してきたが、中央区を拠点とした新たなプロジェクトを立ち上げ、活動を通してその骨格を作り上げるという初年度の目標は概ね達成できたといえる。特に学生たちが自治体職員と定期的に接触し助言と支援を受ける機会は、これまでのCECの市民協働プロジェクトにはなかったものであり、参加した学生たちにとっては、良き社会人のロールモデルとして、区職員の方々の姿から学ぶものが多かったといえる。また、各チームとも参考にすべき前例がない中でそれぞれ企画を立案し実施できたことは、2年目以降の活動では味わうことのできない、初年度ならではの経験であった。ゼロから1を生み出す最も困難な部分を経験できたといえよう。

今回、プロジェクトの枠組みについてある程度の設計は担当コーディネーターが用意したが、具体的な活動内容や進め方等は基本的に学生たちに委ねられていた。細かくルールを決めたり、進め方を逐

一指示したりするなど、コーディネーター等が主導的な役回りをしてしまうことで、ボランティア活動の最も重要な概念である「自発性」が損なわれ、学生たちが受け身になってしまうことを避けようとしたためである。本プロジェクトは正課外のボランティア活動であり、学生が教員や社会人から指示を受けて動くだけになってしまえばボランティアプログラムとは呼べなくなってしまうだろう。担当コーディネーターとしてはそのような中でどの程度介入していくかという点に難しさを感じたが、それはまた単発のボランティア活動や日々の学生相談対応とも異なる市民協働プロジェクトならではの難しさでもあったといえる。そのような中で、学生たちが自らの力で企画を考え、限られた時間や資源の中でその企画を実施まで持ち込めたことは、プロジェクト1年目としては十分な成果であったといえよう。

## 9 今後の課題

一方、初年度の取り組みから課題も見えてきた。一つはプロジェクト全体としての一体感醸成の不足である。学生メンバーが15名と比較的多く、プロジェクト内を3チームに分けたこともその一因としては考えられる。各チームの取りまとめ担当とコーディネーターとの定期的な打ち合わせの場を設け、少なくとも取りまとめ担当同士が定期的に交流・情報交換できるような機会を作ろうと試みたが、学生の授業履修やアルバイト等スケジュールの関係上、予定を合わせる事が適わず、取りまとめ担当とコーディネーターによる定期的な打ち合わせの場は実現しなかった。2年目以降は各チーム間の交流を促す方策も検討していきたい。

また、同プロジェクトにおいては企画を立案する過程である程度深い調査をすることをコーディネーターとしては期待していたが、想定していたような「調査」の側面は初年度においては限定的であった。調査に時間を費やすことができないという点は、正課の授業とは異なる課外活動としてのボランティア活動の限界といえるかもしれない。この点については単年度での深い調査を期待するのではなく、複数年度をかけて蓄積し継承していくことで少しずつ中央区に対する学生たちの調査が深まっていくことを期待したい。

## 10 おわりに

本プロジェクトはいわゆる大学生による地域活性化の活動に属するが、地域活性化に取り組む際にその参加者が大学生であることの一つのメリットは「その地域を通過していく者」としての存在ではないだろうか。小中学生等と異なり、大学生の場合、その地域の出身者ではないことが多い。すなわち、多くが進学と同時にその地域に通学もしくは居住するようになり、そして卒業・就職とともに去っていく存在である。地域の視点からすると、若者が短期間しか当該の地域に関わらないことは物足りなさもあるかもしれないが、一方で常に新たな外からの視点がフレッシュに供給され続けるというメリットもあるといえよう。その地域に生まれ育ち、もしくは長年暮らしてきた人々が感じる地域の魅力が重要であることは言うまでもないが、地域外から来た者たちの新たな視点でその地域の魅力を見つけていくということもまた重要である。地域の住民や団体・行政等から学生の地域活性化系ボランティア活動に期待されることとして「学生の目線」や「若い人の感性」などの言葉が並ぶことも多いが、一口に「学生の目線」や「若い人の感性」といっても、毎年入学してくる学生は多様であり、また時代と共に変化もしていく。そうした多様で変化する学生を常に地域社会に供給できることは大学が地域に関わることのメリットの一つである。

また、学生たちが卒業後、就職等に伴い他地域へと流出してしまうことは、必ずしもネガティブな側面ばかりではない。その地域に魅力や良い思い出を感じていれば、他の地域に移り住んでもかつて大学時代に関わった地域に対して引き続き良いイメージを持つだろう。それは地域の外にその地域の魅力を知っている者たちが拡散されていくということも意味している。

大学という存在はこのように毎年、地域の外で生まれ育った者たちを地域に送り込み、そして地域の外に輩出していくポンプのような役割を果たしている。そしてそこに通う学生たちは「地域を通過していく者」として、継続的に地域に貢献できるのではないだろうか。わかばプロジェクト初年度の活動を終えて、同プロジェクトにもそのような大学の持つ地域人材ポンプ機能とも呼べるような機能の一部を担い得る可能性が感じられた。

また学生生活という視点から見ると、こうした大学周辺地域での活動は、学生にとって日常と非日常を交差させるものとなる。普段、主にキャンパスの中で多くの時間を過ごしている学生たちにとって、

地域に出ていき、その地域の魅力を発掘し、発信していくという作業はある意味普通の学生生活とは異なる非日常的な活動である。普通のキャンパスライフだけでは得られない経験や接することの無かった人々との交流を生みだしている。その一方で、キャンパス周辺地域は学生たちにとって本来的には日常の空間である。たとえ大学の最寄り駅とキャンパスの間の往復に終始してしまっているとしても、その間に目にする景色、耳にする音、触れる空気はまさに大学周辺地域のそれである。キャンパス近くで一人暮らしをしている学生であればなおさらそうであろう。そうした日常の風景に対して、これまでアプローチしてこなかった角度から接する非日常的な活動を経験することで、その地域に対して愛着を持ったり、大学生活の一つの思い出として残ったりする可能性がある。そうした経験が卒業後に地域を離れても、その地域の魅力を何かの機会に周囲の人に語るような、潜在的な地域のサポーターの創出につながるのではないだろうか。本プロジェクトがその愛称の通り「わかば」のように芽吹き、成長していくことを願うとともに、参加した学生たちの心にも「わかば」のように新たな何かが芽吹き、大きな葉へと成長していくことを期待したい。

## 謝辞

本プロジェクトの実施にあたり、相模原市中央区役所の地域振興課・区政策課の皆様にご多大なご支援を賜りました。区役所の皆様のお力添えなしには本プロジェクトの各企画は成し得なかったものばかりです。さらに、相模原市役所公園課、相模原市立博物館、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)相模原キャンパス、にこにこ星ふちのべ商店会、上溝商店街復興組合、亀ヶ池八幡宮、ケントクワイナリー、そしてInstagram企画「中央区さんぽ」の取材でお邪魔した数々の飲食店・商店の皆様には、プロジェクト内の各企画においてご協力をいただきました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

## 注

- (1) 以下、「中央区」という語は相模原市中央区を指して用いる。
- (2) 相模原市全体の推計人口は724,774人(中央区・相模原市全体いずれも推計人口。2024年1月1日現在(相模原市2024a))。
- (3) 福島県福島市:274,269人(2024年2月1日現在(福島市2024))。茨城県水戸市:267,862人(2024年2月1日現在(水戸市2024))。青森県青森市:263,753人(2024年1月1日現在(青森県2024))。なお、いずれも住民基本台帳人口ではなく、より居住実態に近い推計人口を参照している。
- (4) プロジェクト全体としての活動の流れは本稿末に資料1として示している。各チームの活動の流れについても同様である。
- (5) その他、ミーティング時の自発的・積極的な参加への依頼、活動中に知り得たメンバーや関係者の個人情報の取り扱いについての依頼、紀要やCEC広報媒体等への活動写真の掲載等についての同意依頼等についても確認している。
- (6) なお、相模原キャンパスCECの学生スタッフも、2022年度(3名)、2023年度(4名)ともに全員コミュニティ人間科学部の学生である。
- (7) 相模原市民まつりは「相模原市民桜まつり」「相模原市民若葉まつり」という名称で実施されており、通常の年は4月に「桜まつり」として開催されるが、「統一地方選挙が行われる年(4年に1度)は、5月に『相模原市民若葉まつり』として開催」されている(相模原市民まつり実行委員会2023)。なお、本プロジェクトが始動した2023年は「若葉まつり」として実施されていた。
- (8) 2024年2月15日に収録し、3月7日に本放送、3月13日・17日・23日にもそれぞれ再放送されている。
- (9) ここではプロジェクト全体における広報活動のみを取り上げたが、Instagramチームにおける中央区公式Instagramとの連携企画、ツアーチームの本学学生向けツアー、自由企画チームのワインラベルデザイン公募等、後述の各チームの企画及びそのための告知活動もそれぞれ自体が中央区の魅力を直接・間接的に発信する活動であり、またプロジェクトの活動を広報していく役割も担っていたといえる。また、プロジェクト各チームの活動について学生との連携事例として相模原市のプレスリリース(相模原市2023, 2024b, 2024c)や、神奈川県・

東京多摩地域の情報紙『タウンニュース』（さがみはら中央区版）（タウンニュース社 2024）でも取り上げられている。

## 引用・参考文献

- 青森県,「青森県の推計人口-月報-2024年(令和6年)」(ページ更新日:2024.2.5),2024,  
(<https://opendata.pref.aomori.lg.jp/dataset/2083.html>,2024.2.18 アクセス)
- 青山学院大学新聞,「わかばのようにのびのびと一相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト『わかば』」,『青山学院大学新聞』(372)(2023年11月30日発行):2,2023.
- 大宮登,「大学と地域貢献の促進—地域づくりへの学生参加教育プロジェクトを中心に」『大学と学生』(18):14-21,2005.
- 相模原市,「【相模原市中央区】地域の魅力発見を目指して、区内大学生とのコラボレーションを推進中!—学生提案によるフォトキャンペーン『冬のキラキラ』を新たに開催。どなたでも応募できます!」(記事公開日:2023.12.14),2023,  
(<https://prtnews.jp/main/html/rd/p/000000293.000072959.html>,2024.1.6 アクセス)
- 相模原市,「区別・年齢別人口(各年1月1日現在)」(ページ更新日:2024.3.15),2024a,  
(<https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/shisei/1026709/toukei/1010325/jinko/nenrei/index.html>,2024.5.20 アクセス)
- 相模原市,「青山学院大学×セントクワイナリー×中央区役所 コラボ企画—限定100本!オリジナルラベルの相模原ワインを制作!」(2024.2.19 相模原市発表資料),2024b,  
([https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/030/004/0219/04.pdf](https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/030/004/0219/04.pdf),2024.2.20 アクセス)
- 相模原市,「【相模原市中央区】大学生が企画した初のオリジナルラベル相模原ワイン 限定100本でいよいよリリースです!」(記事公開日:2024.2.20),2024c,  
(<https://prtnews.jp/main/html/rd/p/000000316.000072959.html>,2024.2.20 アクセス)
- 相模原市中央区役所区政策課,「青学生が#博物館巡り」『広報さがみはら』1477(2022.3.15発行):10,2022.
- 相模原市中央区役所区政策課,「青学サッカー部がダイナボアーズの素顔に迫ってみた!」『広報さがみはら』1497(2023.1.15発行):10,2023.
- 相模原市中央区役所区政策課,「青学生の中央区魅力発掘・発信大作戦」『広報さがみはら』1523(2024.2.15発行):10,2024.
- 相模原市民まつり実行委員会,「概要」,2023,  
(<https://sagamihara-shimin-maturi.com/overview/>,2023.12.12 アクセス)
- タウンニュース社,「『キラキラ』写真募集—中央区と青学学生がコラボ」(記事公開日:2024.1.4),2024,  
(<https://www.townnews.co.jp/0301/2024/01/04/713889.html>,2024.1.6 アクセス)
- 橋本佳恵,「“泉州 RUSH” プロジェクト報告—大阪観光大学学生による地元地域活性化に向けた取り組み」『大阪観光大学紀要』(10):267-78,2010.
- 橋本佳恵,「“泉州 RUSH” プロジェクト報告・Ⅱ—大阪観光大学学生による地元地域活性化に向けた取り組み」『大阪観光大学紀要』(12):99-111,2012.
- 橋本佳恵,「“泉州 RUSH” プロジェクト報告・Ⅲ—大阪観光大学学生による地元地域活性化に向けた取り組み」『大阪観光大学紀要』(14):101-9,2014.
- 橋本佳恵,「“泉州 RUSH” プロジェクト報告・Ⅳ—大阪観光大学学生による地元地域活性化に向けた取り組み」『大阪観光大学紀要』(17):103-10,2015.
- 橋本佳恵,「“泉州 RUSH” プロジェクト報告・Ⅴ—大阪観光大学学生による地元地域活性化に向けた取り組み」『大

阪観光大学研究論集』(21) : 115-22, 2021.

福島市,「福島市の推計人口」(ページ更新日:2024.2.16),2024,

(<https://www.city.fukushima.fukushima.jp/seichou-toukei/shise/tokejoho/suikejinko/index.html>, 2024.2.18 アクセス)

三神憲一・水谷耕平,「市民協働プロジェクトを通じた学生の成長および大学の社会的効果に関する研究—青山学院大学シビックエンゲージメントセンター相模原キャンパスにおける「相武台団地活性化プロジェクト」を事例に」『シビックエンゲージメント研究』(1) : 37-44, 2023.

水戸市,「水戸市の常住人口(令和2年国勢調査基準)」(ページ更新日:2024.2.5),2024,

(<https://www.city.mito.lg.jp/site/open-data/3992.html>, 2024.2.18 アクセス)

山田明,「大学と自治体の地域連携における学生の学び—地域活性化新聞『岡垣歴史新聞』プロジェクト」『生活体験学習研究』17: 23-31, 2017.

鎗田英三,「まちが教室—学生参加による〈入間〉活性化プロジェクト」『大学と学生』(18) : 37-41, 2005.

資料

資料1：プロジェクト全体の流れ

	活動日	項目	内容	参加者／活動者数
1	2023/4/12	告知	CECWEB サイト、学生ポータルでプロジェクトのメンバー募集告知開始（5月2日まで）	
2	2023/4/26	説明会	オンライン：3プロジェクト合同での説明会	学生22名、区職員※14名、他協力団体5名※2、CEC3名※3
3	2023/5/10	第1回全体 MTG ※4	オンライン：顔合わせ、プロジェクトの進め方説明 等	学生メンバー12名、Co※52名
4	2023/5/17	第2回全体 MTG	対面：中央区勉強会、チーム分け、担当決め 等	学生メンバー15名、Co1名
5	2023/6/3	相模原市中央区を知るためのツアー	相模原市立博物館、JAXA 相模原キャンパス、鹿沼公園、にこにこ星ふちのべ商店会を訪問	学生メンバー11名、区職員5名、Co2名
6	2023/6/14	第3回全体 MTG	対面：メールの書き方講座、プロジェクトの愛称決め、企画案発表	学生メンバー13名、区職員7名、Co1名
7	2023/7/19	第4回全体 MTG	対面：企画実施計画発表	学生メンバー13名、区職員6名、Co2名
8	2023/7/28	助成金応募	さがみはら青少年チャレンジ応援事業応募書類提出	
9	2023/8/14	助成金応募	さがみはら青少年チャレンジ応援事業プレゼンテーション審査	学生メンバー3名
10	2023/8/15	Instagram チーム※6	中央区×わかばコラボ投稿開始	
11	2023/10/7-8	大学祭	相模原祭に教室企画として出展（3プロジェクト合同）	学生メンバー5名、他プロジェクト学生11名、企画来場者約300名
12	2023/10/18	取材受け	青山学院大学新聞記者からのインタビュー取材対応	学生メンバー4名、区職員2名、Co1名
13	2023/10/18	第5回全体 MTG	対面※7：各チーム進捗状況報告、さがみはら青少年チャレンジ応援事業・相模原祭についての報告 等	学生メンバー14名、区職員5名、Co2名、その他1名※8
14	2023/11/15	中間報告会／第6回全体 MTG	対面※9：各チームこれまでの活動と今後の計画報告、社会情報学部学生による中央区学生連携事業を通じた研究の報告 等	学生メンバー14名、区職員7名、Co2名、その他2名※10
15	2023/11/17	自由企画チーム	ワインラベル選定	
16	2023/11/18	ツアーチーム	魅力発掘！！相模原市中央区ツアー	一般参加学生7名※11、企画学生5名、区職員4名、Co1名
17	2023/11/18	CEC 紀要	紀要への実践報告投稿申込	
18	2023/12/4-2024/1/5	Instagram チーム	フォトキャンペーン開催	
19	2023/12/20	第7回全体 MTG	対面※7：各チーム進捗状況報告、CEC 紀要への実践報告投稿について	学生メンバー13名、区職員5名、Co1名
20	2024/1/17	第8回全体 MTG	対面：各チーム進捗状況報告	学生メンバー12名、区職員5名、Co2名
21	2024/2/15	認定証受領	相模原市地域活動・市民活動ボランティア認定制度認定証贈呈式において市民局長より認定証を受領	学生メンバー3名、Co1名
22	2024/2/15	ラジオ収録	エフエムさがみ『大好き！中央区』の収録にゲストとして出演	学生メンバー3名
23	2024/2/15	市広報紙発行	わかばプロジェクトの紹介ページが掲載された『広報さがみはら』発行	
24	2024/2/21	第9回全体 MTG	対面※12：各チーム進捗状況報告、CEC 紀要投稿前確認、活動の振り返り	学生メンバー13名、区職員6名、Co2名
25	2024/2/28	CEC 紀要	実践報告原稿提出	学生メンバー14名、Co1名
26	2024/3/7	ラジオ収録放送	学生メンバーがゲストとして出演したエフエムさがみ『大好き！中央区』放送※13	
27	2024/3/13	活動報告会	対面※12：プロジェクト全体の説明、各チームの活動報告と質疑応答、関係者からの講評	学生メンバー13名、CEC2名※14、その他1名※15

- ※1 区職員＝相模原市中央区役所職員（第5節以降、各チームの表においても同様）
- ※2 他協力団体＝他の2プロジェクトの協力団体関係者
- ※3 センター長1名、コーディネーター2名
- ※4 MTG＝ミーティング（第5節以降、各チームの表においても同様）
- ※5 Co＝コーディネーター（第5節以降、各チームの表においても同様）
- ※6 個別チームの活動については第5節以降を参照（ツアーチーム、自由企画チームも同様）
- ※7 留学中の学生2名はオンラインで参加

- ※8 青山学院大学新聞記者が取材も兼ねて見学
- ※9 留学中の学生2名と他事情により学生1名はオンライン参加
- ※10 社会情報学部飯島ゼミ4年生
- ※11 うちツアーチーム以外のプロジェクトメンバー学生2名を含む
- ※12 事情により学生1名はオンライン参加
- ※13 本放送：3月7日。再放送：3月13日・17日・23日
- ※14 センター長1名、コーディネーター1名
- ※15 相模原市役所公園課職員（出典：筆者作成）

資料2: Instagram チームの活動の流れ

	活動日	項目	内容	参加者/活動者数
1	2023/6/8	チーム MTG	チームの企画について案出し、プロジェクト愛称の案出し	チームメンバー 4 名
2	2023/6/24	チーム MTG	企画内容（フォトコンテスト、継続的な投稿）について検討	チームメンバー 4 名
3	2023/7/8	チーム MTG	企画内容について検討、さがみはら青少年チャレンジ応援事業について打ち合わせ	チームメンバー 4 名
4	2023/7/19	第 4 回全体 MTG	企画内容について区政策課と意見交換	チームメンバー 3 名
5	2023/7/24	チーム MTG	企画内容について検討	チームメンバー 4 名
6	2023/7/24	取材	カフェ・アンドリュースで Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
7	2023/7/30	取材	相模原市立博物館で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
8	2023/8/2	取材	鹿沼公園で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
9	2023/8/9	取材	横山公園で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
10	2023/8/14	助成金応募	さがみはら青少年チャレンジ応援事業プレゼンテーション審査	チームメンバー 1 名（他チームからも各 1 名。合計 3 名）
11	2023/8/14	取材	鹿沼公園で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
12	2023/8/15	継続投稿企画	中央区公式 Instagram でコラボ投稿「中央区さんば」開始	
13	2023/9/13	チーム MTG	継続的な投稿について意見交換、フォトキャンペーンについて検討	チームメンバー 4 名
14	2023/9/28	区政策課・チーム MTG	継続的な投稿、フォトキャンペーンについて意見交換	チームメンバー 4 名、区職員 3 名
15	2023/9/29	取材	伊藤製菓舗で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
16	2023/10/2	チーム MTG	フォトキャンペーンについて検討	チームメンバー 4 名
17	2023/10/4	取材	ソラ珈琲 & 食堂ヒュッテで Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
18	2023/10/10	チーム MTG	フォトキャンペーンポスター案出し	チームメンバー 4 名
19	2023/10/10	取材	淵野辺公園で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
20	2023/10/18	取材	カフェトガシで Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
21	2023/10/18	取材受け	青山学院大学新聞記者からのインタビュー取材対応	チームメンバー 1 名（他チームからも 3 名。合計 4 名）、区職員 2 名、Co1 名
22	2023/11/2	取材	上溝さくら公園で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
23	2023/11/6	フォトキャンペーン	フォトキャンペーン景品デザイン公募開始	
24	2023/11/9	取材	クレーブミンで Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
25	2023/11/14	チーム MTG	フォトキャンペーンについて検討	チームメンバー 4 名
26	2023/11/15	第 6 回全体 MTG	フォトキャンペーンについて検討	チームメンバー 4 名
27	2023/11/16	取材	鹿沼公園、イモンチで Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
28	2023/11/18	取材	焼きそばかみ家、カミミゾコーヒー、亀ヶ池八幡宮で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
29	2023/11/22	取材	Pain de LUNARA で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
30	2023/11/29	取材	カミミゾコーヒーで Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
31	2023/12/4	フォトキャンペーン	フォトキャンペーン開始	
32	2023/12/9	取材	横山公園で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
33	2023/12/13	取材	貝ガラ屋で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
34	2023/12/14	フォトキャンペーン	にこにご星ふちのべ商店会へフォトキャンペーンのポスター掲示依頼	チームメンバー 2 名（他チームからも 1 名。合計 3 名）
35	2023/12/15	フォトキャンペーン	カフェトガシ、焼きそばかみ家、カミミゾコーヒーへフォトキャンペーンのポスター掲示依頼	チームメンバー 3 名
36	2023/12/15	取材	氷川神社で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
37	2023/12/20	フォトキャンペーン	カフェ・アンドリュースへフォトキャンペーンポスター掲示依頼	チームメンバー 2 名
38	2023/12/20	第 7 回全体 MTG	フォトキャンペーンについて区政策課と意見交換	チームメンバー 3 名
39	2023/12/23	取材	本学相模原キャンパスで Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
40	2024/1/11	取材	亀ヶ池八幡宮で Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
41	2024/1/17	第 8 回全体 MTG	フォトキャンペーンの結果振り返り	チームメンバー 4 名
42	2024/1/18	取材	ユトビーデパンで Instagram 投稿用の写真撮影	チームメンバー 1 名
43	2024/2/13	継続投稿企画	「中央区さんば」最終回投稿	
44	2024/2/15	認定証受領	相模原市地域活動・市民活動ボランティア認定制度認定証贈呈式において市民局長より認定証を受領	チームメンバー 1 名（他チームからも各 1 名、合計 3 名）、Co1 名
45	2024/2/15	ラジオ収録	エフエムさがみ『大好き！中央区』の収録にゲストとして出演	チームメンバー 1 名（他チームからも各 1 名、合計 3 名）
46	2024/2/21	第 9 回全体 MTG	進捗状況報告及び 1 年間の活動の総括	チームメンバー 3 名
47	2024/3/13	活動報告会	チームの活動報告と質疑応答、関係者からの講評	チームメンバー 3 名（うち 1 名オンライン）

(出典：筆者作成)

資料3：ツアーチームの活動の流れ

	活動日	項目	内容	参加者／活動者数
1	2023/5/7	第2回全体 MTG	全体 MTG 内で企画について案出し、今後の予定の確認	チームメンバー 6名
2	2023/5/31	チーム MTG	プロジェクトの愛称検討、テーマとエリア、訪問地の検討	チームメンバー 6名
3	2023/6/14	第3回全体 MTG	ツアーの目的・対象者決定、訪問候補地の調査	チームメンバー 5名
4	2023/6/21	チーム MTG	訪問地の選定とルート検討	チームメンバー 4名
5	2023/6/26	チーム MTG	ツアー内容検討	チームメンバー 6名
6	2023/7/5	チーム MTG	ツアー内容検討	チームメンバー 5名
7	2023/7/9	チーム MTG	さがみはら青少年チャレンジ応援事業申請についての打ち合わせ	チームメンバー 3名
8	2023/7/16	チーム MTG	ツアーの申し込みフォームと参加者アンケート作成	チームメンバー 4名
9	2023/7/19	第4回全体 MTG	募集人数や訪問地の再考	チームメンバー 6名、 区職員 2名
10	2023/8/7	ツアールート下見	ツアールート下見、課題点の発見	チームメンバー 2名
11	2023/8/14	助成金応募	さがみはら青少年チャレンジ応援事業プレゼンテーション審査	チームメンバー 1名（他チーム からも各1名。合計3名）
12	2023/9/7	チーム MTG	ルート再考、チラシ・パンフレット作成	チームメンバー 3名
13	2023/9/13	チーム MTG	ルート再考、チラシ・パンフレット作成	チームメンバー 3名
14	2023/9/23	ツアールート下見	新ルートの下見、訪問場所の写真撮影	チームメンバー 2名
15	2023/10/2	チーム MTG	ルートの確認	チームメンバー 4名
16	2023/10/18	取材受け	青山学院大学新聞記者からのインタビュー取材対応	チームメンバー 1名（他チーム からも3名。合計4名）、 区職員 2名、Co1名
17	2023/10/18	第5回全体 MTG	ルートの再確認	チームメンバー 6名
18	2023/10/25	市役所 MTG	ツアー概要の情報共有	チームメンバー 2名、相模原市 役所公園課 2名、区職員 3名
19	2023/11/15	ツアールート下見	新ルートの下見、当日の順序の最終確認	チームメンバー 5名
20	2023/11/15	第6回全体 MTG	ツアー実施に向けた準備・募集状況の報告	チームメンバー 6名
21	2023/11/18	ツアー開催	魅力発掘！！相模原市中央区ツアー	一般参加学生 7名、チームメン バー 5名、区職員 4名、Co1名
22	2023/12/10	チーム MTG	ツアーの振り返り、全体 MTG に向けて資料作成	チームメンバー 3名
23	2023/12/20	第7回全体 MTG	ツアーの反省と今後に関してプロジェクト全体に報告	チームメンバー 6名
24	2024/1/17	第8回全体 MTG	実践報告の執筆状況についてプロジェクト全体に報告	チームメンバー 5名
25	2024/2/15	認定証受領	相模原市地域活動・市民活動ボランティア認定制度認定証贈呈式において市民局長より認定証を受領	チームメンバー 1名（他チーム からも各1名、合計3名）、Co1 名
26	2024/2/15	ラジオ収録	エフエムさがみ『大好き！中央区』の収録にゲストとして出演	チームメンバー 1名（他チーム からも各1名、合計3名）
27	2024/2/21	第9回全体 MTG	進捗状況及び今後の課題報告	チームメンバー 6名
28	2024/3/13	活動報告会	チームの活動報告と質疑応答、関係者からの講評	チームメンバー 6名

(出典：筆者作成)

## 資料4：自由企画チームの活動の流れ

	活動日	項目	内容	参加者/活動者数
1	2023/5/23	チーム MTG	対面：企画案出し	チームメンバー 5 名
2	2023/6/6	チーム MTG	対面：企画案深掘り、4 案に絞る	チームメンバー 4 名
3	2023/6/14	フィールドワーク	市立博物館プラネタリウムを鑑賞	チームメンバー 2 名
4	2023/6/14	第 3 回全体 MTG	対面：企画案報告、フィードバック	チームメンバー 4 名
5	2023/6/20	チーム MTG	対面：ミーティング実施方法決め、企画案検討	チームメンバー 2 名
6	2023/6/21	連絡等	メールにてやり取り。ワイン企画案の話が進む。実施可能と確定	区職員とチームメンバー
7	2023/6/27	チーム MTG	オンライン：ワイン企画案の内容詰め（参加対象、人数、回数、関わり方、ワイナリーにとってのメリットなど）	チームメンバー 5 名
8	2023/7/6	関係者打ち合わせ	対面：にこにこ星ふちのべ商店会長との顔合わせ	チームメンバー 3 名、商店会長
9	2023/7/6	チーム MTG	オンライン：打ち合わせ内容の共有、商店街企画について	チームメンバー 5 名
10	2023/7/11	関係者打ち合わせ	対面：大学にてワイン企画についてスケジュールの確認、方向性の相談	チームメンバー 3 名、区職員 3 名、Co1 名
11	2023/7/11	フィールドワーク	商店街の散策	チームメンバー 3 名
12	2023/7/11	チーム MTG	オンライン：ワイン企画、商店街企画の企画書案作成	チームメンバー 5 名
13	2023/7/19	第 4 回全体 MTG	対面：企画書案の報告、フィードバック	チームメンバー 4 名
14	2023/7/25	チーム MTG	オンライン：企画内容詰め	チームメンバー 5 名
15	2023/7/31	関係者打ち合わせ	対面：ワイナリーにて企画提案（=実施決定）意見すり合わせ	チームメンバー 3 名、区職員 3 名、ワイナリー 1 名
16	2023/8/1	チーム MTG	オンライン：デザイン募集方法と募集要項の検討	チームメンバー 3 名
17	2023/8/8	チーム MTG	オンライン：企画をワイン企画のみに絞る	チームメンバー 3 名
18	2023/8/9	連絡等	電話にて、募集方法の方向性すり合わせ	区職員とチームメンバー
19	2023/8/14	助成金応募	さがみはら青少年チャレンジ応援事業プレゼンテーション審査	チームメンバー 1 名（他チームからも各 1 名。合計 3 名）
20	2023/8/24	チーム MTG	オンライン：募集要項の検討	チームメンバー 4 名
21	2023/8/25	連絡等	メールにて、募集要項案の提案と募集の宣伝方法について	区職員とチームメンバー
22	2023/8/28	チーム MTG	オンライン：募集要項の検討、ポスター作成	チームメンバー 5 名
23	2023/8/30	チーム MTG	オンライン：ポスター作成、申し込みフォーム作成、美術部へ依頼、募集宣伝準備	チームメンバー 5 名
24	2023/9/1	連絡等	電話にて、デザイン用紙について打ち合わせ	区職員とチームメンバー
25	2023/9/6	チーム内作業	チームの LINE グループにて、募集要項の修正・募集宣伝準備作業、募集開始後の流れについて検討	チームメンバー 5 名
26	2023/9/10	チーム MTG	オンライン：募集要項・ポスター完成、募集ページ掲載	チームメンバー 2 名
27	2023/9/10-10/8	その他	デザイン募集期間	
28	2023/9/19	チーム MTG	オンライン：情報共有、募集締め切り後のスケジュール確認	チームメンバー 3 名
29	2023/9/27	チーム MTG	オンライン：ワインの販売数と販売経路について	チームメンバー 3 名
30	2023/10/7-8	大学祭	相模原祭にて、チーム企画内容掲示、中央区クイズ実施	チームメンバー 3 名
31	2023/10/2	その他	チームメンバー 1 名辞退、以後 4 名で活動	
32	2023/10/10	関係者打ち合わせ	市役所にて、ワインラベルデザイン公募結果の報告、販売経路の相談	チームメンバー 3 名、区職員 3 名
33	2023/10/17	ワイン造り作業体験	農園にて、収穫作業の体験	チームメンバー 1 名、プロジェクト外からの協力学生 1 名、区職員 2 名
34	2023/10/18	取材受け	青山学院大学新聞記者からのインタビュー取材対応	チームメンバー 2 名（他チームからも 2 名。合計 4 名）、区職員 2 名、Co1 名
35	2023/10/18	第 5 回全体 MTG	対面：進捗の報告とフィードバック	チームメンバー 4 名
36	2023/10/26	チーム MTG	オンライン：ラベル選考基準の検討	チームメンバー 3 名
37	2023/10/31	チーム MTG	オンライン：チーム内でデザイン選考	チームメンバー 4 名
38	2023/11/7	ワイン造り作業体験	ワイナリーにて、瓶詰め作業の体験	チームメンバー 1 名、区職員 2 名
39	2023/11/7	チーム MTG	オンライン：ワイン販売店の検討、中間報告会資料作成、リハーサル	チームメンバー 4 名
40	2023/11/15	中間報告会／第 6 回全体 MTG	対面：活動報告、フィードバック	チームメンバー 4 名
41	2023/11/17	関係者打ち合わせ	市役所にて、ワインラベルのデザイン決定	チームメンバー 2 名（うち 1 名オンライン）、区職員 4 名、ワイナリー 1 名
42	2023/11/21	チーム MTG	オンライン：情報共有、ワイン販売経路・販売方法について、完成後の周知方法について	チームメンバー 4 名
43	2023/11/21	連絡等	メールにて、ラベルの文字入れと発注	チームメンバー、区職員、ワイナリー
44	2023/11/29	フィールドワーク	ワインを販売する酒屋の下見	チームメンバー 1 名
45	2023/11/30	チーム MTG	オンライン：ワイナリーへのインタビュー準備	チームメンバー 3 名

	活動日	項目	内容	参加者／活動者数
46	2023/12/6	フィールドワーク	ワインを販売する酒屋の下見	チームメンバー1名
47	2023/12/17	チーム MTG	オンライン：ワイン販売店候補決定、インタビュー準備	チームメンバー3名
48	2023/12/17	その他	『広報さがみはら』記事作成	チームメンバー2名
49	2023/12/20	取材	対面：ワイナリーにてインタビュー	チームメンバー2名、区職員2名
50	2023/12/20	第7回全体 MTG	対面：進捗の報告とフィードバック	チームメンバー4名
51	2023/12/25	関係者打ち合わせ	オンライン：ワイン紹介動画の方向性について、タグのデザインについて	チームメンバー2名、区職員3名
52	2023/12/26 -2024/1/2	チーム内作業	チーム内の LINE にて、試作動画と原稿を作成	チームメンバー4名
53	2024/1/4	連絡等	メールにて、原稿案、試作動画共有	チームメンバー、区職員、Co、ワイナリー
54	2024/1/5	関係者打ち合わせ	オンライン：原稿修正、タグデザインの決定、スケジュール確認	チームメンバー2名、区職員2名
55	2024/1/6-9	チーム内作業	チームの LINE にてやり取りしながら動画を修正	チームメンバー4名
56	2024/1/9	連絡等	メールにて、動画の提出、修正指示	
57	2024/1/17	チーム内作業	対面：原稿・動画修正、ナレーション収録	チームメンバー4名
58	2024/1/17	第8回全体 MTG	対面：進捗の報告とフィードバック	チームメンバー4名
59	2024/1/17 -23	連絡等	メールにて、動画の修正指示、チーム内の LINE にてやり取りしながら修正	区職員とチームメンバー
60	2024/1/25		動画完成、公開	チームメンバー4名
61	2024/1/30	ワイン造り作業体験	ワイナリーにて、ラベル貼り作業	チームメンバー2名、区職員2名
62	2024/1/31	その他	にこにこ星ふちのべ商店街の酒屋へ訪問のアポどり	区職員1名
63	2024/2/6	その他	にこにこ星ふちのべ商店会の酒屋へ訪問	チームメンバー3名、区職員1名
64	2024/2/15	認定証受領	相模原市地域活動・市民活動ボランティア認定制度認定証贈呈式において市民局長より認定証を受領	チームメンバー1名(他チームからも各1名、合計3名)、Co1名
65	2024/2/15	ラジオ収録	エフエムさがみ『大好き！中央区』の収録にゲストとして出演	チームメンバー1名(他チームからも各1名、合計3名)
66	2024/2/19		オリジナルラベルワイン発売開始	
67	2024/2/20		採用されたワインラベルのデザイン考案者への景品(完成品ワインボトル)の贈呈	チームメンバー2名
68	2024/2/21	第9回全体 MTG	対面：進捗状況の報告	チームメンバー4名(うち1名オンライン)
69	2024/3/13	活動報告会	チームの活動報告と質疑応答、関係者からの講評	チームメンバー4名

(出典：筆者作成)



<実践報告>

# 横浜市市民プロジェクト「Yocco18」公式 SNS 投稿の英訳を通じた、横浜の魅力の英語圏への紹介活動

宮本 恵太

青山学院大学大学院 文学研究科英米文学専攻 博士前期課程 修了生

Activities to Introduce the Appeal of Yokohama to English-Speaking Countries:  
English Translation of Official Posts on X by Yokohama City Citizen Project “Yocco18”  
and Reposting the Translated Versions on Instagram

MIYAMOTO Keita

Department of English and American Literature, Graduate School Master’s Course of Literature,  
Aoyama Gakuin University, Alumni

キーワード：横浜の魅力、市民プロジェクト、SNS、英訳、社会連携

## はじめに

本稿では、神奈川県横浜市の地域魅力発見プロジェクト「Yocco18」運営者（以下「Yocco 株式会社」という）と連携して筆者が2023年4月より不定期で行っている「Yoccoの1日」英訳活動について、活動を始めた背景や活動内容、および活動の成果についての報告を記述する。本活動は筆者が同社との合意のもと、ボランティア活動として行っているものである。なお、当該の活動は青山学院および青山学院大学の教育活動とは無関係であり、筆者以外に本学関係者は一切関与していない。

## 1 活動内容

### (1) 背景

神奈川県横浜市の地域魅力を発見・発信する市民プロジェクト「Yocco18」は、X（旧 Twitter）にて「#Yoccoの1日」のハッシュタグを用いたオリジナルキャラクターによる地域紹介を毎日発信している（公式 X アカウント：@yokohama18ku）。Yoccoとは「Your Own City Is Colorful and One of a kind」の頭文字をとって造られた頭字語であり、「それぞれの街に多彩でユニークな魅力がある」というメッセージに「横浜」の「ヨコ」がかけられている。同プロジェクトでは横浜市の行政区18区ごとに各区の特徴を盛り込んだキャラクターが制作されており、妖精である彼女たちは横浜駅近くの大学で地理や地域政策を学ぶゼミ生仲間という設定である（Yocco18）。ハッシュタグ「#Yoccoの1日」を付した投稿は原則として毎日12:00に公開され、「キャラクター名+セリフ形式によるその区のスポット紹介+ハッシュタグ」という形式をとる。たとえば、2024年1月1日の投稿では、横浜市旭区にある白根神社に祀られている白瀧龍神について以下のように紹介されている。

鶴ヶ峰あさひ

「2024年は辰年ね！ 白根神社の境内、中堀川沿いに白瀧龍神が祀られているわ。神秘的な雰囲気のおねね！

この辺りには白根不動の龍という民話も残されているそうよ。」

#Yoccoの1日

（出典：Yocco18による X での2024年1月1日12:00の投稿  
<https://x.com/yokohama18ku/status/1741655490587992344?s=20>）

上記の投稿では、旭区のキャラクターである「鶴ヶ峰あさひ」が同区に所在する「白根神社」について紹介している。Yocco18のキャラクターは18区各区に設定されているため、キャラクター名からどの区についてのものか分かる仕組みになっている。上記の場合、(1) 旭区に所在する「白根神社」に、(2) 「白瀧龍神」という祠が祀られており、(3) 「白根不動の龍」という民話が残されている、の3点がポイントとなる。区の地域性を反映した性格を持つキャラクターがスポットを紹介するという形をとることにより、投稿を目にした人々が単に情報を知るだけにとどまらず、その場所に魅力を感じる効果が高まると考えられる。

筆者は個人のXアカウントで「Yocco18」のアカウントをフォローしており、それがきっかけとなり、運営者であるYocco株式会社の遠藤望氏、坂口祐太氏と知り合う機会を得た。遠藤氏はYocco18の原作者であり、坂口氏はYocco18公式Xアカウントの運営を担当する。筆者は横浜市内在住であり、Yocco18を応援する中で、プロジェクトの発展のために自分にも何かできることはないだろうかと考えようになった。筆者は自身の専門領域である言語学や英語の知識を生かしたボランティア活動に携わりたいとかねてから考えており、横浜18区の地域の魅力を横浜市民や日本人のみならず英語圏の外国人に対しても紹介する活動である「Yoccoの1日」の英訳企画が提案された。「自身が持つスキルや得意なこと」を生かして社会貢献するという筆者の目標とYocco株式会社によるプロジェクトの展開イメージが合致し、かくして「Yoccoの1日」英語発信企画がスタートすることとなった。

## (2) 企画概要

以下では、2023年4月18日に横浜市内で行われた筆者とYocco株式会社による打ち合わせ内容をもとに、「Yoccoの1日」英語発信企画の概要を説明する。

本企画は、Yocco18公式X（企画立ち上げ当時はTwitter。以下、イーロン・マスク氏によるTwitterからXへの改称以前に公表された資料を引用する場合にはTwitterと称する）で発信されている「#Yoccoの1日」の英語訳バージョンを作成し、Instagram等のアカウントで再投稿することにより、外国人（英語圏）に対し横浜18区の地域の魅力を紹介することを目的とする（遠藤 2023: 1）。英語版発信用のアカウントとして、Yocco株式会社の前身であり、坂口氏が起業した会社である「アンバサダーズジャパン株式会社」（現在は事業休止）がインバウンドビジネスの一環として訪日外国人観光客向けの発信用に運営していたInstagramアカウント（休止中）を活用する（遠藤 2023: 2）。同社はInstagramアカウントを用いて外国人のフォロワー向けに日本人のライフスタイルや身近な地域等の情報を発信していたため、Yocco18のコンセプトとも親和性が高いと判断されることが採用の理由である。

なお、Twitter（X）とInstagramを併用するうえで、両プラットフォームの違いにも留意しておく必要がある。「Yoccoの1日」英語発信企画を行ううえで、Twitterは拡散性の高さがメリットとなる一方でアーカイブ性の低さがデメリットとなり、他方Instagramは拡散性が低いもののアーカイブ性の高さがメリットとなると、遠藤（2023: 3）は指摘する。

SNS全体の傾向については、松田（2022: 147-54）によると、TwitterとInstagramでは利用者の趣味の内容や社交性に差が見られるという。Twitterの主な利用者はマンガやアニメ、ゲームなどいわゆる「オタク」系の趣味を好む層であり、一方でInstagramの主な利用者はファッション、旅行、スポーツなど、「外向き」の趣味を好む人が多いという特徴があるとされる。

また、「Yoccoの1日」英語発信企画の類似事例としては、Instagramを利用した英語投稿活動を大学教養科目で実践したと報告している吉枝（2022）が挙げられる。吉枝（2022: 85）では、Instagramは大多数の学生によって愛好されるSNSであると同時に、国際的には英語での利用が主流であると指摘されている。

一方、Twitter（X）やInstagram以外のプラットフォームに目を向けると、例えば高谷（2017: 14）はFacebookについて、もともとアメリカの大学生のために開発されたSNSであるため特に海外の学生に人気が高いと述べる。ただし、高谷（2017: 23-4）が同時に指摘するように、Facebookは実名や学校・職場などのプライバシーをもオープンにすることを推奨するサービスであり、この実名制が特に見知らぬ人との関わりに警戒心を抱く女子学生の参入を妨げているという側面もあるようである。Facebookにおける実名主義に対して（高谷（2017）が研究対象とした）彼女らが抱く抵抗感、沼田（2015）が指摘する「Facebookはおじさん・おばさんの道具」という大学生たちの間に広がる認識にも如実に表れている。このような実状を踏まえると、「オリジナルキャラクターを用いた地域の魅力の発信」とい

う指針で活動する Yocco18 にとって、Facebook は「ユーザー層的に、キャラクターとの親和性が低い」(遠藤 2023: 3) ことになる。従って、「Yocco の 1 日」英訳版を発信するための媒体としては、Facebook よりも Instagram を用いる方がより適切であると判断される。

### (3) 実践内容

Yocco18 公式 X に投稿された「Yocco の 1 日」英訳版を Instagram に投稿する活動は下記のような形で実施された。

まず、発信のルールは以下のように設定された。

#### ◆ 「Yocco の 1 日」英語発信企画のルール

- ① 選択する過去投稿は筆者の自由とする。
- ② プロフィールに日本人が英訳している旨を明記。ネイティブにとっての英語の自然さよりも意味の伝わりやすさを重視する。従って、必ずしも逐語訳にする必要はなく、原文の一部省略・文章構成の変更可。
- ③ 英訳の更新頻度は不定期とする。(筆者の負担がない程度で行う。)

(出典：遠藤 (2023: 3-4) を引用者が要約)

英訳版が実際に Instagram に投稿されるまでの流れは、以下のとおりである。

#### ◆ 「Yocco の 1 日」英語発信企画の進め方

- ① 英訳したい X の過去投稿を筆者が自由に選ぶ。

↓

- ② 筆者の英訳を坂口氏がダブルチェック。坂口氏は日本語ネイティブであるため、ここで意図しているのはネイティブによる校正ではなく、誰かを不快にさせたり公序良俗に反したりなど、全く違う意味にとらえられる表現がないかのチェックである。

↓

- ③ ①、②を通過した英文を、Yocco18 英語発信企画用の Instagram (@yocco18\_english) に遠藤氏が投稿する。

(出典：遠藤 (2023: 3-4) を元に作成)

次に具体例を記す。紙幅の都合上、以下では第 1 回目および第 5 回目のみを例示する。第 1 回目は、2023 年 4 月 20 日に Yocco18 公式 X に投稿された紹介文を英語に訳した。

#### 【原文】

戸部みらい

「みなとみらいにイカリが置かれているわ！みなとみらいセンタービルの工事中に発掘されたイカリで、1945年に建造された「山汐丸」のものみたいよ！かつてこの場所が造船所だった歴史を感じることが出来るわね！」

#Yocco の 1 日

(出典：Yocco18 による X での 2023 年 4 月 20 日 12:00 の投稿  
<https://x.com/yokohama18ku/status/1648884199259254784?s=20>)

↓

#### 【訳文】

Mirai Tobe

"There is an anchor in Minatomirai! It was dug during the construction of Minatomirai Center Building, and originally came from Yamashio-maru, a ship constructed in 1945! This story tells you that this area used to be the docks!"

#Yocco18 #yocco の 1 日 #todaysocco #yokohama #insta\_yokohama #findyouryokohama #yokohama\_love #myyokohama #internationalexchange #englishstudy

(出典：筆者による Instagram での 2023 年 6 月 2 日の投稿<sup>(1)</sup>  
[https://www.instagram.com/p/Cs\\_jMBJxdcc/?utm\\_source=ig\\_web\\_copy\\_link](https://www.instagram.com/p/Cs_jMBJxdcc/?utm_source=ig_web_copy_link))

上記の投稿の「戸部みらい」は横浜市西区のキャラクターである。みなとみらいが西区にあることを知識として知らなくても、「戸部みらい」が西区のキャラクターであることを知っていれば、投稿内で触れられているみなとみらいが西区の地域であることが分かるようになっている。なお、ハッシュタグ（【訳文】#Yocco18 から #englishstudy まで）は Yocco 株式会社と打ち合わせのうえ、筆者が考えたものを採用している。

筆者が作成した訳文がそのまま採用されるとは限らず、Yocco 株式会社に求められた修正を経て Instagram に投稿されたケースもある。たとえば、第5回目「星川中央公園」（横浜市保土ケ谷区）について筆者が当初作成した英文は表現面や事実関係の誤りの指摘を受けたため、これを受け、筆者は訳文を修正した。

筆者は当初、下記の文面を Yocco 株式会社に提出した。

【原文】

星川とばり<sup>(2)</sup>

「横浜市の中心点は星川中央公園にあるわ！この場所はへそ広場の愛称でも親しまれていたよ！ちなみに、公園内の遊具は星がモチーフになっていて可愛いわ！」

#Yocco の 1 日

(出典：Yocco18 による X での 2023 年 4 月 9 日 12:00 の投稿  
<https://x.com/yokohama18ku/status/1644897932683116545?s=20>)



【当初作成した英文】

Tobari Hoshikawa

"The geometric center of Yokohama City lies in Hoshikawa Central Park! This place is dubbed "Navel Space," where you can see cute playground equipment with star (hoshi) motifs!"

#Yocco18 #yocco の 1 日 #todaysocco #yokohama #insta\_yokohama #findyouryokohama #yokohama\_love #myyokohama #internationalexchange #englishstudy

【修正点】

Tobari Hoshikawa

"The ~~geometric~~ center of Yokohama City lies in Hoshikawa Central Park! This place is *geographic (al)* was dubbed "Navel Space," where you can now see cute playground equipment with star (*hoshi*) motifs!"

#Yocco18 #yocco の 1 日 #todaysocco #yokohama #insta\_yokohama #findyouryokohama #yokohama\_love #myyokohama #internationalexchange #englishstudy

【坂口氏によるコメント】

- ・「geometric center」の geometric は幾何学なので相応しくないとされます。地理的 (geographical か geographic) が適切ではないかと思いますが、いかがでしょうか。
- ・「This place is」は「This place was」としてください。  
へそ広場と呼ばれていた運動グラウンドがリニューアルし、現在の公園になったためです。  
(出典：2023 年 8 月 17 日に筆者と坂口氏の間で交わされた私信)

上記のやりとりを通して、事実関係の確認を徹底することの大切さを筆者は痛感した。特に、「へそ広場」から「星川中央公園」へのリニューアルの経緯を知らないと、文法的には正しいとしても事実と異なる訳し方をしてしまうおそれがある。「This place is」から「This place was」への変更を求められた体験から、翻訳という行為は外国語の表現や文法に関する知識があればできるのではなく、言語面以外の背景知識を身につけることも重要であることを学んだ。

X および Instagram に実際に投稿された内容の画像を図 1 および図 2 に示す。図 1 は第 1 回目投稿(西区みなとみらいに置かれた「山汐丸」のイカリ)、図 2 は第 5 回目投稿(保土ヶ谷区星川に所在する「星川中央公園」)の画像である。

図 1 : Yocco18 公式 X による元投稿 (左) と筆者による英訳の Instagram 投稿 (右)



(横浜市西区)

図 2 : Yocco18 公式 X による元投稿 (左) と筆者による英訳の Instagram 投稿 (右)



(横浜市保土ヶ谷区)

(右画像の出典：筆者による Instagram での 2023 年 9 月 19 日の投稿  
[https://www.instagram.com/p/CxYAIQKPwYl/?utm\\_source=ig\\_web\\_copy\\_link](https://www.instagram.com/p/CxYAIQKPwYl/?utm_source=ig_web_copy_link))

## 2 「Yoccoの1日」英訳文の解説

上記の活動に加え、2023年9月下旬から10月上旬にかけて、「Yoccoの1日」英訳文にある文法・表現についての解説を記したPDFファイルをXに投稿した。

筆者はSNS上や対面での交流を通して、「Yocco18」ファンや地域関係者の多くがそれほど英語に精通していないことを知った。このような実状を鑑み、英訳文における英語表現や文の構造、文法面の解説が役に立つのではないかと考えた。このような背景に加え、英文の解説作成は自身の英語学習の機会にもなるだろうという動機から、解説を記したPDFファイルを作成してGoogle Driveにアップロードし、ファイルへのリンクを筆者のXアカウントに投稿した。

第1回目の投稿(西区みなとみらい)を例に、筆者が実際に作成したPDFファイルの画像を図3に示す。

図3:「Yoccoの1日」英訳文の解説を記したPDFファイルの画像

Yoccoの1日 英訳 (yocco18\_english)

投稿日(日)	原文	文字数(日)	文字数(英)	英語訳	投稿日(英)
2023/4/20	<p>戸部みらい 「みなとみらいにイカリが置かれているわ!みなとみらいセンタービルの工事中に発掘されたイカリで、1945年に建造された「山汐丸」のものみたいよ!かつてこの場所が造船所だった歴史を感じることが出来るわね!」</p> <p>#Yoccoの1日</p> <p><a href="https://twitter.com/yokohama18ku/status/1648884199259254784?s=20">https://twitter.com/yokohama18ku/status/1648884199259254784?s=20</a></p>	118	381	<p>Mirai Tobe "There is an anchor in Minatomirai! It was dug during the construction of Minatomirai Center Building, and originally came from Yamashio-maru, a ship constructed in 1945! This story tells you that this area used to be the docks!"</p> <p>#Yocco18 #yoccoの1日 #todaysyocco #yokohama #insta_yokohama #findyouryokohama #yokohama_love #myyokohama #internationalexchange #englishstudy</p> <p><a href="https://www.instagram.com/p/Cs-IMBjddc/?utm_source=ig_web_copy_link&amp;igshid=MzR">https://www.instagram.com/p/Cs-IMBjddc/?utm_source=ig_web_copy_link&amp;igshid=MzR</a></p>	2023/6/2

**【Vocabulary】** anchor /æŋkə/…錨 · dig (dig - dug - dug - digging) /dɪg/…～を掘り出す · construction /kənstrɪkʃən/…工事 · originally /əɪdʒɪnəli/…元来、もともとは · construct /kənstrɪkt/…～を建造する · used to do…(今はそうではないが)かつては～だった · dock /dɒk/…(通例複数形で)造船所

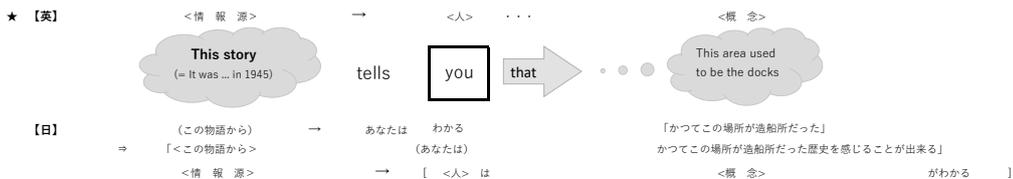
**【解説】**

① It was dug during the construction of Minatomirai Center Building  
冒頭のItは第1文のanchorを指します。「be + 過去分詞」で受動態(「～される」)を表すので、ここではdigの過去分詞dugをbeとともに用いて「発掘された」の意味を表します。during the constructionは「工事中」の意。

② ... and originally came from Yamashio-maru, a ship constructed in 1945  
andとoriginallyの間には主語it (= the anchor)を補って考えます。このandは文①のwas dug...と文②のoriginally came from...を等位接続するとみなすこともできます。Yamashio-maru and a ship constructed in 1945は同格(並列構文)で、「山汐丸がどのような船であったか」の補足として「1945年に建造された船」と後ろから説明されています。

★ It [ was dug during the construction of Minatomirai Center Building ] and [ (it) originally came from Yamashio-maru, a ship constructed in 1945 ]  
同格

③ This story tells you that this area used to be the docks  
いわゆる「無生物主語構文」であり、日本語では追加情報として表現されること多い「原因 (cause/source)」を英語では事態を動かす「主語(agent)」として表現します。



(第1回目投稿文の解説)

【Xへの投稿内容】

【お知らせ】

Yocco18\_English Instagramに投稿された英訳の解説をまとめました。

第1回目の投稿(西区)の解説は以下のファイルをご覧ください☺

なお、第2回目以降の投稿についても、解説ファイルを随時アップいたします。

[https://drive.google.com/file/d/12mVprDUMEs\\_sPtN3TZ6XwU9HH57aQnUr/view](https://drive.google.com/file/d/12mVprDUMEs_sPtN3TZ6XwU9HH57aQnUr/view)

(出典:筆者によるXでの2023年9月21日22:42の投稿)

[https://x.com/K\\_Miyamoto0603/status/1704853696205693422?s=20](https://x.com/K_Miyamoto0603/status/1704853696205693422?s=20)

図 4：筆者による X での「Yocco の 1 日」英訳文解説ファイルの投稿



「Yocco の 1 日」英訳文解説の投稿は、筆者の修士学位申請論文執筆時期と重なったこともあり、10 月以降更新が止まっている。本活動は不定期のボランティア活動であり、更新頻度は筆者の任意であるため、学業が一段落した時点で再開を予定している（なお筆者は 2023 年度で修了予定である）。

### 3 活動の振り返り

#### (1) SNS 投稿への反応

「Yocco の 1 日」英語発信企画への反応は、筆者が事前に期待していたほどではなかった。それでも、英訳を投稿した Instagram には「いいね！」が数件ついた。ただし「いいね！」したアカウントは、前節で言及した「Yocco18」のファンの方や地域関係者をはじめ、筆者が個人の X アカウントでもともと知り合い（相互フォロー）だった日本人（日本語ネイティブ）<sup>(3)</sup> が中心であった。一方、英語圏の出身・在住と思われるアカウントからの反応はほとんど見られなかった（この結果については、英語を母語とする人の目に触れたが、そのアカウントから「いいね！」が押されなかった可能性も考えられる）。

また、「Yocco の 1 日」英訳文解説ファイルの X 投稿については、フォロワーから「いいね」<sup>(4)</sup> を含む反応がもらえたり、自身の英語学習の一助になったりと、貴重な経験ができたものと思っている。しかしながら、英訳文の解説はあくまで日本人（非英語ネイティブ）の X ユーザーに向けて語学的な視座から説明を加えた活動であり、Instagram における英文の投稿とは別である。そのため、X への投稿に反応が集中する現状に満足するのではなく、「横浜の魅力を英語圏の外国人ユーザーに伝える」という当初の目標を達成するための方策を引き続き検討したい。

#### (2) 所感

筆者は当初、「Yocco の 1 日」投稿活動を Instagram に拡大することにより、英語圏のアカウントから数多くの「いいね！」や返信がつくものと見込んでいた。しかし、実際にはすでに面識がある方々からの反応が中心であり、投稿への返信はほぼ皆無であった。今回の活動を通して、SNS 投稿を多くの人々に見ってもらうことや大きな反響を巻き起こす（いわゆる「バズる」投稿を生み出す）ことの難しさを実感した。

#### (3) 結果の原因分析

「いいね！」や返信などの反応が得られなかった理由には、以下の原因が考えられる。

まず、本活動においては「いいね！」の数をいくつ得るか、フォロワーを何人獲得するかといった具体的な数値目標を特に定めておらず、反応が少ない状況を問題視していなかったという発信側の考え方が背景にある。「Yocco の 1 日」英語発信企画はあくまでボランティア活動の一環という位置づけであり、SNS 上の反応を促進することで消費意欲を掻き立てるといったビジネス的な発想とは一線を画すものである。そのため、SNS を用いてビジネスを展開する者にとって重要な「いいね！」やコメント、フォロ

ワーの数を増やすことに筆者らが注力していなかったことが要因として挙げられるだろう。

また、発信の対象となる外国人に対して「Yocco18」のキャラクターについて特に説明しておらず、発信を通して伝えたい内容が彼らに十分に伝わらなかった可能性もある。例えば、図1では「Mirai Tobe」(「戸部みらい」)というキャラクター名を説明なしに使用している。日本人の「Yocco18」ファンは「戸部みらい」が横浜市西区のキャラクターであることを知っているため、投稿で紹介されているイカリが西区みなとみらいのものと理解できるが、「Yocco18」を知らない外国人は「Mirai Tobe」の意味が分からないためにInstagramの投稿を読まないかもしれない。前提となるキャラクターに関する情報をあらかじめ共有しておくことも英語使用者からの反応を得るための方策として考えられる。目標言語の使用者の知識や文化的背景を考慮した訳出はプロの通訳者・翻訳者に求められるスキルのひとつでもあり(鳥飼 2013: 3)、今回の英語発信企画においても同様の配慮が必要であっただろう。

なお、プロジェクト趣旨を説明した英文(図5)を第1回目の英訳文(図1の右図)とあわせて試験的にInstagramに投稿しており、発信者の活動目的や投稿の方向性についてはすでに参照することができる状態となっている。この説明文は、筆者が用意した文章をもとにYocco株式会社が一部加筆したものである。しかしながら、プロジェクト全体についての説明は活動開始当初の1回にとどまっており、最初の投稿を見逃している人も一定数いると思われる。後から「Yocco18」や「Yoccoの1日」英語発信企画を知った人にもプロジェクトの内容を知ってもらえるよう、プロフィールの説明や同試験投稿へのリンクを筆者のXなどに随時再投稿する必要があったかもしれない。

図5: Yocco18による「Yoccoの1日」英語発信企画に関する説明のInstagram投稿



【Instagramへの投稿文】

The account name has been changed to "Yocco18\_English".

Yocco18 is a Japanese project in which its original characters provide information about Yokohama City for people interested in the community. "Yocco" means "Your Own City is Colorful and One of a kind". The project members are the same as "Ambassadors Japan". We have started this account because we also want international followers to know the appeal of Yokohama. We hope you will enjoy the city through our posts!

All the English posts come from Japanese tweets (#yoccoの1日), translated by Japanese people who are NOT English native speakers. We are thoroughly careful of the accuracy of the information.

#Yocco18 #yoccoの1日 #todaysyocco #yokohama #insta\_yokohama #findyouryokohama #yokohama\_love #myyokohama #internationalexchange #englishstudy

・ English translation: Special thanks to Keita Miyamoto (a graduate student at Aoyama Gakuin University) <sup>(5)</sup>

(出典: Yocco18によるInstagramでの2023年6月1日の投稿)

[https://www.instagram.com/p/Cs82xFXPzcB/?utm\\_source=ig\\_web\\_copy\\_link&igsh=MzRIODBiNWFIZA==](https://www.instagram.com/p/Cs82xFXPzcB/?utm_source=ig_web_copy_link&igsh=MzRIODBiNWFIZA==))

#### (4) 今後の課題

(3) を踏まえた今後の課題としては、「いいね！」するアカウントの多様化が挙げられる。「Yocco18」ファンや地域関係者、X における知り合い（相互フォロー）以外のアカウントからも反応がある状況が理想である。本活動の目的は「英語圏の外国人に横浜の魅力を伝える」ことであるため、投稿を見てくれる人をコミュニティの内部で完結させるのではなく、新規フォロワーの獲得に向けたプロモーションの効率化を図る必要があると考えられる。

#### (5) 目標達成に向けた展望

上記で記した課題を解決し、本プロジェクトの目標を達成するための今後の展望を以下に述べる。

まず、「Yocco の 1 日」英訳文は 2024 年 2 月時点で計 8 回しか投稿できていない。当面は英訳文の投稿数を増やすことが第一の目標である。投稿数が多ければそれだけ閲覧者も増える可能性が上がるからである。2023 年 4 月に本活動を開始したとき、Yocco 株式会社から「まずは 1 年間限定で活動してみる」ようにすすめられた。本稿提出締切日（2024 年 2 月末）で活動開始から 10 か月が経過し、もうすぐ 1 年になろうとしているが、筆者としては 1 年という期間にこだわらず、引き続き活動を継続していきたいと考えている。他の仕事などもしながらで時間的制約はあるものの、2024 年内に最低 18 回（1 区 1 回ずつ）は投稿したい。

投稿数が一定程度増えた後は、英語圏の外国人に対する認知度向上を目指したい。2024 年 2 月 8 日時点で、Yocco18 英語発信企画用 Instagram (yocco18\_english) のフォロワーは 215 名である。その中に外国籍と思われる人物のアカウントが数名含まれているが、彼らはフォローのみを行い、投稿には積極的な反応を示さない非アクティブ層であると見られる（本アカウントは Yocco 株式会社の前身「アンバサダーズジャパン株式会社」のアカウントを活用したものであるため、当時のフォロワーが残っている可能性もある）。筆者の投稿が英語圏の外国人の目に留まり、好意的な反応がもらえるようにするためには、現時点でフォローのみしている非アクティブ層の外国人に訴求するコンテンツを制作したり、新規の外国人フォロワーを獲得したりするといった方策が考えられる。ただし、対象となる英語圏のアカウントがアクティブではない（ユーザーが当該のアカウントを運用していない）場合、投稿を閲覧してもらえる蓋然性は低くなる。また、SNS のタイムラインに表示される投稿は各個人の選好性によって変容するといわれ、Yocco18 英語発信企画の投稿が彼らにとって興味があるコンテンツではないとプラットフォーム側で判定されている場合、投稿内容を工夫したとしても対象者のタイムラインで表示されず、結果として彼らの目に触れないことも想定される。従って、現在の外国人フォロワーに訴求するよりも新規のフォロワーを増やし、彼らに感心を持ってもらう方が容易に目標達成につながると考えられる。

英語圏の新規フォロワーをどのように獲得するか、その具体的方法は目下検討中であるが、例えば、いわゆるインフルエンサーが Instagram の投稿においてよく用いるハッシュタグを「Yocco の 1 日」英訳文の投稿に用いたり、X など別の SNS アカウントの外国人フォロワーに「Yocco の 1 日」英語発信企画用 Instagram のアカウントをフォローしてもらえるような仕組みを構築したりするといった手法が考えられる。

#### おわりに

本稿では、横浜市地域魅力発見プロジェクト「Yocco18」との社会連携の一環として筆者が行ってきた、彼らが X において運営している「Yocco の 1 日」の投稿の英訳版を Instagram に再投稿する活動について報告した。最後に、今回の活動が筆者のキャリア形成や自身の進路志望とどう関わるかを記すこととしたい。

筆者は進路のひとつとして、自身の専攻領域である英語や言語学の知識を生かした起業も考えている。Yocco 株式会社は、「Yocco の 1 日」を通して横浜の魅力を広める活動をはじめ、地域ブランディングを軸としたソーシャルビジネスを展開している。筆者は個人的に「Yocco18」のキャラクターのファンでもあるが、ファンという立場を離れて自らの将来を考えたとき、親しみにくい内容を平易に伝えるための方策など、彼らの活動内容や（ビジネスとして見た場合の）マーケティング手法は学ぶべきところが多いと考えている。彼らの地域活動における「難しい内容を分かりやすく」というテーマは、学術的・専門的内容を非専門家向けにどう伝えるかという学術界（大学院を含む）における課題と通底する。筆者の専門で言えば、言語学の専門用語を延々と並べて講釈したところで一般の人々は言語学に興味を持

たない。一般の人々に言語学を面白いと思ってもらうためには、例えば（「Yocco18」のような）キャラクターを制作し、キャラクターを通して言語学に関心を寄せてもらうといった工夫を検討すべきだろう（キャラクター制作に固執しているのではなく、興味のきっかけとなる機会を提供する工夫が大切であるという主張である）。これは言語学に限らずどの学問分野にも言えることではないだろうか。筆者の活動テーマはこのような問題意識から出発しているものである。今回のボランティア活動は、「専門から一般への架け橋」となるうえで一種の下積みとしての位置づけとなりうると考える。

「Yoccoの1日」英語発信企画は開始からまだ日が浅く、現段階では満足のいく成果を出したとは言い難い。英訳文の投稿数が少ないうえ、フォロワーの属性に偏りがあり、「いいね！」などの積極的な反応を示す層も日本語ネイティブが中心だからである。日本人だけでなく英語圏の外国人にも投稿を見てもらい、横浜の地域性を好意的にとらえてもらうためには、漫然と英訳活動が続けるのではなく、ターゲットとなる外国人がどのようなSNS投稿に魅力を感じるのかを調査したうえで、データの分析に基づいて活動を展開すべきである。2023年は筆者の学業や仕事に伴う物理的制約から上記のような手法がとれなかったが、2024年は大学院修了により筆者の裁量による部分が大きくなる見込みである。Xにおける「Yoccoの1日」英訳文の過去投稿の解説を引き続き行っていくことと、Instagramにおいて英語圏の外国人フォロワーを増やすこと、そして彼らに横浜の魅力が伝わり、紹介したスポットを訪れてみたいといった好意的な反応が目に見える形で引き出せるように活動を展開していくことが今後の目標である。

## 謝辞

本プロジェクトの実施に際して、英訳文の出典元となる公式Xを運営するYocco株式会社の遠藤望氏および坂口祐太氏に多大なご協力をいただいております。青山学院大学における筆者の専攻と進路の希望を汲み、活動指針に関して有益な助言をくださった遠藤氏、「Yoccoの1日」英訳文をInstagramに投稿するにあたり英文のチェックと修正点の指摘をいただいた坂口氏に、この場を借りてお礼申し上げます。

## 注

- (1) 実際に投稿しているのは遠藤氏であるが、便宜上「筆者による投稿」と表現している。
- (2) 「星川とばり」はYocco18の保土ヶ谷区のキャラクターである。
- (3) 厳密に言うと、学術的には「日本人」と「日本語ネイティブ」は異なる概念である。民族的に「日本人」である（と自覚する）者が必ずしも「日本語ネイティブ（＝日本語を母語（第一言語）とする者）」であるとは限らず、同様に日本語を母語とする者が民族的にも日本人であるとは限らないからである。最近の例を挙げると、ミス日本グランプリ（後に私生活に関する一部報道を受け辞退）に選出された椎野カロリーナ氏はウクライナ人の両親をルーツに持ち、民族的には「日本人」ではないが、彼女は幼少期より日本で暮らしているため、日本語を第一言語として生活しているという。ポリティカル・コレクトネスのみならず言語学の観点からも、言語は民族的出自に関係なく習得されるため（久保田 2007: 11）、「日本人」と「日本語ネイティブ」を同義に用いるのは避けるべきである。しかしながら、本稿では簡略化のためにあえて「日本人」という用語を「日本語ネイティブ」の意で用いている場合があることに注意されたい。
- (4) Xにおける公式表記では「いいね（like）にエクスクラメーションマーク (!) がつかない（「〇〇さんがあなたのポストをいいねしました」／“〇〇 liked your post”）が、Instagramではエクスクラメーションマーク (!) がついた「いいね！」の表記（「〇〇他が「いいね！」しました」／“Liked by 〇〇 and others”）が採用されているため、本稿でもXとInstagramで表記を区別する。
- (5) 筆者による日本語訳を下掲する（補足箇所を〈 〉で示す）。

〈アンバサダーズジャパン株式会社〉のアカウント名が「Yocco18\_English」に変更されました。

「Yocco18」はオリジナルのキャラクターたちが〈横浜の〉地域に関心のある人々に横浜市の情報を提供する日本のプロジェクトです。「Yocco」とは「Your Own City is Colorful and One of a kind」〈それぞれの街に多彩でユニークな魅力がある〉の意です。プロジェクトのメンバーは「アンバサダーズジャパン」と同じです。私

たちがこのアカウント〈による発信〉を始めたのは、海外のフォロワーにも横浜の魅力を知ってほしいと考えているためです。投稿を通して〈横浜〉市〈のスポットやその魅力〉を楽しんでいただけたら幸いです！

英文による投稿はすべて日本語のツイート（#yocco の 1 日）に基づくものであり、英語を母語としない日本人によって英訳されています。私たちは情報の正確性に細心の注意を払います。

#Yocco18 #yocco の 1 日 #todaysoyocco #yokohama #insta\_yokohama #findyouryokohama #yokohama\_love #myyokohama #internationalexchange #englishstudy

・英訳：宮本恵太氏（青山学院大学大学院生）に謝意を表します。

## 参考文献

遠藤望, 「Yocco の 1 日 英語発信企画」, Yocco18, 2023.

久保田正人, 『ことばは壊れない: 失語症の言語学 <開拓社 言語・文化選書 4>』, 開拓社, 2007.

松田美佐, 「若者のコミュニケーション・メディア利用 2020: Twitter 愛好者と Instagram 愛好者」『中央大学紀要・社会学・社会情報学』 32: 143-157, 2022.

宮本恵太, (Instagram による投稿: 2023 年 6 月 2 日), 2023, ([https://www.instagram.com/p/Cs\\_jMBJxdcc/?utm\\_source=ig\\_web\\_copy\\_link](https://www.instagram.com/p/Cs_jMBJxdcc/?utm_source=ig_web_copy_link), 2024.1.30 アクセス)

宮本恵太, (Instagram による投稿: 2023 年 9 月 19 日), 2023, ([https://www.instagram.com/p/CxYAIQKPwYl/?utm\\_source=ig\\_web\\_copy\\_link](https://www.instagram.com/p/CxYAIQKPwYl/?utm_source=ig_web_copy_link), 2024.1.30 アクセス)

宮本恵太, (X による投稿: 2023 年 9 月 21 日), 2023, ([https://x.com/K\\_Miyamoto0603/status/1704853696205693422?s=20](https://x.com/K_Miyamoto0603/status/1704853696205693422?s=20), 2024.1.30 アクセス)

沼田利明, 「Facebook、若者離れ&ユーザー激減が深刻…もはや、おじさんの道具?」『ビジネスジャーナル』, 2015, ([http://biz-journal.jp/2015/09/post\\_11583.html](http://biz-journal.jp/2015/09/post_11583.html), 2024.2.11 アクセス)

高谷邦彦, 「ソーシャルメディアは新しいつながりを生んでいるのか: 女子学生の利用実態」『名古屋短期大学研究紀要』 55: 13-27, 2017.

鳥飼玖美子編著, 『よくわかる翻訳通訳学』, ミネルヴァ書房, 2013.

Yocco18, (X による投稿: 2023 年 4 月 9 日), 2023, (<https://x.com/yokohama18ku/status/1644897932683116545?s=20>, 2024.1.30 アクセス)

Yocco18, (X による投稿: 2023 年 4 月 20 日), 2023, (<https://x.com/yokohama18ku/status/1648884199259254784?s=20>, 2024.1.30 アクセス)

Yocco18, (Instagram による投稿: 2023 年 6 月 1 日), 2023, ([https://www.instagram.com/p/Cs82xFXPzcB/?utm\\_source=ig\\_web\\_copy\\_link&igsh=MzRIODBiNWF1ZA==](https://www.instagram.com/p/Cs82xFXPzcB/?utm_source=ig_web_copy_link&igsh=MzRIODBiNWF1ZA==), 2024.4.9 アクセス)

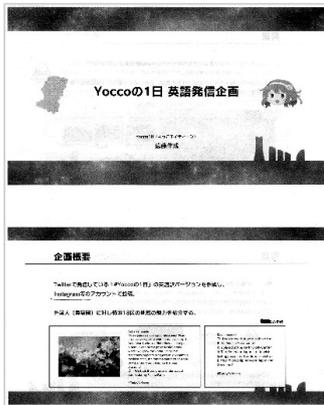
Yocco18, (X による投稿: 2024 年 1 月 1 日), 2024, (<https://x.com/yokohama18ku/status/1741655490587992344?s=20>, 2024.2.11 アクセス)

Yocco18, 「Yocco18 とは?」 (<https://www.yocco18.com/pages/3694785/about>, 2024.2.10 アクセス)

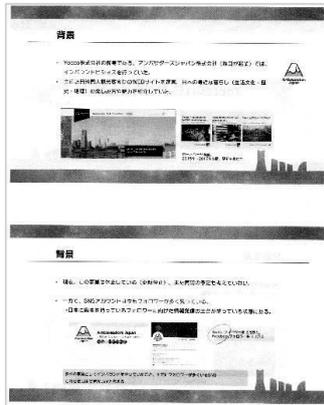
吉枝恵, 「英語アウトプットの間としてのインスタグラムの教育的な利用」『JACET 中部支部紀要』 20: 85-100, 2022.

資料

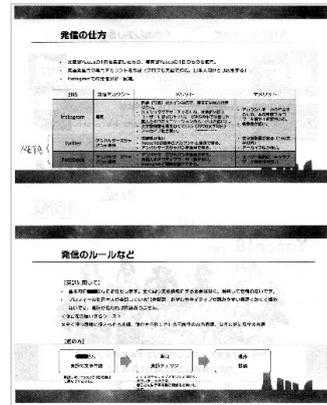
「Yoccoの1日 英語発信企画」(遠藤 2023) ※筆者による打ち合わせ時のメモ書きあり



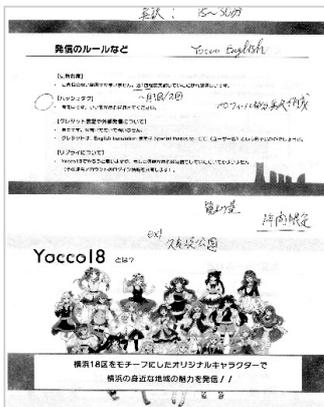
p.1



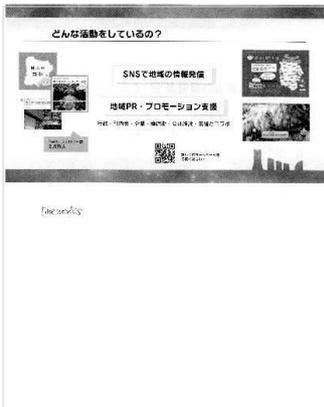
p.2



p.3



p.4



p.5

## Ⅱ シビックエンゲージメントセンター活動報告



## コンテンツガイド（2023年度シビックエンゲージメントセンター活動）

## 2023年度新規企画・事業

落書き対策ボランティア	79
渋谷・笹塚プロジェクト「夏の草むしり隊ボランティア」	81
相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト（わかば）	83
相模原市立小学校連合運動会ボランティア（相模原地域小中学校等連携事業）	85
淵野辺小学校連携企画（相模原地域小中学校等連携事業）	86
富士見小学校連携企画（相模原地域小中学校等連携事業）	86

## 子ども支援関係の活動・事業

広尾中学校アフタースクールボランティア	80
渋谷区こどもテーブルボランティア	80
相模原市立小学校連合運動会ボランティア（相模原地域小中学校等連携事業）	85
淵野辺小学校連携企画（相模原地域小中学校等連携事業）	86
富士見小学校連携企画（相模原地域小中学校等連携事業）	86
学生×子どもの居場所づくりセミナー	104
青学生と子どもたちの「ゆめどこ」（ボラサポ）	107

## 被災地支援、防災関係の活動・事業

令和6年能登半島地震への対応	75
もしもプロジェクト青学	78
「トルコ・シリア大地震と国際協力」（ボラカフェ）	91
災害救援ボランティア講座	102
防災ボランティア講習	103
災害・復興支援活動に対するサポート制度	105
ペットボトル灯籠プロジェクト（ボラサポ）	108

## 環境保全関係の活動・事業

なな山緑地ボランティア	87
作ろう！Myらぶらび	95
脱ビニール使い捨てプロジェクト（ボラサポ）	106
あらとう青山祭 2023（ボラサポ）	108

## 地域活性化・まちづくり関係の活動・事業

渋谷・笹塚プロジェクト「夏の草むしり隊ボランティア」	81
相武台団地活性化プロジェクト	82
藤野プロジェクト	82
藤野特産品（地産ガチャ）	100
相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト（わかば）	83

## 高齢者支援関係の活動・事業

渋谷・笹塚プロジェクト「夏の草むしり隊ボランティア」	81
相武台団地活性化プロジェクト	82
認知症サポーター養成講座	101

**障がい者支援関係の活動・事業**

作ろう！ My らぶらび .....	95
ユニバーサルマナー検定3級（障がい WEEK 企画） .....	97
「障がいってどこにある？あなたの『ふつう』はみんなの『ふつう』？」 （ボラカフェ）（障がい WEEK 企画） .....	97
バリアフリーまち歩きイベント（障がい WEEK 企画） .....	98
手話コミュニケーション講座（障がい WEEK 企画） .....	99
アート企画展（障がい WEEK 企画） .....	99

**国際協力・難民支援関係の活動・事業**

カンボジア日本語サロン .....	88
「トルコ・シリア大地震と国際協力」（ボラカフェ） .....	91
「ウクライナ侵攻と避難民」（ボラカフェ） .....	91
「なぜ青学を卒業して、国際機関で国際協力事業に携わることになったのか?!」（ボラカフェ） .....	93
2023年度国際協力プランナー入門 .....	102
青山学院大学難民映画祭（ボラサポ） .....	107

**その他の活動・事業**

「何事にも挑戦～先輩OBの巻揉まれ力とツナガルカ～」（ボラカフェ） .....	90
「奄美大島のノネコ問題と保護活動」（ボラカフェ） .....	92
「なぜ青学から介護の世界に進み、そして市議会議員に?!」（ボラカフェ） .....	93
青山学院大学 学生ボランティア・フォーラム 2024 .....	94
ヒューマンライブラリー@青学 2023 .....	96
教職員ボランティア活動補助プログラム .....	105
AOGAKU ボランティアネットワーク .....	109
シビックエンゲージメントセンター勉強会 .....	110
正課科目への協力 .....	111
青山スタンダード科目「ボランティア・市民協働論」の実施 .....	112
学生スタッフの活動 .....	113

## 2024（令和6）年能登半島地震への対応

2024年1月1日に能登半島地方で発生した地震発生を受け、青山学院大学シビックエンゲージメントセンターでは、「遠隔地で発生した災害への支援について（2018年度第1回運営委員会承認）」に基づき対応を開始した。

2018年度第1回ボランティアセンター運営委員会承認（6/28）

### 遠隔地で発生した災害への支援について

#### 1 情報収集

- ・災害の詳細
- ・現地の被害状況
- ・他大学を含む外部の対応
- ・学内の各部署での対応状況

#### 2 学生への情報発信

現地の安全性が確認できるまで現地での活動は控えるようにアナウンス  
 ※発信者はボランティアセンター  
 ※文面原案は使いまわせるよう考案予定

#### 3 vcとしての対応判断

災害の規模に応じてvcの対応を決定（正副センター長判断）

- 0 支援なし
- 1 募金活動
- 2 物資支援
- 3 現地視察→学生派遣

#### 4 対応判断に基づく支援活動等の実施

### 1 情報収集

#### （イ）被害状況

2024年1月1日16:10頃、能登地方を震源とする最大マグニチュード7.6の地震が発生。能登半島では地震による津波や火災が発生し、新潟県、富山県、石川県及び福井県の35市11町1村に災害救助法が適用された。最も被害の大きかった石川県では241人の死亡が確認、およそ10万棟の家屋が被害を受けた。（内閣府 防災情報ページ：<https://www.bousai.go.jp/updates/r60101notojishin/r60101notojishin/index.html>、3/19時点）

#### （ロ）対応状況

石川県、石川県民ボランティアセンター、全社協被災地支援・災害ボランティア情報、東京ボランティア市民活動センター等、自治体および外郭団体のHPで支援状況を確認。他大学の対応状況については、学生数1万人以上の大学の対応状況を調査した。自治体、外郭団体においては、（発災後から調査を継続した1月9日において）被災状況および寄附の受付についての情報が多く、大学においては、被災した学生および教職員へ向けて、学業や経済的支援にかかわる案内が掲載されていた。

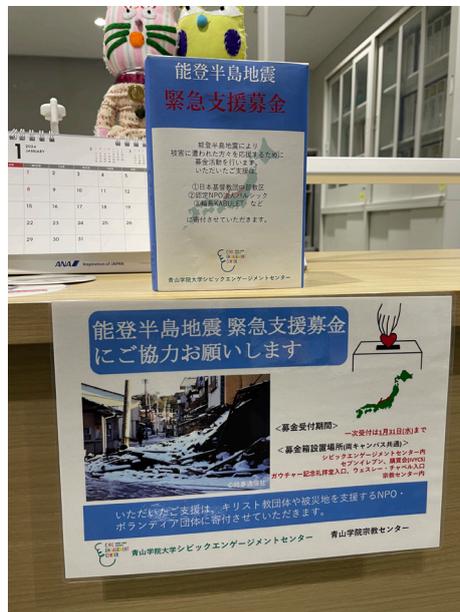
## 2 学生への情報発信

- ・注意喚起のアナウンスを1月11日に学生ポータルで発信。寄付など遠隔地からの支援方法を案内した。
- ・1月15日に学生/事務ポータルを通じて緊急支援募金開始のメッセージを発信。
- ・注意喚起メッセージ第二報を1月26日に発信。被災地の災害ボランティアセンターや支援団体で災害ボランティア活動の受付開始となったため、ボランティア保険加入手続きや活動時の注意点などを案内した。

## 3 センターとしての対応判断

### (イ) 募金活動

宗教センターと連携する形で2024年1月15日から第一次緊急支援募金活動を行った。学内に設置した募金箱の他、国際マネジメント研究科有志からの寄付(57,890円)を合わせ総額242,400円が寄せられ、3つの団体に分配する形で寄付した。実施期間は3月末までとし、4月以降は第二次支援募金として実施することとした。



### <募金概要>

能登半島地震 緊急支援募金 (一次)		
期間	2024年1月15日(月)～31日(水)	
実施体制	青山キャンパス	シビックエンゲージメントセンター 宗教センター 青山学院購買会(株式会社アイビー・シー・エス)
	相模原キャンパス	シビックエンゲージメントセンター 宗教センター 青山学院購買会(株式会社アイビー・シー・エス)
募金総額	242,400円	
寄付先	日本基督教団中部教区 認定NPO法人パルシック 輪島 KABULET(社会福祉法人佛子園)	

## (ロ) 現地視察

1月30日よりコーディネーター1名がボランティアニーズ調査を目的として能登町、輪島市を訪問。能登町では認定NPO法人パルシック（以下パルシック）と活動を共にしながら被災状況を確認した。輪島市では公益社団法人青年海外協力協会が実施している被災地支援に参加する形で滞在し、学生ボランティア派遣の可能性について調査を進めた。

## (ハ) ボランティア活動支援

現地視察の報告とボランティア募集の案内を兼ねた報告会を2月27日に実施。センターとしての学生ボランティア派遣の実施は見送り、外部団体が実施している災害ボランティア募集の案内や、活動にあたっての注意点などの説明を行なった。また、本学生向けに宿泊拠点の確保と、具体的な活動（避難所でのコーヒーの炊き出し、支援物資配布）の提案をいただいたパルシックのボランティア募集については、センターにて参加学生の取りまとめを行った。

## (二) 現地での活動

3月19日から3月30日にかけて学生7名が2陣に分かれてパルシックの活動に参加。参加学生には活動中に活動日誌を提出してもらい、活動内容や体調管理などのモニタリングを行った。また、センターからコーヒーの炊き出しに相性の良いお茶菓子（クッキー300枚）を支援物資として提供した。

## &lt;現地活動概要&gt;

活動日	活動内容	活動地域
3月19日（火）	活動拠点整備 / 物資搬入	能登町
3月20日（水）	コーヒー炊き出し / 支援物資ニーズ調査	能登町、輪島市
3月21日（木）	コーヒー炊き出し / 紅茶、お茶菓子の提供	輪島市
3月22日（金）	視察 / 炊き出し / 傾聴	珠洲市、能登町
3月23日（土）	子ども向けピザ作り体験お手伝い	能登町
3月26日（火）	コーヒー炊き出し / お茶菓子の提供	能登町
3月27日（水）	物資配布、炊き出し	輪島市
3月28日（木）	小学生と交流 / コーヒー炊き出し / 活動拠点整備	能登町
3月29日（金）	家屋の清掃 / コーヒー炊き出し / 物資配布 / 視察	能登町
3月30日（土）	子供向けピザづくり体験お手伝い	能登町

## ボランティアプログラム

事業名	もしもプロジェクト青学
日時	2023年7月2日(日) 15:00～15:40 2023年9月2日(土)、3日(日) 9:00～17:00
場所	①そなエリア(東京臨海広域防災公園) ②代々木公園
参加人数	①運営メンバー:4名、参加者:20名 ②啓発広告検討チーム:7名、CECブース運営担当:4名、当日ボランティア:6名
内容	①昨年度に引き続き、防災教育普及活動の一環として防災教育普及協会が開催する「防災クイズ&ゲーム Day2023」にももしもプロジェクト青学チームとして出展した。夏の旅行をテーマとした謎解きクイズを学生たちが考案し、海岸エリアでの地震発生時に必要な備えや避難行動の知識について参加者に楽しみながら学んでもらった。 ②こくみん共済coopと渋谷区共催の総合防災イベント「TOKYO もしも FES 渋谷 2023」にセンターとして参画した。学生の参加促進として今年には1) 広告検討チーム、2) ブース出展チーム、3) 当日ボランティアという3つの方法を提示。1)の広告検討チームはFES開催前後1週間の広告展開に向けて、学生メンバーたちがわかりやすい広告メッセージは何か企画会議を通じてアイデア出しを行った。2)のブース出展はもしもプロジェクト青学チームがCECブースの展示内容を企画し、当日の運営を担う。出展内容は「青山学院と災害対応」というタイトルのパネル展示他、学生が企画した「ぼうさい縁日」として防災クイズ&輪投げ、もしも占い、謎解きラリーの3つのコンテンツを披露し、輪投げの景品として青学カレー他、大学備蓄の非常食を配布した。3)の当日ボランティアはFES全体をサポートスタッフとして、当日会場内の運営に携わった。
成果	①青学チームは今年からの新しいメンバーも加わり、クイズやシナリオ作り、SNS広報など協力しながら取り組むことができた。 当日は大学生やヤングファミリーでほぼ会場は満席となった。 謎解きは最後まで解けないチームもいたが、クイズ終了後には津波発生時の避難行動を実際に取ってもらうことで体得する良い機会となった。 終了後には小平市で地域活動を行っている方から、地域の青少年育成活動として毎年行っている防災キャンプにおいて同様の謎解きゲームを披露して欲しいという依頼があり、実施に前向きな学生がいたことから7月22日(土)に小平第二小学校にて謎解きゲームを披露した。 ②FES事務局の公式発表によると総来場者数は2万2千人。 CECブースの来場者数の目安として防災クイズ&輪投げ参加が833名、謎解きラリー参加が89名であり、1日あたり400名以上の方に来場いただいたこととなる。 2日間、天候にも恵まれ、子ども連れからお年寄りや外国人居住者などさまざまな方々に楽しみながら防災・減災について学んでもらう機会を提供できた。
	
Tokyo もしも FES 渋谷 2023	

事業名	落書き対策ボランティア
日時	1回目：2023年8月3日（木）9：00～10：00 2回目：2023年12月2日（土）9：00～10：15
場所	高等部グラウンド脇の公道
参加人数	1回目：2名、2回目：3名
内容	学院の敷地に面する公道の落書きを消去する活動。2011年に元青山女子短大の教員、学生が制作した壁画アートを維持するために青学が主体となり消去作業を行っている。活動初回の8月は渋谷区と連携し、区から資材等は提供いただいた。また作業そのものは一般社団法人 CLEAN&ART の方の指導の元、行われた。12月開催時は冒頭にコーディネーターが落書きとストリートアートの違いや渋谷区の落書き問題、青学の取り組みについてレクチャーし、その後消去作業を行った。その際は元短大から譲渡された資材を使用した。
成果	活動に先立ち CLEAN&ART の傍島氏やコーディネーターから落書きの歴史的背景や活動場所の説明を行うことによりストリートアートと落書きに関する知識を得るとともに活動へのモチベーションを高めることができた。2回とも少人数での作業ということもあり終始会話しながらアットホームな雰囲気での活動となった。 実際に赤いスプレーペイントの落書きが落ちていく様子から手ごたえを感じる一方で、落書きの再発そのものを抑制することは困難なことから、抜本的な落書き対策が必要であるとの声も上がった。
協力団体	渋谷区環境政策部環境整備課きれいなまちづくり係、一般社団法人 CLEAN&ART
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">8月の活動</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <p>作業前</p> <p>作業後</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>12月の活動</p> </div>	

事業名	広尾中学校アフタースクールボランティア
日時	2023年5月24日～2024年3月13日
場所	渋谷区立広尾中学校 校内
参加人数	7名
内容	NPO 法人ピアサポートネットしづやが渋谷区立広尾中学校と連携し取り組む「広尾アフタースクール」に青学生がボランティアとして継続的に実施。 大学生には参加条件として、短期の活動ではなく通年で児童と関係性を築いていくことを提示し、それに賛同した学生が参加した。
成果	宿題や定期試験前のテスト勉強を取っ掛かりにかかわりを始め、黒板を使って絵しりとりや参加者同士の質問コーナーなどをはさみつつ学習支援とは異なる場になるよう意識して取り組んだ。 大学生の恋愛話や趣味の話で盛り上がる場面や、海外にルーツのある生徒と留学生の大学生が母国語で交流する場面もあり、大学生と中学生の「ななめの関係性」が形成される場となった。
協力団体	NPO 法人ピアサポートネットしづや、渋谷区立広尾中学校
	

事業名	渋谷区子どもテーブルボランティア
日時	2023年4月1日～2024年3月31日（通年）
場所	各子どもテーブル活動先
参加人数	申込件数 20件
内容	渋谷区社会福祉協議会が運営する渋谷区子どもテーブルの活動先 14 か所に対する学生ボランティア募集の告知協力と学生のボランティア希望に対する連絡調整等コーディネートを行った。 < 活動紹介先 > なつつの木、代々木子どもテーブル～春の小川～、ゆめとぴあマルシェ、恵比寿じもと食堂、上富ダイニング、子どもと一緒に遊び隊、みんなの世界テーブル、みんなの食卓、恵比寿ママ食堂、ささはたっこ、みらい区、やずびょんち、ひといく夢テーブル
共催団体	渋谷区社会福祉協議会
	

事業名	渋谷・笹塚プロジェクト「夏の草むしり隊ボランティア」
日時	2023/8/17、8/24、8/31、9/7、9/14（木）9:00～11:00 全5回
場所	笹塚エリア個人宅、都営団地、十号いこいの場（拠点）
参加人数	13名（参加回数 1日のみ9名、2日間3名、4日間1名） 8/17…2名、24日…8名、31日…3名、9/7…3名、14日…3名 延べ19名
内容	一般社団法人TEN-SHIP アソシエーションと連携し、渋谷区笹塚エリアの戸建て住宅や都営団地の庭を中心に、草むしり活動を計5回実施した。 活動前に地域の高齢化や独居住民の増加等による地域課題について代表の戸所氏に説明いただき、草むしりを通じた住民の生活相談としてのアウトリーチ機能や、継続的な見守り支援の重要性をお話いただいた。
成果	各回2～8名の学生が参加。5日間の活動の内、1日みの参加から4回参加の学生もいた。中には1年生グループ7名の申込みがあり、友達同士初めてのボランティア参加としてプログラムの気軽さがあったようである。 活動後に草むしりの依頼があった住民から、庭に生い茂った雑草が除去され、すっきりしたことで「(庭が見たいから)次は窓もキレイにしたいわ」という声をいただいた。以前よりも自身が動けなくなっている状況で諦めかけていたことに、希望を取り戻す姿を学生が目当たりすることで、地域住民が抱える身近な課題に目を向ける意義に気づき、やりがいを体感できる活動になったといえる。 参加回数が最も多かった学生からは、今後も笹塚地域にかかわる活動への参加を希望する声もあり、ボランティア初心者向けの1day活動としての側面と、より深く地域課題へ取り組むための課題解決型活動としてプログラム発展の余地がある活動であった。
協力団体	一般社団法人TEN-SHIP アソシエーション



事業名	相武台団地活性化プロジェクト
日時	① 2023年5月末～12月22日(金) 事業所での活動 ② 2023年6月～12月 毎月第3または第4水曜 ミーティング ③ 2023年11月7日(火) 18:30～20:00 認知症サポーター養成講座にて活動発表 ④ 2023年12月1日(金) 12:40～15:30 相模原市共和中学校にて福祉体験学習に参加 ⑤ 2024年1月29日(月) 16:30～17:30 活動報告会
場所	認知症対応型デイサービスおとなり(相武台団地商店街) / オンライン / 相模原キャンパス / 相模原市共和中学校
参加人数	7名(途中1名辞退)
内容	学生一人あたり週1回の頻度で受入先での活動と、商店街の季節行事へ参加した。また活動のアウトプットとして、認知症サポーター養成講座や共和中学校の福祉体験講座へ参加した。活動終盤にはメンバー各自で受入先にて行える企画を考え、実現へ向けて取り組んだ。
成果	認知症を含めた高齢者介護への理解を深めることができた。一方で地域活性化への取り組みについては、今年度は商店街の季節行事に参加する程度でおさまってしまった。他のプロジェクトと比較して活動回数の多いプロジェクトではあるが、日々の活動は事業所の営業日に分かれてそれぞれ行っているため、チームワークを確立することが難しい。特に今年度はメンバー間のコミュニケーションが少なかった印象があり、その結果、一体感を持って地域活性化へ取り組むような企画が生まれなかった。次年度は月例ミーティング等を利用した積極的なコミュニケーションを促す工夫と、事業所での経験を経て商店街の活性化へ取り組むような計画を示していきたい。
協力団体	認知症対応型デイサービスおとなり
	 

事業名	藤野プロジェクト
日時	【里山体験ツアー】 ① 2023年6月24日(土) 9:30～16:00 ② 10月21日(土) 9:00～16:00 【しのばら園芸市ボランティア】 ① 2023年4月16日(日) ② 7月9日(日) ③ 7月30日(日) ④ 10月21日(土) ⑤ 11月19日(日) ⑥ 12月1日(金) 18:00～12月3日(日) 17:00 ⑦ 2024年2月25日(日) ⑧ 3月23日(土) ①～⑤ 9:30～16:00 / ⑦ 9:30～14:00 / ⑧ 9:30～15:30
場所	相模原市緑区藤野地域(佐野川、小淵、牧野)
参加人数	【里山体験ツアー】 ① 9名(申込10名) / ② 2名 【しのばら園芸市ボランティア】 ① 3名 ② 3名 ③ 8名 ④ 4名 ⑤ 7名 ⑥ 6名 ⑦ 5名 ⑧ 5名
内容	“芸術のまち”“都心に一番近い里山”といった名称をもつ相模原市緑区藤野地区(旧藤野町)について知り、青学生の地域に根差した社会貢献活動を広げていくことを目的としたプロジェクト。里山体験ツアーについては、受入宅にて竹を使った食器の製作や、地域の伝統料理であるうどんを製麺しながら交流を深める一日と、里山にて竹炭づくりや水路づくり、土壌改善を行う山の整備体験を実施した。 しのばら園芸市ボランティアについては、藤野地域・篠原地区の若手移住者たちによって立ち上がった野外イベント「しのばら園芸市」の開催に向けて会場づくりや、プレ開催当日の運営を担った。

**成 果**  
 里山体験ツアーについては3年目を迎えたが、これまでの藤野観光協会様の協力に加えて、NPO法人ふじの里山くらぶ様のサポートをいただき、里山の整備作業に触れることができた。また本ツアーをきっかけにしのぼら園芸市ボランティアの活動へ加わる学生が出てくる等、プロジェクトの導入部分での機能は十分に果たすことができた。  
 しのぼら園芸市ボランティアについては、活動回数を重ねるごとに実行委員会の方々との良好な関係を築いていくことができた。12月は本プロジェクト初の宿泊を伴う活動となったが、問題なく終わることができた。最寄り駅から現地までは公共交通機関がなく、道幅の狭い山道となるため、移動手段が限定されるといったボトルネックが存在するが、同じ市内で中山間地域の実態に触れながら、藤野地域の住民と共にユニークな活動に取り組んでいける貴重なフィールドであることを再認識した。

**協力団体** 藤野観光協会、NPO 法人ふじの里山くらぶ、しのぼら園芸市実行委員会



<b>事業名</b>	相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト（わかば）
<b>日時</b>	2023年5月10日（水）～2024年3月13日（水）
<b>場所</b>	相模原キャンパス / 相模原市中央区内各所
<b>参加人数</b>	学生15名
<b>内容</b>	相模原キャンパスの所在地である相模原市中央区について、学生の目線で同地域の魅力を発掘し、発信する活動を企画・実施する活動を行った。この活動を通して相模原地域（特に大学周辺地域）に対する学生の理解を深めるとともに、地域活動への参加意欲を高めることを狙いとしました。 プロジェクト内に①Instagramチーム、②ツアーチーム、③自由企画チームの3チームを構成し、各チームがそのテーマに合わせた活動を企画・実施した。毎月1回のプロジェクト全体ミーティングに加え、チームごとのミーティング、そしてチームごとの企画の準備等随時実施している。

<p>内 容</p>	<p>&lt;全体での活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎月1回の全体ミーティング</li> <li>・『広報さがみはら』（相模原市広報紙）中央区特別ページへの企画参加</li> <li>・シビックエンゲージメントセンター紀要『シビックエンゲージメント研究』への論文（実践報告）投稿</li> <li>・6月3日：相模原市中央区を知るためのツアー（相模原市立博物館、JAXA 相模原キャンパス、鹿沼公園、にここ星ふちのべ商店会）</li> <li>・10月7日・8日：相模原祭（大学祭）教室企画出展（藤野プロジェクト、相武台団地活性化プロジェクトとの合同出展）</li> <li>・11月15日：中間報告会</li> <li>・2月15日：コミュニティラジオ出演</li> <li>・3月15日：活動報告会</li> </ul> <p>&lt;Instagram チームの活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中央区公式 Instagram とのコラボ投稿「中央区さんぽ」（週1回投稿）</li> <li>・12月4日～1月15日：Instagram 上での相模原市中央区フォトキャンペーン「冬のキラキラ」実施</li> </ul> <p>&lt;ツアーチームの活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・11月18日：「魅力発掘！！相模原市中央区ツアー」実施（亀ヶ池八幡宮・ゴールド神社、上溝商店街、横山公園、さがみはらグリーンプール）</li> </ul> <p>&lt;自由企画チームの活動&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中央区生産のワイン、「さがみわいん」のラベルデザイン募集、PR・販売企画</li> </ul> <p>また、これら各チームの活動とは別に、相模原商工会議所「相模原お店大賞」実行委員会が運営する相模原お店大賞の学生委員として本プロジェクトから学生1名を推薦し、委員として約1年間活動している。</p>
<p>成 果</p>	<p>本プロジェクトは今年度立ち上がった新設企画であり、また企画の検討から実施まで学生たち主導で行ってきたため、学生たちは前例のない中、模索しながら自分たちの企画を検討し実施することができた。また区役所職員の方々をはじめ、多くの地域の方々と接することで、学生達にとっては良き社会人のロールモデルとして、その姿から学ぶことが多かったといえる。また、中央区の魅力を発信するために取材や調査を行い、頻繁に地域に出て活動していたため、参加した学生たちにとっても地域の魅力を知り、地域を理解することにつながったといえる。</p>
<p>協 力 団 体</p>	<p>相模原市中央区役所</p>



事業名	相模原市立小学校連合運動会ボランティア（相模原地域小中学校等連携事業）
日時	2023年10月3日（火）～6日（金）9：00～15：30 （学生が参加したのは10/4～6）
場所	相模原ギオンスタジアム
参加人数	学生8名 10/4：5名、10/5：3名、10/6：3名（延べ11名）
内容	<p>学生たちが地域の子どもたちと関わるボランティアの機会として、相模原市立小学校連合運動会（相模原市内の全ての市立小学校6年生及び義務教育学校6年生が出場）の運営ボランティアを行った。相模原市における教育の取り組みの一つである連合運動会を通して地域への理解を深めること、また、子どもたちとの交流を通して大学生が子どもと関わることの意義などを感じてもらうとともに、子どもたちや学外の大人である小学校の先生方と接する中での学生たちの成長を期待し、連携企画として実施した。</p> <p>相模原市立小学校連合運動会側としては、地域の一員である大学生とのつながりを通して、子どもたちへの教育効果を期待し、また「人（財）が宝」をモットーとする相模原市の教育に関心と理解をもってほしいという思いから、学生たちのボランティアを受け入れていただいた。当日は競技の運営補助（走り幅跳びの砂ならし、走り高跳びのバーの補助、各種競技の道具の片付け等）や児童招集時の補助やウォーミングアップの手伝いなど、子どもたちの競技に近い場面でのボランティアを行った。</p>
成果	<p>今回は市内の市立小学校6年生及び義務教育学校6年生全員が集まる大規模な体育行事でのボランティア活動であり、小学校の日常に入っていく形のボランティアというよりも、非日常的な場面での活動であったが、学生たちにとっては地域の小学生や先生方と接する貴重な機会となった。相模原地域小中学校等連携事業の他の企画（淵野辺小学校連携企画、富士見小学校連携企画）と異なり、単発のボランティアとして募集・実施したものである。10/4は雨の中の開催となったが、それでも参加した学生たちは楽しみながら活動できていたようである。また、ボランティア学生の中には外国人留学生も含まれており、日本の小学生に対する理解が深まったものと思われる。</p>
協力団体	相模原市立小学校体育的行事実行委員会



事業名	淵野辺小学校連携企画（相模原地域小中学校等連携事業）
日時	2023年8月21日（月）打ち合わせ会 9月15日（金）～12月8日（金）隔週金曜日 13:30～14:30 9月25日（月）・11月20日（月）相模原キャンパス見学 2024年1月26日（金）お礼の会
場所	相模原市立淵野辺小学校
参加人数	①定期的な活動への参加：4名 ②キャンパス見学対応への参加：9/25 5名、11/20 1名 （②には①への定期参加学生以外の単発参加学生も含む）
内容	相模原地域小中学校等連携事業の一企画として、淵野辺小学校4年生の総合的な学習の時間へのサポートのボランティア活動を行った。 淵野辺地域の魅力発信をテーマに活動する子どもたちに対して、授業中のグループワークやディスカッション等に学生が入り、子どもたちへの助言やアイデア出しなどのサポートを行った。 活動前に参加学生・活動先クラスの担任教諭・担当コーディネーターで前提の確認や活動内容等について打ち合わせを行い、9月から12月にかけては小学校の授業に隔週で学生が参加した。それ以外にも4年生が2クラス、相模原キャンパスの見学に来た際に学生が案内をした。全ての活動終了後には活動先クラスの子どもたちによるお礼の会を開いていただき、この会を学生たちの振り返りの機会にもした。
成果	学生たちは継続的に子どもたちと顔を合わせることで人間関係が構築され、相模原祭に子どもたちが遊びに来るなど、授業以外の場でも交流が生まれていた。また、小学校に学生が行くだけでなく、相模原キャンパスに子どもたちが来て見学するという、小学校・大学、双方の場での学生と小学生の交流ができた点が特徴的であった。今後は子どもたちの交流・支援を通してより地域課題への理解にもつなげていくことが課題であるが、活動先クラスの学年に応じた柔軟な対応も必要である。
協力団体	相模原市立淵野辺小学校
	

事業名	富士見小学校連携企画（相模原地域小中学校等連携事業）
日時	2023年10月4日（水）～12月6日（水） 毎週水曜日 9:40～10:25 2024年1月16日（火） 振り返りの会
場所	相模原市立富士見小学校
参加人数	学生5名
内容	相模原地域小中学校等連携事業の一企画として、富士見小学校5年生の総合的な学習の時間へのサポートのボランティア活動を行った。 富士見小学校近くの公園の魅力化、特にごみのポイ捨て防止について活動する子どもたちに対して、授業中のグループワークやディスカッション等に学生が入り、子どもたちへの助言やアイデア出しなどのサポートを行った。 10月から12月にかけて毎週参加するとともに、全ての活動終了後、参加学生・活動先クラスの担任教諭、担当コーディネーターで振り返りの会を実施し、活動を通じた自らの学びや気づき、その他ボランティア活動を通しての感想などの共有を行った。

成 果	毎週同じクラスの子どもたちと接するボランティア活動は、単発のボランティアとも異なるやりがいの提供につながる。すなわち、活動を通じた子どもたちとの関係（人間関係・信頼関係）構築や授業を通じた子どもたちの成長に触れる機会となり、子どもたちの支援だけでなく、子どもたちからの影響を受けて学生自身が成長する機会にもなっている。子どもたちの発言や行動に学生たちが学ぶことも少なからずあり、参加した学生たちにとって新たな視点や価値観といった気づきや学びを与えるものとなったと史料する。また、公園のごみ問題に取り組む子どもたちの活動に触れることで、小学校・小学生と地域の関係や地域そのものに対する学生たちの理解向上にもつながったといえる。
協力団体	相模原市立富士見小学校

事業名	なな山緑地ボランティア
日 時	2023年4月23日（日）、5月28日（日）、6月25日（日）、7月9日（日）の計4回 9：00～15：00
場 所	なな山緑地（東京都多摩市）
参加人数	4月：9名、5月：7名、6月：3名、7月：2名の延べ21名
内 容	多摩市にあるなな山緑地の維持保全のため、グリーンボランティア活動を実施した。前期中に複数回参加できる学生を募集し、4月には初回ガイダンスとして活動時に使用する鋸や剪定ばさみの使い方指導に加え、安全管理のレクチャーを緑地の会メンバーに行ってもらった。その後、なな山をガイドしてもらい、エリアごとの植生の違いなどを学んだ。4月は近隣の小学校で小正月時期に行われるどんど焼きの材料となるシノダケの枝落ちを鋸で行う他、刈った下草集めや畑の補助作業などを行った。5月以降の主な活動は、刈った下草集めや畑作業の手伝い、植樹など。梅雨入りすると気温と湿度が高くなり、厳しい環境下での作業だったため熱中症に配慮しながらの活動となった。今年、なな山ではナラ枯れの伐木作業（30本/年）が定期活動毎に行われる予定のため、学生たちの安全を考慮し、後期の実施は見送ることとした。
成 果	活動後アンケート（n=6）では全員が「とても満足」を選択し、内5名は都合が付けばまた参加したいと回答している。 今期の特色としてアジアからの留学生の参加が多く、梅の実の収穫や畑への作物植え付けなど、この季節ならではの貴重な体験をすることができた。また、季節折々なな山に生息する草花に興味を示しスマホで画像撮影する学生の姿も見られた。 一方で言語の壁から若干コミュニケーションを取るのが難しい場面もあったが、緑地の会メンバーから作業時のコツや植物について個別にご指導いただけたこともあり、これまで以上になな山に愛着を感じる学生も多かった。中には緑地の会メンバーのパワフルさに驚いたという感想もあった。
協力団体	なな山緑地の会



事業名	カンボジア日本語サロン
日時	①マンゴースクール 毎月1回実施 (木曜日 19~20時) 2021年9月から継続 ②くっくま孤児院 毎月2回実施 (月曜日 12~13時) 2021年10月から継続
場所	オンライン (Zoom)
参加人数	①5名 ②4名
内容	①シエムリアップ近郊の農村エリアにあるフリースクール (Globe Jungle 運営) の先生方に向けた日本語会話レッスン活動、異文化交流。 ②プノンペン孤児院 (Globe Jungle 運営) の子どもたちに向けた日本語読み書きレッスン活動
成果	コロナ禍で開始した海外とのリモート活動が3年以上継続し、学生とカンボジア現地の人々や Globe Jungle スタッフとの関係構築のもと活動が安定的に実施できている。限られた学生メンバーであるものの継続的な関わりを持つことによって、カンボジア側の理解度や希望を取り入れた授業内容の工夫や新たな試みが毎回実施されている。くっくま孤児院の子どもを対象とした活動も年数を重ね、Globe Jungle スタッフとの対話を通して子どもたちや社会的背景、日本語を学ぶ意義についても理解を深める場となっている。学生にとっては、オンラインでのコミュニケーションを通して異文化理解や、相互に学び合う楽しさを実感する活動となっている。
協力団体	NPO 法人 Globe Jungle
	



事業名		ボランティアカフェ (ボラカフェ)		
内容	ボランティアや社会貢献に興味がある学生向けに、実際に社会課題に取り組む団体や個人をお招きしてその体験等を語っていただくイベント。毎回様々なテーマでゲストスピーカーにお話しいただいた。			
	開催日	テーマ	ゲストスピーカー	参加者数
①	2023年5月24日(水)	何ごとにも挑戦～先輩OBの巻戻まれ力とツナガルカ～	天野景紀氏 (経済学部卒業生)	12名
②	2023年6月15日(木)	トルコ・シリア大地震と国際協力	松下来師氏 (津市消防本部北消防署)	8名
③	2023年6月19日(月)	ウクライナ侵攻と避難民	西陽太郎氏 (法学部4年) 大道寺隆也氏 (法学部准教授)	24名
④	2023年6月30日(金)	奄美大島のノネコ問題と保護活動	服部由佳氏 (NPO法人CAIT SITH代表) 山田真矢氏 (NPO法人CAIT SITH ボランティア)	18名
⑤	2023年7月6日(木)	なぜ青学から介護の世界に進み、そして市議会議員に?!	佐藤つぐみ氏 (経営学部卒業生)	7名
⑥	2023年12月12日(火)	障害ってどこにある? あなたの「ふつう」はみんなの「ふつう」?	浦野耕司氏 (NPO法人なかよしぐるーぷ 事務局長)	5名
⑦	2024年3月29日(金)	なぜ青学を卒業して、国際機関で国際協力事業に携わることになったのか?!	谷中大翔氏 (地球社会共生学部卒業生)	21名

①	ボラカフェ第1回：何ごとにも挑戦～先輩OBの巻戻まれ力とツナガルカ～	
日時	2023年5月24日(水) 12:35～13:15	
場所	オンライン (Zoom)	
内容	<p>校友との連携に向けた動きの一つとして、校友企画のボラカフェを今後、年に数回行っていくこととなった。今回はその第1回目として、経済学部卒業生の天野景紀<sup>かげゆき</sup>さんをゲストスピーカーとしてお呼びし、「何ごとにも挑戦～先輩OBの巻戻まれ力<sup>りよく</sup>とツナガルカ<sup>ちから</sup>～」というテーマで学生生活における自己成長の方法や他者との関わり方などについて、お話しいただいた。また、校友とともに活動できるボランティアや地域活動についてもご紹介いただいた。</p>	
成果	<p>卒業生の立場から後輩である在学生に向けてアドバイスをお話しいただくという、これまでのボラカフェとは少し異なるアプローチであり、テーマとしても比較的広く青学生全体を対象とするような内容であったため、ボランティアに興味のあるような学生以外の学生層も参加者として取り込めていたように見受けられる。また、ボラカフェ中にご紹介いただいた地域活動について、終了後に参加を希望する学生も現れ、ボランティア活動への入口としてのボラカフェという役割を十分に果たせた回であったといえる。</p>	



②	<b>ボラカフェ第2回：トルコ・シリア大地震と国際協力</b>
日時	2023年6月15日（木）17:00～18:30
場所	オンライン・対面（相模原キャンパスシビックエンゲージメントセンター）のハイフレックス
内容	2月6日にトルコ南東部で発生したトルコ・シリア大地震に JICA 国際緊急援助隊・医療チームとして派遣された本学の卒業生、松下来師さんをゲストスピーカーとしてお迎えして、現地での活動報告と、松下さんが在学中に消防職員を目指されたきっかけや、キャリアを積みながら国際緊急援助隊になられた経緯などをお話いただく中で、参加者に国際協力活動を身近に感じてもらう。また後半では、対面参加の学生に向けて、ゲストスピーカーとコーディネーターの対話形式で行い、学生からの質問に答える等のコミュニケーションを重視した。
成果	オンラインと対面のハイフレックスで実施し、遠隔地からの参加（視聴）者を取り込みつつ、ボラカフェ開始当初から大切にしていた要素であった対話によるコミュニケーションを重視することにも試みた。どちらに向けて発信するのかわによって、進行のスタイルが異なるので、前半の1時間をオンライン向けの発表とし、後半の30分を対面参加者向けの時間とした。また、機材の確認や進行など多くに気を配る必要があったので、運営を3人体制で実施した。ボラカフェ参加者には（やや受動的に）テーマに関する内容を知りたい学生が多い印象を受けるが、スピーカーとの会話を楽しみながら今後のアクションに繋げていく学生も発掘していきたいので、対面による参加も増やしていければと思う。
 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid blue; padding: 5px;"> <p style="text-align: center; margin: 0;">自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 松下 来師 Matsushita Cleo</li> <li>● 津市消防本部 北消防署 消防司令補</li> <li>● 青山学院大学経営学部経営学科（2005年3月卒）</li> <li>● 2015年に国際緊急援助隊医療チーム登録</li> </ul>  </div> <div style="text-align: center;"> <p style="font-size: small;">Türkiye'ye en içten dileklerimizle acil şifalar diliyoruz. トルコの一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。</p>  </div> </div> <p style="text-align: center;">（写真提供：JICA）</p>	

③	<b>ボラカフェ第3回：ウクライナ侵攻と避難民</b>
日時	2023年6月19日（月）15:05～16:35
場所	青山キャンパス 総研ビル（14号館）第19会議室
内容	国連が定める「世界難民の日」を目前に、2022年10月に日本財団ボランティアセンター主催の「The Volunteer Program for Ukraine」に参加し、ポーランドおよびウィーンでボランティア活動を経験した法学部生（4年）西陽太朗さんによる体験報告をボラカフェとして実施した。コンテンツは大きく3つに分かれ、はじめにボランティア体験談、続いて西さんの専攻であるヒューマンライツコースでの学びを踏まえ、国内の難民受け入れ体制の現状と課題についても触れた。最後に法学部ヒューマンライツ学科の大道寺隆也准教授に自身の研究テーマであるEUの難民受け入れ体制と課題についても発表いただいた後、質疑応答を経て閉幕した。
成果	多くの授業が開講されている月曜日4限ということもあり、申込件数(28件)はさほど多くなかったが、西さんの友人/知人や保護者（ペアレンツウィークエンドで立看板を閲覧）の参加もあり、最終的には24名の参加があった。質疑応答セッションではパレスチナと交流活動を行っている初等部教諭から難民に対する認識についてコメントをいただくなどグローバルな視点に立った意見交換の場となった。加えて「施しとしての人道主義とボランティアの限界」や「対等な立場で難民/避難民と向き合う」ことの困難さなど、参加者の実体験を交えた意見交換がなされた。事後アンケートに回答いただいた8名全員が「とても満足」あるいは「満足」と回答している。 <印象に残った内容や言葉があれば教えてください> ・西くんがいつもとギャップがあり、力強いプレゼンで聞き惚れました。このような機会を教えてください、ありがとうございます。 ・西さんの、他国のボランティアの方が仕事を辞めて無償ボランティアをしている理由を聞いた際の「それはあなたの考えでしょ」という言葉が、私のボランティアに対する価値観と異なり、印象に残りました。 ・人道主義に対する批判的な意見。

成 果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「知らないよりは、知っている方が、全く同じになれなくても、なるべく近づく」といった意図の西さんの質疑応答でのお言葉が印象的でした。</li> <li>・実際の現地でのボランティア内容と、ボランティアに対する考え方が勉強になりました。人道主義や思いやりとはなんなのか、何もしないより近づいていくというスタンスが心に残っています。</li> <li>・西さんが帰国後の生活の中で「できること」として「知ること・学ぶこと」と答えていたこと。タイミング的に参加が難しいのですが、今回のように時間が合う企画があれば、できるだけ参加したいと思います。初等部生と世界を繋ぐ意味でも、教員として学び続けたいと思いました。</li> </ul>
	

④	<b>ボラカフェ第4回：奄美大島のノネコ問題と保護活動</b>
日 時	2023年6月30日(金) 18:00～19:00
場 所	オンライン (Zoom)
内 容	NPO 法人 CAIT SITH 代表の服部由佳さんと高校生のボランティア山田真矢さんをゲストスピーカーとして呼びし、「奄美大島のノネコ問題と保護活動」というテーマで奄美大島におけるノネコ管理計画（殺処分）や、そこから保護してきた猫たちの譲渡先探しの活動などについてお話しいただいた。また、この活動に興味を持った学生のために、譲渡型猫カフェでのボランティア体験の機会についてもご紹介いただいた。
成 果	<p>世界自然遺産に登録された奄美大島において、野生化したイエネコ（ノネコ）が島の固有種を捕食する可能性が指摘されたために、このノネコの数を大幅に削減する計画、ノネコ管理計画が実施されたこと、その中で3,000匹ものノネコが殺処分される計画であることなどを知って衝撃を受けた山田さんが、この問題の背景や解決策などを調査・研究した結果について、またボランティア活動についてお話をいただいた。</p> <p>また、この奄美大島で殺処分を待つ猫たちを保護し、貰い手を見つけるための活動として譲渡型猫カフェの活動を行っているNPO法人CAIT SITHの服部さんより、活動の内容などについてお話しいただいた。</p> <p>ゲストスピーカーの一人、山田真矢さんは高校生であり、自分よりも年下の方がボランティアや社会貢献活動を行っている姿は、学生達にとって少なからず刺激になったと思われる。</p> <p>また、この問題の背後には島を取り巻く観光、生態系保護、歴史、社会経済的状況や、動物愛護、生命倫理等、様々な要素が複雑に影響し合っているということを知ると共に、人間だけでなく動物や自然も含めた「地域」や「社会」「福祉」というものを考える機会になったといえる。</p>
	

⑤	<b>ボラカフェ第5回：なぜ青学から介護の世界に進み、そして市議会議員に？！</b>
日時	2023年7月6日（木）18：00～19：00
場所	オンライン（Zoom）
内容	校友企画のボラカフェ第2回目として、経営学部卒業生の佐藤つぐみさんをゲストスピーカーとしてお呼びし、「なぜ青学から介護の世界に進み、そして市議会議員に？！」というテーマで介護職に就職した経緯や市議会議員に転身した背景などについて、お話しいただいた。
成果	卒業生ボラカフェの第2弾として、今回は企画者でもある卒業生の天野さんにモデレーターとして司会進行を務めていただいた。通常のボラカフェとは若干異なるスタンスであり、ボランティア活動や市民協働活動よりも卒業生「その人」にフォーカスを当てるスタイルであり、参加した学生たちにとっては青学の卒業生が社会でどのように活躍しているのかというその人のキャリアやキャリア観に触れることができる機会であったといえる。 また、今回は学生との対話を比較的重視するスタイルであったため、一方的な講演形式ではなく、学生との双方向のやり取りができていたことも特徴的であった。
	 <p>ポスターには「オンライン ボラカフェ 7.6 (木) 2023.7.6 (木) 18:00~19:00 (Zoom)」とあり、ゲストスピーカーとして佐藤つぐみさんが紹介されています。また、「自分ごととして行動したら、普通の学生だった私が想像しない人生に！」というキャッチコピーや、QRコードも掲載されています。</p>

⑥	<b>ボラカフェ第6回：障害ってどこにある？あなたの「ふつう」はみんなの「ふつう」？</b>
ボラカフェ第6回は「障がいWEEK」の企画として実施した。内容等は『障がいWEEK』の項目（本紀要97ページ）に掲載している。	

⑦	<b>ボラカフェ第7回：なぜ青学を卒業して、国際機関で国際協力事業に携わることになったのか？！</b>
日時	2024年3月29日（金）17:30～18:30
場所	オンライン（Zoom）
内容	校友企画のボラカフェ第3回目として、地球社会共生学部卒業生の谷中大翔さんをゲストスピーカーとしてお呼びし、国連職員として働くこととなった経緯や国際協力事業の活動内容、JICA海外協力隊の経験などについてお話しいただいた。
成果	今回も天野さんにモデレーターとして司会進行を務めていただいた。谷中さんには勤務地のケニアからオンラインで登壇いただき、仕事の話だけでなく現地の様子や海外で働くということについてお話をいただいた。 学生からの質問も多かったが、一つ一つ丁寧に答えていただき、国際協力や海外での勤務、海外大学院への留学などを考えている学生たちにとっては非常に興味深い内容になったと思われる。



事業名	青山学院大学 学生ボランティア・フォーラム 2024
日時	2024年3月14日(木) 13時～16時30分
場所	青山キャンパス 17号館 17511教室
参加人数	30名(参加者12名、発表者13名、運営5名)
内容	<p>2023年度にセンター主催プログラムやボラサポ制度や学生ボランティア団体、サービス・ラーニング科目を通じて社会貢献活動に関わった学生による成果報告会を実施した。また、学生発表に先立ち小川誠子教授によるキャリア形成とボランティア活動に関する基調講演を行った。当日のプログラムは次の通り。</p> <p>基調講演：「キャリア形成におけるボランティア活動の重要性」                      コミュニティ人間科学部 小川 誠子 教授</p> <p>学生発表：                      &lt;センター主催プロジェクト&gt;                      学生スタッフ 相模原キャンパスメンバー                      相武台団地活性化プロジェクト</p> <p>&lt;ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度&gt;                      スタートアップコース採択プロジェクト                      ステップアップコース採択プロジェクト</p> <p>&lt;学生ボランティア団体&gt;                      しばっこ渋谷区こどもテーブルボランティア愛好会                      動画制作愛好会                      SANDS</p> <p>&lt;正課を通じた学び&gt;                      カンボジア・サービス・ラーニング・ツアー</p>
成果	<p>春期休暇中そして大学職員は業務時間内の開催だったため想定よりも少ない参加者数であったが、学生のボランティア活動に関心の高い方々に参加いただけた。</p> <p>発表学生の中には初めて人前でプレゼンテーションを行ったという学生もいたが、今回発表した学生全員が自分の言葉で活動内容や自身の体験を語っている様子が印象的であった。実際、フォーラム終了後に参加者から次のようなコメントをいただいた。</p> <p>「学生たちの想いが強く伝わってきた。」                      「単なる活動報告だけでなく自身の学びや今後の展望が素晴らしかった。」</p> <p>また、終了後に交流時間を設けたことにより、発表した学生同士が繋がり、新たな活動に発展する機会となった。</p>



事業名	作ろう！Myらぶらび
日時	2023年11月3日（金）13:00～16:00
場所	青山キャンパス シビックエンゲージメントセンター内にて対面開催
参加人数	71名（青学生16、教職員1、他大学生11、一般43名） 学生ボランティア 8名 NPO 法人ばれっと職員2名、利用メンバー 3名 BEAMS 社員2名
内容	S-SAP 協定に基づいた渋谷区内の企業（BEAMS）連携、地域の知的障害者支援福祉施設（ばれっと）との協力によって、らぶらび（うさぎのマスコット）作りワークショップを実施した。BEAMS からの、らぶらびの材料となるリサイクル衣料品の提供とアップサイクルデザイナーの参加、ばれっとからはらぶらび作りのノウハウを協力いただき、学内外からの参加者が思い思いのらぶらび作りを楽しめるワークショップを行った。
成果	青山祭開催初日の大変賑わいのある場となった。昨年に比べ短い時間での開催となったが、参加者が途切れることなく、らぶらび作りを通して関係者とも交流をはかる機会となった。今回は学生有志が工房ばれっとに事前に訪問して、団体の取組への理解を深めるとともに、イベント当日で使用するらぶらびのボディ作りに挑戦する準備を経ての開催となり、当日も主体的で頼もしく活躍した。 学生によるばれっとのとりくみや BEAMS でのリサイクルやリメイクについての紹介パネルも掲示し、相互に地域での社会参加の場となる等有意義な企画実施となった。
協力団体	共催：NPO 法人ばれっと 協力：株式会社 BEAMS、一般社団法人シブヤフロント



事業名	ヒューマンライブラリー@青学 2023
日時	2023年11月25日(土) 13:00～16:00
場所	青山キャンパス 17号館食堂、シビックエンゲージメントセンター(青山キャンパス)
参加人数	本役(語り手)4名、読者役(来場者)11名(うち本学学生8名、教職員1名、外部2名)、司書役(企画・運営)4名
内容	6月に開催したヒューマンライブラリー(以下、HL)入門講座に参加した有志学生が中心で企画・運営し、開催した。本役(語り手)には、「HSP」「ノンバイナリー」「難民」「元受刑者」の категорияとして、自身の人生を少人数の対話形式で読者(イベント来場者)に語っていただいた。また、12月1日に「After HL」として、本企画参加者を対象にワークショップ(以下、WS)を開催した。WSでは各カテゴリーから参加者が連想するワードを出し合い、参加者同士で意見を交わした(参加学生5名)
成果	参加者や運営に関わった学生は法学部の学生が多く、読者のアンケート結果からも「法学部やヒューマンライツ学科の学生にもっと参加してほしい」といった声があり、本企画と学部との親和性も感じることができた。参加者の満足度は11名中9名が大変満足、2名が満足と回答。運営を担った司書役の学生は、企画段階から本役との打ち合わせや連絡等やりとりを経験し、担当した本役との関係性や、カテゴリーに対するより深い理解と関心につながった。イベント後の振り返りとして設けたWSでは、HLによる個人の生きづらさへの気付きに加えて、個人課題を社会課題として捉えるメソ・マクロな視点への学びに広げる機会とすることができた。
協力者	当日の「本」役4名(サインネーム・カテゴリー) <ul style="list-style-type: none"> <li>・あるさん HSP</li> <li>・葵さん ノンバイナリー</li> <li>・湯浅静香さん 元受刑者</li> <li>・C.K.さん 難民</li> </ul>

『受刑者 依存症者の一言では語れない「私」の人生』



**あらすじ**  
 元受刑者、依存症者の支援団体「碧の森」を運営する湯浅静香さん。ご自身もかつては、受刑者かつ依存症者だったといいます。一犯罪は自罰が効かなくなった人がやる事。—自分なら犯罪なんて犯さないだろう。あなたはこの様に考えていませんか？  
 実は湯浅さんが犯罪に走ってしまった背景には、現代とは大きく異なる社会状況、複雑な家庭環境、そして小学校低学年の時に巻き込まれた「杜絶な事件」……など多くの事情が存在します。当日、このような「背景事情」を知る事で得られる気づきがありつつあるはず。

**司書からの一言**  
 みなさんの中で、元受刑者の方とお話した事がある方はどれくらいいるでしょうか？きっとそう多くはないはずです。当日は、幼少期から現在に至るまで、湯浅さんを取り巻いていた環境と、その中で的心情変化についてお話しいたします。話を聞いてどの様に考えるかは読者の自由です。そのためにも、まずは「知る」ところから始めてみませんか？



※司書が作成したあらすじ

※対話セッションの様子



※本役と読者役で記念写真

※ワークショップでの振り返り

事業名	障がいWEEK	
内容	国が定める障害者週間に合わせ、12月11日から16日の期間を「障がいWEEK」として、“それぞれのちがい、おもいに触れる～”をテーマに、障がい理解の啓発を目的とした各種イベントを学内で開催した。	
開催日	企画名	参加者数
① 2023年12月11日(月)	ユニバーサルマナー検定3級	29名
② 2023年12月12日(火)	ボラカフェ：障害ってどこにある？あなたの「ふつう」はみんなの「ふつう」？	5名
③ 2023年12月13日(水)	バリアフリーまち歩きイベント	6名
④ 2023年12月16日(土)	手話コミュニケーション講座	8名
⑤ 2023年12月11日(月)～15(金) 期間中常設	アート企画展	—

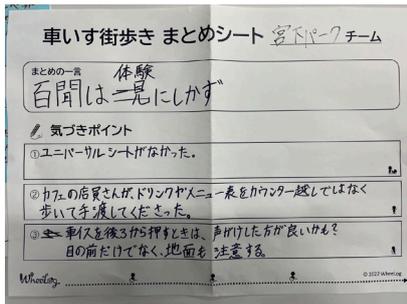
※その他、同時期に障がい学生支援センターが主催する「ノートイク体験会」「障がい学生支援に関するミニセミナー」の広報協力を行った。

①	ユニバーサルマナー検定3級（障がいWEEK 企画）
日時	2023年12月11日(月) 18:30～20:30
場所	青山キャンパス 17409 教室
内容	青学生・教職員を対象に学内でユニバーサルマナー検定3級を開催。講師の薄葉ゆきえ氏より、人と人との違いを理解し、配慮を必要とされる方への基本的な向き合い方や声かけ方法について、講義とグループディスカッションを通じて学んだ。学生の受講者にはCECから受講料の補助を行った。
協力	株式会社ミライロ

②	ボラカフェ：障害ってどこにある？あなたの「ふつう」はみんなの「ふつう」？（障がいWEEK 企画）
日時	2023年12月12日(月) 12:35～13:15
場所	シビックエンゲージメントセンター（青山キャンパス）
内容	渋谷区に暮らす障がい児・者への支援にかかわる浦野耕司さんを講師としてボラカフェを開催。「障害」を社会モデルの視点から捉える視点と、浦野さんが係わる渋谷区のえびす青年教室やGAYAの活動と、渋谷区の移動支援事業について、その取り組みと課題などをお話いただいた。
成果	参加した学生は、障がい学生支援センターの学生サポーターやゼミで障がいを研究テーマとしている等、参加動機は様々。また、本学高等部から青年教室に参加している職員の参加もあった。「障害」が環境にあるとすれば、それはどのような環境から生まれている？障がいのある人の日常や生活に寄り添うことって、ハードルが高いこと？など、それぞれが考えるきっかけとなった。
協力	NPO 法人なかよしぐるーぷ事務局長 浦野耕司さん



③	<b>バリアフリーまち歩き (障がい WEEK 企画)</b>
日時	2023年12月13日(水) 13:00～15:30
場所	青山キャンパス 17号館 4階 17410 教室
内容	一般社団法人 Wheelog が実施する「車いす街歩きプログラム」を学内で開催。青山キャンパスを出発地として、車いすユーザーと学生を交えたグループをつくり、各グループが設定したキャンパス周辺の目的地を目指してまち歩きを行った。道中は、スマホアプリ「Wheelog！」を活用し、走行ログやバリアフリー情報を投稿。また、学生は車いす体験をし、道路の傾斜や人混みでの移動の困難さを体感した。教室に戻ったあとは、各グループで街中のバリアの気づきや学びを共有した。
成果	<p>学生の車いす体験を通じて、日常的に意識し難い道の傾斜や段差などの物理的バリアへの気付きを得たことに加えて、多機能トイレにユニバーサルシートが必要なことや、利用者が使用できる駐車場が殆どないこと等、車いすを普段から使用する当事者と行動を共にすることで、新しいバリアへ気付く機会となった。</p> <p>また、街中のバリアフリー情報をアプリでシェアすることが、車いすユーザーにとって安心安全な外出を実現するための取組みであることを学生が身をもって学ぶことができた。まち歩き自体を全員が楽しむことを一つの目的としたことで、参加者同士が楽しみながら取り組むことができた。</p> <p>&lt;イベントについて意見、感想、要望等&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普段全く意識してない風景が車椅子に乗るとこれだけ変化することに驚いた。</li> <li>・ 初めて車椅子に乗るという体験をして、さまざまな気づきを得ることができました。同じ目線に立つことで、他者からの目線や、配慮、周りの環境の良い点、悪い点など、伝わりにくい当事者の感覚を経験できました。</li> </ul>



④ 手話コミュニケーション講座（障がい WEEK 企画）	
日時	2023年12月16日（土）14:30～16:00
場所	青山キャンパス17号館17404教室
参加人数	8名
内容	手話でいきる子どものあ〜とん塾のスタッフと児童を講師として、青学生が手話表現を教わり、手話やジェスチャー等を使ったゲーム（謎解きゲームやフルーツバスケット等）で参加者同士コミュニケーションを楽しんだ。講座のあとは、本学手話部の有志が児童たちに青山キャンパス内でキャンパスツアーを行った。
成果	講座中は音声言語を一切使用せず、手話や筆談、ジェスチャーのみで進行したことに戸惑う学生もいたが、音声言語に頼らなくてもコミュニケーションをとれる楽しさや、手話の単語を覚えることよりも、知りたい・話したいという想いや気持ちが大切であることを学ぶことができる機会となった。
協力団体	一般社団法人ありがとうの種「手話でいきる子どものあ〜とん塾」、青学手話部
	

⑤ アート企画展（障がい WEEK 企画）	
日時	2023年12月11日（月）～15日（金）
場所	青山キャンパス1号館一階ラウンジ
内容	一般社団法人シブヤフォントのファブリックパネルやタペストリー、金沢アート工房「アウトサイダーアート」の新作絵画、NPO法人ぱれっとのらぶらびの展示を行った
成果	金沢アウトサイダーアートの新作絵画やシブヤフォントのタペストリー、ファブリックパネルなど多様な作品が設置され、センター横ラウンジが華やかでインパクトのある展示会場となった。 ラウンジスペースを使用する学生や、通りがかる教職員が、各々作品を眺め、作品やその取り組みに関心を寄せていた。
協力団体	一般社団法人シブヤフォント、金沢アート工房、NPO法人ぱれっと
	

## ソーシャルビジネス

事業名	藤野特産品（地産ガチャ）
場所	相模原キャンパス購買会
内容	“芸術のまち” “都心に一番近い里山” といった名称をもつ相模原市緑区藤野（旧津久井郡藤野町）について知り、青学生の地域に根差した社会貢献活動を広げていくことを目的とした「藤野プロジェクト」を2021年度から実施しており、藤野の魅力を知る機会として、購買会に地産ガチャ（藤野地域の特産品が詰められたカプセルトイマシン）を6台設置。また、試験的にシビックエンゲージメントセンター内に小型のカプセルトイマシンを設置している。
成果	3年目となった2023年度は、2023年末の回収時点で359個の商品が売れており、昨年度以上の人気となった（昨年度同時期：281個）。ラインナップの中では「樹木のキーホルダー」が人気を集めているが、新商品の「ヨガチャ」についても幅広い世代から注目されているようだった。また、10月に開催された相模原祭では、藤野プロジェクトのメンバーが中心となり、地産ガチャの紹介および期間限定の追加設置を行った。
協力者	地産ガチャ開発人（株式会社ザリガニワークス） 武笠太郎氏



## 講座・セミナー

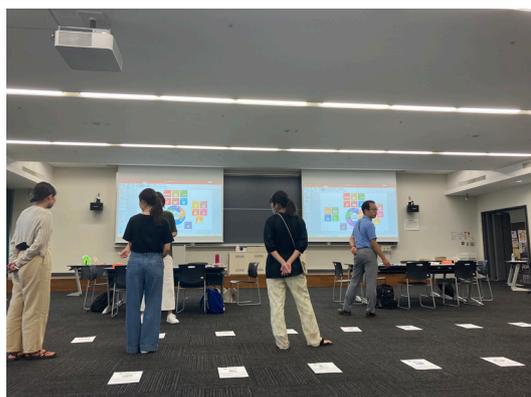
事業名	認知症サポーター養成講座
日時	青山：2023年6月1日（木）18:30～20:00 相模原：2023年11月7日（火）18:30～20:00
場所	青山：青山キャンパス17号館17407教室 相模原：相模原キャンパスF棟F310教室
参加人数	青山：15名（うち教職員1名） 相模原：10名（うち教職員3名）
内容	認知症を正しく理解し知識を身に着けるための講座として、今年で4回目の開催。対面による開催で、ロールプレイを通して学生にとって身近な課題として理解が深まる内容となった。青山では、講師の木村氏に加えて、渋谷区認知症地域推進員である児玉氏、村瀬氏より、渋谷区での認知症施策としてオレンジカフェや普及啓発イベント「認知症なっても展」の紹介をいただいた。相模原では、認知症対応型デイサービス「おとなり」の管理者で介護福祉士の能勢氏とBLG相模原（地域密着型通所介護事業所）管理者の伊藤氏より、地域とともに生きるデイサービスのあり方などについてお話しいただいた。また、相武台団地活性化プロジェクトのメンバーとして「おとなり」でボランティア活動を行っている学生2名（認知症サポーター）からの報告も行なった。
成果	認知症という状態像を理解するための基礎知識に加えて、当事者目線で周りが「認知症という言葉に惑わされない」ための、本人の想いに寄り添った理解や支援の必要性について、ロールプレイを挟みながら学びを深める講座となった。 <受講者の感想（一部抜粋）> ・今回は正直、認知症の対応マニュアルを教えてもらいに来ました。しかし、人それぞれで症状が違いその人に合わせて接すれば良いことを知り、その人のことを理解しつつ接していこうと思えました。認知症の人が物事を理解していることに驚きました。 ・施設でお風呂に行くのが難しい方のロールプレイがとても印象的でした。その方のイライラや不安の背景に何があるのか、その人が置かれている状況に気付き、その人の視点に立って考えてみようと思えました。 ・「認知症」イコール「何もできない」ということではないと改めて思いました。今日学んだ事を今後活かせるようにしたいと思います。
協力団体	青山：福祉事務所ランタン代表、渋谷区笹畑地域包括支援センター、渋谷区ケアコミュニティ・原宿の丘地域包括支援センター 相模原：認知症対応型デイサービス おとなり（株式会社ファイブスター）、BLG相模原（100BLG株式会社）、相模原市社会福祉協議会
共催団体	全国キャラバンメイト連絡協議会
	

事業名	災害救援ボランティア講座
日時	2023年5月13日(土)、20日(土)、21日(日) 9:00～17:00
場所	13日: 青山キャンパス 17606 教室、20日: 別館 AX301 21日: 午前中 池袋防災館、午後 青山キャンパス 17606 教室
参加人数	8名(セーフティリーダー認定証付与8名、上級救命技能認定証付与8名)
内容	<p>災害時のボランティアリーダーを育成する目的で毎年実施。上級救命技能講習もカリキュラムに含めた3日間のコースで実施した。1日目の座学においては渋谷区危機管理対策部や社会福祉協議会、学院総務部、渋谷消防署、渋谷警察署に協力を仰ぎ、各組織の平時の取り組みと災害時の役割について講話いただいた。</p> <p>【1日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 災害救援ボランティアの基本(澤野次郎氏/災害救援ボランティア推進委員会)</li> <li>- 区の取り組み、災害ボランティアセンターについて(渋谷区役所、渋谷区社会福祉協議会)</li> <li>- 大学の初期対応(青山学院大学)</li> <li>- 帰宅・滞留行動シミュレーション</li> <li>- 火災発生時の対応(渋谷消防署)</li> <li>- 警察の災害対応と防災対策(警視庁災害対策課)</li> </ul> <p>【2日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 上級救命技能講習</li> </ul> <p>【3日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 災害模擬体験と実技</li> <li>- 災害ボランティアの安全衛生と被災された方との接し方</li> <li>- 災害ボランティア活動ケースワーク</li> <li>- 避難所運営支援総合演習</li> </ul>
成果	<p>例年20名近い申し込みがある本講座だが、今年度は8名と少人数であった。そのため、グループワークや実技実施の際には、大人数の時よりも学生ひとり一人の参加度が把握しやすいというメリットもあった。</p> <p>受講者アンケートによると回答数7名の内、5名がとても満足、2名が満足と回答している。「興味深かった」「勉強になった」セッションでは、グループワークや、上級救命講習、図上訓練の3つが最も多く、学んだ知識を用いて適切な行動をとるセッションでの学習効果が高いことが伺える。</p>
協力団体	災害救援ボランティア推進委員会
	

事業名	2023年度国際協カプランナー入門
日時	2023年9月13日(水)・14日(木) 10:00～17:00
場所	青山キャンパス 17号館 17512 教室
参加人数	7名
内容	<p>2019年度から実施している国際協カプロジェクトを企画するための座学と実践的ワークショップを組み合わせた2日間の研修を今年も実施した。</p> <p>内容は国際協カに関わる関係者(アクター)分析やロジックモデルを用いたプロジェクトマネジメントの枠組みを学びながら、架空のケースに沿ってチームごとに企画会議を行い、最後にアクションプランを完成させるというもの。ゲストスピーカーにはフェアトレードショップの運営者やJICAの教育プロジェクトを実施する開発コンサルタント、日本在住ミャンマー出身のNGOスタッフ、栄養改善プロジェクトを実施するNGOスタッフを招きそれぞれ講話いただいた。予定したカリキュラムを修了した7名の学生には修了証を発行した。</p>

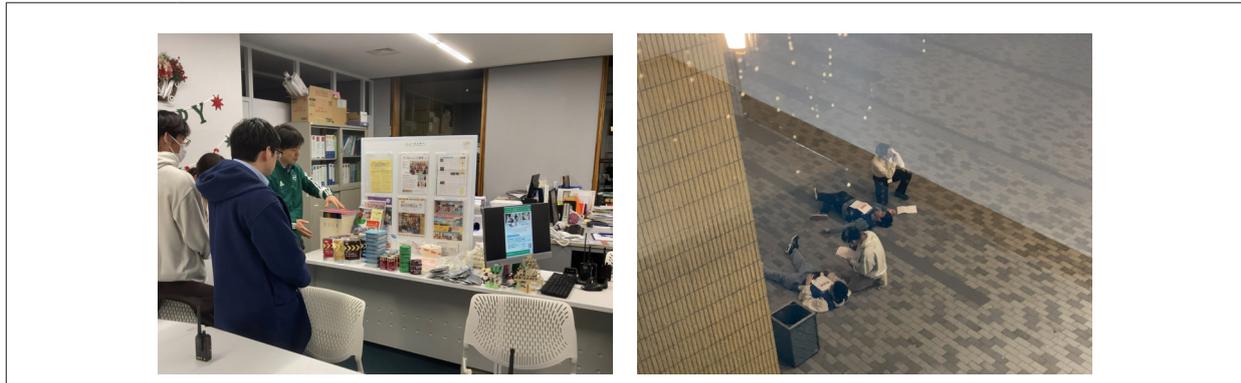
成 果	例年 20 名を超える申し込みがある研修プログラムであるが、今年は申し込み時点で半数程度、さらには出席人数は 7 名に留まり少人数での開催となった。しかしながら学部で国際開発協力や国際人権について学んでいる学生が多く、日本の NGO の海外事務所でインターン経験を持つ学生もいたことから、非常にモチベーションの高いメンバーでのワークを進めることができた。グループワークでは因果関係のロジックを確認しながらの原因／目的分析に苦戦している様子が伺えたが、何度も状況整理を繰り返し最終的にはプロジェクトを完成させることができた。終了時の感想では、ゲスト講話を通じて国際協力のリアルな現状だけでなく、キャリアパスについて参考になったとの意見が多かった。
-----	--

協力団体	認定 NPO 法人 GLM インスティテュート
------	-------------------------



事業名	防災ボランティア講習（無線機を使ったコミュニケーションを体験しよう）
日時	12月12日（火）18：00～19：30
場所	F棟2階シビックエンゲージメントセンター、E206 教室ほか
参加人数	6名（学生5、教職員1）+ サポート学生2名
内 容	無線機（トランシーバー）が災害発生時の通信手段として有効であることを伝えた後に、受講者2名1組になって実機を用いたワークショップを行い、その特徴や使い方（機器操作、通話方法）などについて理解を深めた。また、発熱材と水を用いて調理する防災食を紹介し、実際に調理・試食して調理方法や味を確認した。なお、無線機の利用経験のある学生2名に運営協力者として参加してもらい、受講生が無線機を使用する際の技術的なアドバイスやワークショップのサポートを担ってもらった。
成 果	これまでの防災ボランティア講習では防災教材（HUG）を用いた避難所運営体験を実施していたが、今回は学内の備品（相模原事務部庶務課管理）を活用し、より実践的かつ汎用性の高い講習ができた。また、災害発生時の学内対応については教職員があたることが想定されているが、（災害の内容によっては）学生の協力を仰ぎながら対応にあたることを考える上でも役立つ講習であったと思う。学生、教職員それぞれの立場で防災に対する理解を深める良い機会になった。





事業名	学生×子どもの居場所づくりセミナー
日時	2023年6月16日(金) 18:00～20:30
場所	オンライン
参加人数	受講者17名(うち青学生5名)、参加団体10団体12名(うち青学生1団体1名)
内容	<p>学校外での子どもたちの居場所となる子ども食堂や無料学習支援等の活動について、その基礎知識を学ぶとともに、実際に子どもの居場所づくりの活動に取り組んでいる団体の方々からお話を頂くことで、学生たちがこうした活動に参加するきっかけとなる場として開催した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 子どもの居場所とは 講師：相模原市社会福祉協議会子どもの居場所相談員 鈴木愛樹代氏</li> <li>2. 子どもの居場所活動紹介 <ul style="list-style-type: none"> <li>・TSUMUGU こども食堂</li> <li>・くすのき広場</li> <li>・青学生による学び場「ふらっと。」(青山学院大学学生団体 Polaris)</li> <li>・みんなの場 てととと</li> <li>・かけはし</li> <li>・メダカのお弁当</li> <li>・淵野辺つばめ塾</li> <li>・おかげさん こども食堂</li> <li>・まほろば食堂「たな」</li> <li>・ひよここども食堂</li> </ul> </li> <li>3. 参加者によるグループワーク</li> <li>4. グループワークで話し合われたことの共有</li> </ol>
成果	例年に引き続き、当センター協力事業としてオンラインで実施した。本学からは Polaris の1名も含めて6名の学生が参加した。また相模女子大学、専修大学、東北福祉大学、常磐大学、立教大学、和光大学といった他大学の学生等も参加した。グループワークの時間では、学生が地域の団体・大学生と繋がることができた。今回登壇された団体をはじめ、今後学生たちの地域での活動参加につながることを期待したい。
主催団体	主催：相模原市 実施：社会福祉法人相模原市社会福祉協議会



## 各種サポート制度

青山学院大学シビックエンゲージメントセンターでは、青学生や教職員向けの活動を支援する様々な制度を設けています。

### 「災害・復興支援活動に対するサポート制度」

地震や台風、豪雨など大規模自然災害にかかる災害および復興支援ボランティア活動に参加する学生に対し、経済的負担を軽減することを目的に活動地までの旅費・宿泊費を補助する制度。2024年1月1日に発生した能登半島地震を受け、被災地域で活動してきた学生7名に対し、本制度を適用した。

2023年度利用件数 7件

補助活動内容	活動日	件数
能登半島地震災害ボランティア活動	2024年3月19日～23日	3件
能登半島地震災害ボランティア活動	2024年3月26日～30日	4件

### 「教職員ボランティア活動補助プログラム」

教職員の自発的な社会活動への参加を促進するため、社会活動に参加した教職員に対し、条件を満たした場合、交通費の一部支給など、費用補助を行う。

2023年度利用件数 0件

### 「ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度（通称ボラサポ）」

青学生や教職員が主体となって実施するボランティア・社会貢献に取り組むプロジェクトを応援するための助成金制度。2023年度は「スタートアップコース」と「ステップアップコース」それぞれの運用方法を変更して募集を行った。

「スタートアップコース」では、申請期間を年度内の4月～1月までならいつでも申請を可能としたことで、年度途中でも、社会課題へ挑戦したいというプロジェクトをセンターとしてコーディネーターが伴走のうえでサポートし、活動を実現させることができた。また、「ステップアップコース」では、従来の書類審査に加えて、プレゼン審査を新たに実施したことで、書類上では汲み取れないプロジェクトに対する想いを申請者が伝える場となった。

採択件数はスタートアップコースが年間で3件、ステップアップコースが2件であり、それぞれが活動に取り組んだ。



【ステップアップコースプレゼン審査の様子】

**2023 年度採択プロジェクト**

スタートアップコース 3 件 (申請件数 3 件)

プロジェクト名	採択時期	助成金額
脱ビニール袋使い捨てプロジェクト	7 月	0 円
青山学院大学難民映画祭	12 月	36,020 円
青学生と子どもたちの「ゆめどこ」	1 月	18,575 円

ステップアップコース 2 件 (申請件数 2 件)

プロジェクト名	助成金額
あらとっ青山祭 2023	19,485 円
ペットボトル灯籠プロジェクト～より多くの住民の参加を目指して～	300,000 円

**【スタートアップコース】**

プロジェクト名	脱ビニール袋使い捨てプロジェクト
実施期間	2023 年 7 月～ 12 月
実施場所	青山学院大学青山キャンパス内
活動概要	<p>雨天時に傘を入れるビニール袋のごみ量を減らすことを目標に啓発と調査の 4 つの活動を実施した。</p> <p>① SNS (Instagram) での活動や情報発信。</p> <p>② 校内アナウンスで、ビニール袋の再利用・レインカット・マイ傘袋活用によるゴミ量削減アクションの呼びかけ。</p> <p>③ 学内掲示板や SNS アカウントで傘用ビニール袋の意識調査</p> <p>④ 大学施設課による協力のもと、雨天時の青山キャンパス 17 号館入り口のビニールごみを回収し、ゴミ量を計測。</p>
成果・展望	<p>SNS や校内放送などの啓発活動により、青学生が無意識に使い捨てている身の回りの場面に目を向け、環境への配慮や無駄遣いの意識に気づいてもらうことができた。</p> <p>意識調査では 91 件のうち、8 割が傘用ビニール袋の使い捨てを「もったいないと思う」と回答を得た。また、ビニール袋のゴミ量調査では、17 号館のメインエントランスの一日のごみ量は多い日で 1576 枚であり、多くのビニール袋が使用されていることが分かった。</p> <p>今後の展望として、使い捨てのビニール袋を減らしていくために、何度も使える傘袋の利用率を高めるため、大学の購買会に傘袋の導入を提案し、販売促進に取り組む等、環境に配慮できる青学生を増やしていきたい。</p>



<b>プロジェクト名</b>	青山学院大学難民映画祭
<b>実施期間</b>	2024年1月19日(金) 16:00～19:00
<b>実施場所</b>	青山学院アスタジオホール
<b>活動概要</b>	青学内における「難民」に関連する問題に対する意識を上げることを目的とし、国際政治経済学部と地球社会共生学部から有志が集まった6人が10月から、難民をテーマとした映画上映会の企画を進めてきた。一人でも多くの青学生に難民問題を身近なものとして捉え、考えるきっかけになるよう、上映作品内に登場する「クルド人」や「クルド文化」について分かりやすく紹介する企画を映画上映後に実施。作品の背景について参加者が理解を深められるよう努めた。
<b>成果・展望</b>	達成目標は「青学生の難民に関わる問題に対する意識をあげること」。 参加者：21人 企画を通してクルド文化や在日クルド人の境遇に関するパンフレットを作成し、作品への理解の深化に貢献した。また、「映画」という形で日本国内の難民に関する問題を伝えることでより幅広い年齢層に分かりやすい方法でアプローチができた。 アンケート結果からは、青学でこのようなイベントを行っていることを知ってもらえる機会になり、次の企画を楽しみにする声や、難民問題に関心のある参加者同士のご縁があった等、つながりの輪を広げる場にもなった。今後は講演会やフィールドワークを通して参加者も企画者も一緒になって学べる企画を実施していきたい。



<b>プロジェクト名</b>	青学生と子どもたちの「ゆめどこ」
<b>実施期間</b>	第1回 2024年1月28日(日) 13:00～17:00 第2回 2024年2月25日(日) 13:30～16:00
<b>実施場所</b>	第1回 HIYAKUKICHI 古淵駅 第2回 大野北公民館 淵野辺駅
<b>活動概要</b>	子どもたちに「ワクワク」の体験と機会の充実を届けること目的に、相模原の子どもたちを対象とした工作体験イベントを2回実施。サードプレイスとしての世代を超えたコミュニティづくりを促進する企画に取り組んだ。
<b>成果・展望</b>	子どもが他人の力を借りながら自分のやりたいことを実現し、子どもたちの間で新たなコミュニティが生まれることを達成目標として取り組んだ。子どもたちは他チームのアイデアを参考に自分たちの作品づくりに取り入れ、力仕事は周りの学生スタッフに頼るなどして、作品を完成させることができた。 始めは顔見知りでない相手とは緊張する様子もみられたが、学生スタッフとの交流や他チームが作った作品で遊ぶ時間を設けることで、チームを超えた子どもたちのコミュニケーションが見受けられた。 今後は月一程度で定期的に活動予定。協賛者も決まり、今後の資金や会場の援助を受けることができた。



【ステップアップコース】

プロジェクト名	あらとっ青山祭 2023
実施期間	2023年7月1日～2023年11月30日
実施場所	オンライン、青山学院大学青山キャンパス
活動概要	20歳前後の若者のアパレル消費に対する意識を変えるため、青山祭の出展を通して、来場者にスローファッションに関する啓発活動を行った。また、古着シェアイベントやゲストスピーカーによる講演、参加者同士の交流会に加えて、古着を回収し、回収した古着はケミカルリサイクルに取り組む企業へ寄付を行った。
成果・展望	昨年度のスタートアップコースからステップアップコースへの挑戦を経て、プロジェクトに関わるメンバーの人数や、参加者の満足度が上がり、活動の幅を大きく広げる活動とすることができた。今後の展開として、より「スローファッション」に対する考え方の拡散と、団体としての「ファン」層の増加や活動を継続していくための組織体制整備に取り組んでいきたい。



プロジェクト名	ペットボトル灯籠プロジェクト～より多くの住民の参加を目指して～
実施期間	2023年7月1日～2024年3月20日
実施場所	岩手県大船渡市三陸町越喜来地区
活動概要	岩手県大船渡市三陸町越喜来地区で8月16日に実施された「三陸港まつり」、3月8日から10日にかけて実施した「未来を灯そう～越喜来2024～」の2つの地域行事に参加し、世代間の協働機会の創出と震災犠牲者への哀悼、被災経験の継承による防災意識の向上、風土化を防ぎ、越喜来地区の復興と展望を共有するための企画づくりと実施を地域住民と共に行った。

<p>成果・展望</p>	<p>地域住民との協働による地域のお祭り運営に、地元の高校生が参加し、企画の提案から実施まで行えたことで、世代間継承や地元愛の醸成の機会となった。また、越喜来活性化協議会との繋がりも強固になり、昨年度以上の来場者数とすることができた。 今後の課題として、長年課題である伝統芸能や地域活性化行事の後継者不足問題等があり、団体としての抜本的な活動方針の見直しや目標に対するアプローチの検討を行う必要性を感じている。住民の意思やニーズを掴み、鎮魂と未来への希望の二つの軸を織り交ぜ、有効性のある地域活性化活動を住民と共に取り組んでいく。</p>
	

### 「AOGAKU ボランティアネットワーク」

シビックエンゲージメントセンターでは2020年度から学生ボランティア団体と繋がり、団体の活動を促進させる目的でAOGAKU ボランティアネットワークを立ち上げています。

このネットワークには学友会組織に所属しない学生任意団体も参加することが可能であり、2023年度は青山・相模原両キャンパスで12団体の登録があった。

#### <青山キャンパス>

青山子ども会	あらとぅ ～ innovation around 20 ～
アイセック青山学院大学委員会	しぶっこ渋谷区こどもテーブルボランティア愛好会
学生団体 Youth for Ofunato	国際政治経済学部公認団体 SANDS
MF3.11 東北応援愛好会	STUDY FOR TWO 青山学院大学支部
TsunAGU ボランティア愛好会	SHANTI SHANTI 国際ボランティア愛好会

#### <相模原キャンパス>

fan × fun 学生ボランティア愛好会	青山学院大学 SIVA ボランティア愛好会
-----------------------	-----------------------

#### <2023年度の主な実績>

- ・4月に青山・相模原それぞれのキャンパスにおいて「学生ボランティア団体合同説明会」を開催
- ・ZoomPro アカウントの無償貸出（5団体）
- ・外部助成金やセミナー情報の提供
- ・共同倉庫（部室）スペースの提供
- ・センターフリースペースの提供
- ・学生団体企画イベントの学内広報協力

## シビックエンゲージメントセンター勉強会

日 時	2024年1月26日(金) 16:00～18:00
場 所	青山キャンパス総研ビル第11会議室
参加人数	12名
内 容	「地域連携学習の実践における成果と課題の共有」をテーマに、各教員の授業や課外活動での取組みについて、相互に経験や課題について共有し、シビックエンゲージメントセンターとの接点を増やし、関係を構築する場を持った。
成 果	事前に参加者から各実践での取組みの内容として、対学生、対地域パートナーに準備として行っていることや、実践のなかで実感している難しさや課題、うまくいっていること等について、情報収集をして資料として共有した。勉強会では、それらの情報にもとづいて、小グループでのディスカッションを行い、具体的な内容への理解を深め合うことを行った。 日頃、実践やそれに対する思いを共有する機会がない教員にとって、共通して抱えている難しさや、地域との連携を通した取り組みの意義を分かち合う場をもっていくことが望まれること、また、今後の実践の発展につながる事が参加者から示された。

## 青山スタンダード科目

### 正課科目への協力

#### 1. サービス・ラーニング科目への協力

青山スタンダードの科目として開講されている、サービス・ラーニング科目に対して、シビックエンゲージメントセンターでは、主に科目の紹介・広報、地域での活動受け入れ先との連携・コーディネートを行った。

#### 【2023年度 サービス・ラーニング科目の実施概要】

##### サービス・ラーニングⅠ（青山キャンパス 前期）

「グローバル時代の社会課題」（外と内の両面から）をテーマにして、サービスの視座と姿勢を学ぶことを目的とし、主に海外の子どもたちを支援する2つの国際協力団体と、青山学院初等部との協力のもと実施した。今日の国際協力をめぐる状況や事業について理解を深めたことをもとに、青山学院初等部では、4年生の児童を対象とした授業の実践に取り組んだ。

##### サービス・ラーニングⅠ（青山キャンパス 前期）

サービス活動とは何か、について学んだ上で、市民活動団体等のゲストスピーカーの講義と活動参加を通して、社会課題に取り組む現場への理解を深めた。フードバンク、渋谷区の子ども支援事業、アジア・アフリカからの農業指導者研修の活動の中から活動に参加した。

##### サービス・ラーニングⅡ（相模原キャンパス 前期）

東日本大震災で被災した岩手県宮古市における、まちづくりや、子ども・若者の教育について、事前学習とフィールドワークを通じた学びを行った。宮古市の協力のもと、宮古市の小学校と高校での授業を行い、キャリア教育に取り組んだ。また宮古市社会福祉協議会との協力では、地域の高齢者との交流活動を企画して行った。

##### サービス・ラーニングⅡ（青山キャンパス 前期）

社会の課題をビジネスの手法で解決することを目指すソーシャルビジネス（社会的企業）をテーマに、問題解決へのアプローチについて学んだ。実際に取り組んでいる3つの団体・企業からのゲストスピーカーの講義と、学外での活動を通して、ビジネスとしての社会貢献について理解を深めた。

##### サービス・ラーニングとしてのボランティア活動（青山キャンパス 前期）

外国につながる子どもたちへの学習支援の取組を通して日本社会における「多文化共生」の課題について理解を深めた。近年増加している多様なルーツや背景を持つ子どもやその家族が地域社会で暮らし、教育を受ける環境づくりを支えている2つの団体での活動に参加した。

#### 2. 文化基礎演習

総合文化政策学部の文化基礎演習の科目において、「文化とボランティア」をテーマとした授業に参加し、シビックエンゲージメントセンターの概要と学生のボランティア活動について紹介した。また、ボランティア活動を行っている学生4名から、活動内容や、ボランティア活動を通じた学びについて発表を行った。

### 青山スタンダード科目「ボランティア・市民協働論」の実施

青山スタンダード科目として、「ボランティア・市民協働論」(前期開講)を実施した。各回の多様なテーマのもと、センター長、副センター長ならびに各コーディネーターが話題を提供し、ボランティアやサービス・ラーニングをはじめとした、市民協働について幅広い切り口から社会理解を深めるための講義をシビックエンゲージメントセンターとして初めて実施した。

授業科目名：ボランティア・市民協働論

開講時期：前期火曜3限 全15回

担当教員：飯島 泰裕 教授

開講キャンパス：青山・相模原キャンパス (ハイフレックス形式)

受講生：180名

回	講義テーマ	担当・ゲスト
1	ガイダンス	飯島泰裕教授
2	ボランティア活動と市民協働の理解	飯島泰裕教授
3	大学と地域の関係史	水谷コーディネーター
4	青山学院における社会貢献活動と大学ボランティアセンターのミッション	シュー士戸ポール教授
5	大学生の市民参画：相模原での実践から	島崎コーディネーター・水谷コーディネーター
6	SDGs への理解とアクション	佐藤コーディネーター
7	ゲスト講演 グローバルな課題と活動	NPO 法人パルシック 伊藤淳子氏
8	地域社会の課題へのアプローチ①	島崎コーディネーター
9	ゲスト講演 地域社会の課題と活動	NPO 法人ぱれっと 南山達郎氏
10	地域社会の課題へのアプローチ②	三神コーディネーター
11	ゲスト講演 地域社会の課題と活動 (相模原)	藤野環境協会 佐藤鉄郎氏
12	正規科目 (サービス・ラーニング) での学びと社会貢献	秋元コーディネーター ゲスト：NPO 法人かながわすまいサポートセンター 斐安氏
13	ソーシャルビジネス	大宮謙教授
14	リフレクション	秋元コーディネーター
15	総括	全担当者

学生スタッフの活動

事業名	学生スタッフによる SNS (Instagram) 運用
日時	2023年4月～
内容	<p>青山キャンパスの学生スタッフが中心となり、青学生ヘシビックエンゲージメントセンターの存在や取組などの情報発信・周知を目的に SNS (Instagram) の運用に取り組んだ。発信内容は初年度のため、センター概要や学生スタッフの自己紹介から始め、センターが主催するイベント情報などを投稿した。</p> <p>アカウント：@ aogaku_cec                  投稿数：9 件                  フォロワー：155 人 (2024年3月19日時点)</p> 

事業名	学生スタッフによるボランティア広報誌「CEC TIMES」
日時	CEC TIMES vol.0 発行 2023年5月 CEC TIMES vol.1 発行 2023年9月 CEC TIMES vol.2 発行 2024年2月
内容	<p>本企画は、シビックエンゲージメントセンター学生スタッフが、その活動目的の一つである「青学生のボランティア活動の啓発・発信」に基づき作成した広報誌であり、当センターの企画やセンターに関わる学生のボランティア活動について掲載している。学生たちの活動取材し発信することで、参加者の活動に対するモチベーションの維持・向上につなげることを、またボランティア活動を経験したことのない学生に対して活動参加のハードルを下げることを企図した。さらに、学生スタッフ自身も取材対象として取材を受けることで、経験や活動の言語化をする機会にもなった。今年度はトライアルとしての vol.0 も含め計 3 回発行した。</p>
成果	<p>vol.1では、シビックエンゲージメントセンター相模原キャンパスで実施されている3つの市民協働プロジェクトを特集した。また、ボランティア活動を行っている学生個人にフォーカスした記事もインタビューをもとに作成した。vol.2では、学生スタッフの活動も掲載し、学生スタッフの認知度も向上したといえる。</p> <p>CEC TIMESは、学内のあらゆる場所に設置させて頂けたことや大学祭で配布できたこともあり、多くの学生や地域の方々手に取っていただくことができた。</p> <p>〔学生スタッフ所感〕                      CEC TIMESを作成したことにより、シビックエンゲージメントセンターについて、またそこで行われているあらゆる活動について、多くの人に周知することができたと感じる。実際に「この広報誌を見てシビックエンゲージメントセンターの活動が理解できた」「ボランティアに興味が出てきた」などと嬉しい言葉をいただけることもあった。</p> <p>反省点としては、取材、作成、発行の厳格なスケジュール管理を怠ってしまった故に、掲載できない記事が出てしまったこともあった。より正確なプランニングをした上で作成していくべきだったと思う。</p>



事業名	第21回相模原祭への出展
日時	2023年10月7日(土)、8日(日)
場所	相模原キャンパス
参加人数	実施メンバー16人(学生スタッフ以外の学生も含む) 来場者約300人
内容	<p>相模原祭では「CEC 市民協働プロジェクト活動展示」と題して、相模原市内3地域におけるシビックエンゲージメントセンター主催の市民協働プロジェクト(相武台団地活性化プロジェクト、相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト、藤野プロジェクト)の参加学生と共に活動内容の展示、プロジェクトに関連する商品の販売等を行った。</p> <p>学生スタッフは各自が3プロジェクトのいずれかに所属していることから、各プロジェクト内の調整やプロジェクト参加者同士の繋がりづくり、準備や当日の運営の指揮の役割を担った。</p> <p>活動内容の展示の他に、相武台団地活性化プロジェクトでは、活動先である認知症対応型デイサービス内で行われる糸玉づくり・ペーパーログづくりの体験型ワークショップを実施した。</p> <p>藤野プロジェクトでは、藤野観光協会や活動先の方々の協力の元、特産品の販売を行った。相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクトでは、中央区に関するクイズを行い、中央区の魅力を発信した。</p>
成果	<p>当日の来場者は300人を超え、青学生だけでなく数多くの地域の方々にプロジェクトについての発信ができた。また、準備過程では普段関わりのないプロジェクトの枠を超えた学生の交流を図ることができた。</p> <p>〔学生スタッフ所感〕 夏休み明けから当日までの2ヶ月間という期間で、空き時間を有効に活用しながら準備を進めることができた。プロジェクトの枠を超えた横の関係が築かれたことで、今後の活動の発展も期待できる。また、活動の発信は参加者が活動について振り返るきっかけになり、活動先の地域についての知識を増やすこともできた。さらに、地域の方々をはじめとする学外の方にもシビックエンゲージメントセンターの存在や活動について紹介したことで、大学の社会貢献活動について周知できたであろう。開催後のアンケートでは、多くの参加者から「参加してよかった」という評価があった。ボランティア活動は、時に「自分のやってることは意味があるのか?」と悩むこともあると思うが、今回のような機会を設けることで、自分の日頃の活動を見つめ直せたり、周りから評価を受けられたりするという点でも意義があったといえる。</p>

事業名	ユニコムプラザさがみはら「まちづくりフェスタ」の展示
日時	2023年10月1日(日)～10月31日(火)
場所	相模原市立市民・大学交流センター(ユニコムプラザさがみはら)
内容	「まちづくりフェスタ」とは、大学と地域の交流拠点ユニコムプラザさがみはらで実施されている、地域活動や、大学の生涯学習講座・実用化研究成果、学生の地域連携活動等を発表し、相互に学び合うことを目的とするイベントである。学生スタッフは、CECについて、市民協働プロジェクトについて、学生スタッフの活動についてまとめたポスターの作成・展示を行った。
成果	〔学生スタッフ所感〕 シビックエンゲージメントセンターの活動を大学内で消化するのみならず、地域に紹介することができた。大学と地域との連携が、当センターが掲げる「市民協働」そのものであり、今後も力をいれていきたい。なぜなら、地域とのつながりをつくることは、大学生の若い力と知力で地域課題を解決し、学生の実践力を養うために重要であると考えからである。また、他の展示を通して、同じ相模原市内の他大学や地域団体による活動を知ること新たな発見があった。
主催団体	相模原市立市民・大学交流センター(ユニコムプラザさがみはら)



**山梨学院大学**  
CIVIC ENGAGEMENT CENTER

**CEC SNS**  
x(Twitter) : @ags\_volunteer  
Instagram : agsaku\_cec

**シビックエンゲージメントセンター profile**  
CECでできること

**projects**  
市民協働プロジェクト  
学生スタッフの活動について

**team**  
学生スタッフって何してるの？

事業名	関東地区大学ボランティアセンター 学生スタッフサミット —学生スタッフの世代交代と継承について—
日時	2024年2月5日(月) 11:00～16:00
場所	相模原キャンパス D棟 D113教室
参加人数	15名 青山学院大学シビックエンゲージメントセンター 学生スタッフ4名、コーディネーター1名 成蹊大学ボランティア支援センター Seivior 5名、コーディネーター1名 立教大学ボランティアセンター 学生スタッフ3名、コーディネーター1名
内容	各大学ボランティアセンター学生スタッフの交流を図るため、「学生スタッフサミット」と題した交流会を相模原キャンパスで開催した。この交流会は、成蹊大学ボランティア支援センター学生スタッフ企画の「東京都内大学ボランティアセンター学生スタッフ交流会」に倣って実施したものである。実施の目的は以下の4点とした。 ①他大学の活動内容を知り、自分たちの活動に活かすきっかけとする ②一年の振り返りを行い、来年度の学生スタッフの活動に活かす ③新規スタッフの獲得について考える ④大学の枠を超えた新しいつながりをつくる
成果	当日は、立教大学と成蹊大学の学生スタッフとコーディネーターが参加して下さった。午前中は、キャンパスツアーとして相模原キャンパスの図書館やチャペルなどを案内した。午後の交流会では、各大学の学生スタッフが今年度の活動内容やそこで生じた課題、これからの展望などをスライドで発表した。後半は、「学生スタッフの活動に興味をもってもらうには」「ボランティアをはじめめるきっかけをつくるには」という2つの議題について各グループに別れてディスカッションを行った。各大学それぞれ同じ方向性の活動をしていたり同じ悩みを持っていたりすることが分かった一方、行ってきたことやアプローチの仕方は異なっており、新鮮なアイデアを得ることができた。  【学生スタッフ所感】 相模原キャンパスシビックエンゲージメントセンター学生スタッフが主体となって企画、募集、実施してきた。綿密な進行予定を立てた上で、円滑に運営できたことはホスト側として役割を果たせたといえるだろう。活発なディスカッションも行われ、各大学の学生スタッフから今まで無かった考え方や取り組み方を学ぶことができた。これは、来年度の活動に早速活かしていきたいと感じる。また、自分達の取り組みを他大学のスタッフに伝えることができたことは学内を超えた広報に繋がった。学生スタッフサミット実施後のアンケートでは、「最高でした。様々な意見が聞けたので、視野野が広がりました。」「他大学の学生スタッフのリアルな声が聞いて自分達も自分ごとのように課題に向き合えてお互い解決に向けて考えていけたのが良い雰囲気だと思いました。」など有り難いコメントもいただけた。 改善点としてはディスカッションのテーマ設定をより具体的にすると想像しやすいのではないかと感じた。 一から企画、運営していくことは非常に労力がいる、時に挫折しそうになったが、実際にやり遂げたときの達成感は大きく、これからの活動に対する自信となった。
	

## III 資料



## シビックエンゲージメントセンター利用状況

### センター利用状況

参加者とリピーター数 (単位：人)		参加カテゴリー (単位：人)		参加形態 (単位：人)	
延べ人数	389	セミナー・講座	195	対面	305
参加人数	302	ボランティア活動	163	オンライン	84
リピーター	49	シンポジウム	31	オンライン・対面	0
			389		389

### 参加者の属性（所属学部）と活動分野

		(単位：人)								
活動分野		国際協力 ・交流	災害 ・復興支援	ジェンダー マイノリティ	子ども支援	清掃	福祉	地域	その他	総計
学部生	属性	64	27	32	30	17	38	64	43	315
	文学部	10	2	8	2	6	6	7	2	43
	教育人間科学部	2	7	5	5	5	3	1	3	31
	経済学部	2	2		2	2	2	4	1	15
	法学部	15	2	6	2	1	6	2	4	38
	経営学部	1	2	4	1		3	1	4	16
	国際政治経済学部	8	1	4	1	1	7	2	4	28
	総合文化政策学部	2	2	3			3	2		12
	理工学部				2	2	2	5	1	12
	社会情報学部	3	1		4				1	9
	地球社会共生学部	14	2		5		1	8	6	36
	コミュニティ人間科学部	7	6	2	6		5	32	17	75
不明									0	
大学院生		2	1	0	1	9	4	3	4	24
	総合文化政策学研究所									0
	国際政治経済学研究所							2		2
	経営学研究所				1		1		1	3
	会計プロフェッション研究所									0
	国際マネジメント研究所	1				6	2		2	11
	教育人間科学研究科									0
	文学研究科	1								1
	理工学研究科		1				1	1	1	4
	経済学研究科					3				3
不明									0	
科目履修生			1							1
教員	4		1					11		16
職員	1	1	2			4		2		10
一般（学外）	12		1					10		23
総計	83	29	37	31	26	46	67	70		389

ボランティア情報取扱数

1. 団体登録件数（新規登録団体）

青山	127件(28)
相模原	51件(10)

2. ボランティア等募集件数

青山	560件
相模原	174件

3. カテゴリー別ボランティア等募集件数

カテゴリー	青山	相模原
ボランティア募集	122件	69件
ニュースレター	350件	51件
講座・セミナー	49件	30件
イベント	20件	15件
助成金情報	12件	3件
インターン	8件	5件
シンポジウム	5件	0件
その他	4件	1件
合計	560件	174件

4. 領域別ボランティア等募集件数

領域	青山	相模原
災害救援・復興支援	13件	6件
社会福祉	50件	64件
環境保護	38件	15件
教育支援	39件	27件
スポーツ・文化・芸術	6件	3件
国際協力・交流	53件	27件
まちづくり	7件	7件
ジェンダー・マイノリティ	6件	1件
全般	384件	24件
合計	560件	174件

シビックエンゲージメントセンター利用状況

青山	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来室者数	98	59	104	45	12	32	144	47	37	25	17	31	651
相談件数	7	5	9	1	0	3	8	6	7	2	0	2	50

相模原	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来室者数	67	86	73	60	10	82	133	88	88	45	28	22	782
相談件数	6	3	4	2	0	1	2	2	2	0	0	1	23

前年度比

青山	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来室者数	+ 29	▲ 16	+ 7	+ 1	+ 5	▲ 10	+ 45	▲ 31	▲ 19	+ 4	+ 12	+ 20	+ 15
相談件数	▲ 7	▲ 6	▲ 4	▲ 5	0	+ 1	+ 0	▲ 4	+ 2	+ 0	▲ 2	+ 1	▲ 23

相模原	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来室者数	+ 38	+ 37	+ 3	+ 3	+ 7	+ 34	+ 70	+ 8	+ 46	+ 21	+ 16	▲ 3	+ 280
相談件数	+ 1	▲ 2	▲ 4	▲ 4	+ 0	+ 0	+ 1	▲ 5	+ 1	▲ 1	▲ 2	+ 1	▲ 14

青山 相談内容

日付	相談区分	相談内容
4月	海外ボランティアについて	夏休みに海外ボランティアに行きたいと考えている。おすすめのプログラムを紹介して欲しい。
	国内ボランティアについて	近場ですぐに始められるボランティアを知りたい～清掃活動や炊き出しなど近場でまず始められる活動はないか。ボランティアは初めて。
5月	国内ボランティアについて	サークルでのボランティアについて。ジャズサークル所属、サークルとして子供に向けた活動がないか。青学中等部とつながれないか。
	国内ボランティアについて	ボランティアに興味があるがボランティア未経験。アパレル、アート、子どもに関心あり。まずは、簡単に参加できるものを知りたい。
6月	国内ボランティアについて	高齢者や動物に関するボランティアに興味があり、夏休みに出来る活動を紹介して欲しい。
	国内ボランティアについて	ボランティアとして関わる公益法人ハーモニーセンターが行っているポニー乗馬ふれあい体験を学内で幼・初等部を対象に行いたい。
	国内ボランティアについて	週末に単発で参加できるボランティア（清掃など）を知りたい
	国内ボランティアについて	青山キャンパス近くのこども食堂のボランティアを紹介して欲しい。
9月	国内ボランティアについて	子ども支援ボランティアの参加条件について：配架チラシの子ども支援ボラにある参加条件について、福祉・心理等の学部となっているが、自身は該当しないため参加できないか。
	国内ボランティアについて	ボラサポについて：小学生に向けたマジックワークショップ開催の相談。
10月	国内ボランティアについて	国内で英語を使ったボランティアがしたい
	海外ボランティアについて	海外短期研修を行う財団を教えてください。笹川記念財団やASEANセンター、東京都、内閣府などが主催で無料だったり安く派遣できるツアーに参加したいです。
	海外ボランティアについて	春休み（2月下旬から1～2週間）に参加できる海外ボランティアプログラムについて知りたい。
	国内ボランティアについて	授業の空きコマで参加出来るボランティアを紹介して欲しい。（短時間で参加出来るもの、希望分野なし）
11月	国内ボランティアについて	広尾中学でのアスタースクールボランティアに興味がある。今も募集しているか。あるいは別の類似活動があるか知りたい（キャンパス近くが良い）
	国内ボランティアについて	子どものメンタルサポートに関するボランティアを紹介して欲しい。不登校、自殺予防など子どもの支援に関する活動を知りたい。
12月	国内ボランティアについて	ボランティアを経験したい。大学周辺で海関連や子ども支援系にきょうみがある
	国内ボランティアについて	春休みに参加できるボランティアの紹介 参加のハードルが低い活動（子ども、ゴミ拾いなど）を希望。仕事（就職）に有利になるボランティアはあるか。
	国内ボランティアについて	東北の被災地ボランティアに興味がある。出来れば、春休みに参加出来るプログラムを紹介して欲しい。
1月	募金・寄付	研究科で毎夏実施しているイベントで販売したグッズの売上の一部を能登半島地震緊急支援募金に寄付したい。
3月	国内ボランティアについて	どのような活動があるか、また参加方法について教えて欲しい。
	国内ボランティアについて	学科のゼミ（藤田幸一ゼミ）で2月にインドへ行った。フィールドの日本語学校では、日本語の本が少ないため、学内等で本を回収し、現地へ送る活動をゼミ仲間と計画。活動に伴い、CECのサポートを受けられるか。

## 相模原 相談内容

日付	相談区分	相談内容
	その他	ボラサポ制度への申請に興味を持っている。障がい者の社会的包摂や優生思想との関係、フィンランドの福祉国家についてなどさまざまなことに興味を持っている。
	海外ボランティアについて	国内の海外にルーツを持つ子ども学習支援ボランティアについて
5月	国内ボランティアについて	土日に単発でできるボランティアを探している、ごみ拾いとカイメージしているが、特にこだわりはない。とりあえず単発でやってみたい。
	国内ボランティアについて	学生ボランティア団体へ加入したが、もう少し定期的にしっかりとボランティアをしてみたいとのこと。子供支援などに興味があるとのこと。
6月	国内ボランティアについて	夏休みに何かボランティアをしたいとのこと。現在は、無料学習支援のボランティアをしている。子ども関係や海外ボランティアにも興味がある。
	国内ボランティアについて	市民活動サポートセンターの「まちカフェ応援隊」について知りたい。(学生ポータルを見て) 北欧(特にスイス)の国際ボランティアにも興味ある。
7月	海外ボランティアについて	夏休みに海外でボランティア活動をしたい。国際ボランティア団体に所属していたが、コロナで現地での活動がなくなってしまった。学部生のうちに当初描いていた活動をしたいと思っている。
	国内ボランティアについて	短時間(2-3時間)でできるボランティアを探している。ボランティアをしながらいろいろなNPO法人をを回って活動を見てみたい。
9月	その他	CECプロジェクト参加学生による企画内容相談
10月	国内ボランティアについて	以前から関心のあった外国につながるのある子ども学習支援などのボランティアをしてみたい。吹奏楽を続けてきており、トランペットが吹けるので披露してみたい。
	国内ボランティアについて	サークルを立ち上げるために今すべきことと、現状整理
11月	国内ボランティアについて	不登校の子供たちの居場所づくりについて。 フリースクールでボランティアとサークルでのボランティアをしている。不登校の子供たちを含む誰でも来て良い居場所づくりのような活動をしたいとのこと。
	その他	自身が活動しているNPO法人子ども学習支援でのボランティア募集をしたい
12月	国内ボランティアについて	掲示されているボランティア募集について
	国内ボランティアについて	自宅近くまたは帰宅途中で参加できる子ども支援ボランティアを探している
3月	組織運営・活動について	学生ボランティア団体によるプロジェクト企画実施について

# 青山学院大学シビックエンゲージメントセンター規則

(2016年11月24日理事会承認 (2022年2月24日全部改正))

改正 2022年9月29日

## (趣旨)

第1条 この規則は、青山学院大学学則第6条第2項の規定に基づき、青山学院大学シビックエンゲージメントセンター（以下「センター」という。）の運営について必要な事項を定めるものとする。

## (センターの目的)

第2条 センターの目的は、学校法人青山学院（以下「本法人」という。）が設置する学校（以下「設置学校」という。）に在籍する学生、生徒、児童及び園児並びに本法人の教職員が、主体的に多様なニーズに応える社会貢献活動を体験し、又は学問領域の枠にとらわれない知識を修得し、他者とともに未来の国際社会及び地域社会を創造する市民として、かつ、全ての人と社会のために仕えるサーバント・リーダーとして成長するよう支援することとする。

## (センターの事業)

第3条 センターは、前条に規定する目的を達成するため、ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の社会との連携を通じた教育研究及び設置学校間の連携に係る次の事業を行う。

- (1) ボランティア及び市民協働に関する活動の実施及び促進
- (2) ボランティア及び市民協働に関する活動の情報収集及び管理
- (3) ボランティア及び市民協働に関する活動への参画機会の提供並びに参画する学生及び団体の支援
- (4) サービス・ラーニング科目等の開発支援及び促進
- (5) 設置学校におけるボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の支援及び促進
- (6) ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に関する学内外の専門家及び関連団体との連携の促進
- (7) ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に関する調査及び研究
- (8) センターの活動に関する成果の報告
- (9) 前各号に規定するもののほか、センターの目的達成に必要な事業

## (センターの組織)

第4条 センターに、センター長1名を置く。

2 センターに、副センター長1名を置く。

3 センターに、助教若干名を置く。

4 センターに、助手若干名を置く。

5 センターの運営等に係る重要事項を審議するため、センターにシビックエンゲージメントセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

6 センターの運営等に必要事項を検討するため、運営委員会の下にシビックエンゲージメントセンター実務委員会（以下「実務委員会」という。）を置く。

## (センター長)

第5条 センター長は、センターの業務を統括し、センターを代表する。

2 センター長は、学長が青山学院大学（以下「本学」という。）の専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

3 センター長の任期は、2年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 センター長は、再任されることができる。

## (副センター長)

第6条 副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代理する。

2 前項に規定するもののほか、センター長は、必要があると認める場合は、副センター長にその職務の一部を臨時に代理させることができる。

3 副センター長は、センター長が本学の専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

4 副センター長の任期は、2年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5 副センター長は、再任されることができる。

## (センター助教)

第7条 センターの助教（以下「センター助教」という。）は、学校法人青山学院助教に関する就業規則（以下「助教に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用された、センターに所属する本学の専任教員とする。

2 センター助教は、本学のいずれかの学部又は専門職大学院研究科（以下「学部等」という。）に分属する。

3 センター助教は、コーディネーターの呼称を使用することができる。

## (センター助教の職務)

第8条 助教に関する就業規則第4条第4項の規定によるセンター助教の職務は、同条第1項に規定するものに加えて、次のとおりとする。

- (1) 第3条に規定するセンターの事業に係る業務
- (2) 前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

## (センター助教の資格)

第9条 センター助教は、助教に関する就業規則第5条第1項の規定により、青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則（以下「専任教員任用昇任規則」という。）第2条第4項各号のいずれかに該当する者でなければならない。

2 前項に規定するもののほか、助教に関する就業規則第5条第2項の規定によるセンター助教の資格は、ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の社会との連携を通じた教育研究に係る専門的知識を有する者で、センターの

事業を遂行するために必要な能力を有するものとする。

**(センター助教の雇用手続)**

第10条 センター助教の雇用は、次項から第5項までの規定による。

- 2 センター長は、センター助教の候補者の雇用が適当であると認めるときは、運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状、当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。
- 3 学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。この場合において、前項の候補者が雇用された場合の分属学部等について、併せて付議する。
- 4 前項の学部長会において、候補者を雇用することが可とされ、かつ、その分属学部等が決定した場合の当該候補者の雇用の決定は、専任教員任用昇任規則第3条第1項第3号から第6号までに規定する手続を経なければならない。この場合において、同項第3号中「学部長等」とあるのは「分属先の学部等（以下「分属学部等」という。）の長」と、「当該専任教授会」とあるのは「当該分属学部等の専任教授会」と、同項第4号中「専任教授会」とあるのは「分属学部等の専任教授会」と、同項第5号中「学部長等は、専任教授会」とあるのは「分属学部等の長は、当該分属学部等の専任教授会」とする。
- 5 専任教員任用昇任規則第3条第1項第4号の審査委員会については、同規則第4条の規定を準用する。この場合において、同条第1項中「専任教授会」とあるのは「分属学部等の専任教授会」と、同条第2項本文中「当該学部等」とあるのは「分属学部等」と、同項ただし書中「当該学部等」とあるのは「当該分属学部等」と、「他学部」とあるのは「分属学部等以外の学部」と、同条第4項中「各学部等」とあるのは「分属学部等」と読み替えるものとする。

**(センター助教の雇用契約の契約期間等)**

第11条 センター助教の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助教に関する就業規則の定めるところによる。

**(センター助手)**

第12条 センターの助手（以下「センター助手」という。）は、学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用された、センターに所属する本学の専任教員とする。

- 2 センター助手は、コーディネーターの呼称を使用することができる。

**(センター助手の職務)**

第13条 助手に関する就業規則第4条第3項の規定による職務は、同条第1項に規定するものに加えて、次のとおりとする。

- (1) 第3条に規定するセンターの事業に係る業務
- (2) 前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

**(センター助手の資格)**

第14条 センター助手は、助手に関する就業規則第5条第1項の規定により、専任教員任用昇任規則第2条第5項各号のいずれかに該当する者でなければならない。

- 2 前項に規定するもののほか、助手に関する就業規則第5条第2項の規定によるセンター助手の資格は、ボランティア及び市民協働に関する活動又はサービス・ラーニングに係る専門的知識を有する者とする。

**(センター助手の雇用手続)**

第15条 センター助手の雇用は、次項から第4項までの規定による。

- 2 センター長は、センター助手の候補者の雇用が適当であると認めるときは、運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状、当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。
- 3 学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。
- 4 候補者の雇用の決定は、前項の規定により学部長会の審議を経た後、常務委員会及び常務理事会で協議し、理事会の承認を得なければならない。

**(センター助手の雇用契約の契約期間等)**

第16条 センター助手の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助手に関する就業規則の定めるところによる。

**(協力者)**

第17条 センター長は、センターの事業の実施に必要なと認める場合は、当該事業に協力する者（以下「協力者」という。）を置くことができる。

- 2 協力者は、センターの事業の実施に必要な専門的知識又は経験を有する本学外の者で、当該事業の実施に係る助言又は協力を行う。
- 3 協力者は、センター長が候補者を推薦し、運営委員会の審議を経て、学長が委嘱する。
- 4 協力者の任期は、原則として1年以内とする。ただし、再任されることができる。
- 5 協力者は、当該協力者であることを示すものとして、アドバイザーの呼称を使用することができる。
- 6 第2項の助言又は協力は、無償とする。ただし、センター長が、必要があると認める場合は、学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規（以下「支給基準に関する内規」という。）の定めにより、報酬又は謝礼を支給することができる。

**(運営委員会の構成)**

第18条 運営委員会は、次の委員をもって構成する。

- (1) センター長
  - (2) 副センター長
  - (3) 大学宗教部長
  - (4) 本学の専任教員の中からセンター長が指名する者 次のとおりとする。
    - イ 青山キャンパスを就学キャンパスとする学部又は研究科から 1名以上
    - ロ 相模原キャンパスを就学キャンパスとする学部から 1名以上
  - (5) 庶務部長
  - (6) 学生生活部長
  - (7) 相模原事務部長
  - (8) 学務部長
- 2 前項第4号に規定する委員の任期は、2年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
  - 3 前項の委員は、再任されることができる。

**(運営委員会の招集、開催、表決数等)**

第 19 条 運営委員会は、センター長が招集し、議長となる。

2 運営委員会は、必要に応じて開催する。

3 運営委員会の開催は、委員の 3 分の 2 以上の出席を必要とする。この場合において、運営委員会で審議する事項につき、書面をもってあらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

4 運営委員会の議決は、出席した委員の過半数の賛成を必要とする。

5 議長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

**(運営委員会の審議事項)**

第 20 条 運営委員会は、次の事項を審議する。

(1) センターの運営等に係る基本方針に関する事項

(2) センターの予算及び決算に関する事項

(3) センター長、副センター長、センター助教及びセンター助手の人事に関する事項

(4) 前 3 号に規定するもののほか、センターの運営に必要な事項

**(実務委員会の構成及び開催)**

第 21 条 実務委員会は、次の委員をもって構成する。

(1) センター長

(2) 副センター長

(3) センター助教

(4) センター助手

(5) 本学の専任教員の中からセンター長が指名する者 次のとおりとする。

イ 青山キャンパスを就学キャンパスとする学部又は研究科から 1 名以上

ロ 相模原キャンパスを就学キャンパスとする学部から 1 名以上

(6) 庶務部社会連携課長

(7) 学生生活部学生生活課長

(8) 相模原事務部学生生活課長

(9) 学務部教務課長

(10) 相模原事務部学務課長

2 前項第 5 号に規定する委員の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

3 前項の委員は、再任されることができる。

4 実務委員会は、センター長が必要に応じて招集し、議長となる。

5 センター長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

**(実務委員会の業務)**

第 22 条 実務委員会は、次の事項について協議し、その執行に当たる。

(1) センターの事業遂行に係る計画の策定及びその実施に関する事項

(2) センターが行うボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に係る企画、立案及び実施に関する事項

(3) 外部の組織との連携に関する事項

(4) センターの予算案の作成及び予算の執行に関する事項

(5) 学生スタッフに関する事項

(6) 前各号に規定するもののほか、センターの運営等に必要な事項

2 センター長は、必要があると認める場合は、前項の規定による協議、執行等の結果を、運営委員会に報告する。

**(学生スタッフ)**

第 23 条 センター長は、必要があると認める場合は、センターに学生スタッフを置くことができる。

2 学生スタッフは、センター長の指示により、センターの活動に係る補佐業務に当たる。

3 前項の補佐業務は、無償とする。ただし、センター長が、必要があると認める場合は、支給基準に関する内規の定めにより、報酬又は謝礼を支給することができる。

4 学生スタッフは、本学の学部又は大学院研究科に在籍する学生で、センターの活動への参加を希望する者の中から、センター長が任命する。

**(所管)**

第 24 条 この規則は、庶務部社会連携課が所管する。

**(改廃手続)**

第 25 条 この規則の改廃は、運営委員会及び学部長会の意見を聴いた後、常務委員会で協議し、理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

**附 則**

1 この規則は、2022 年 4 月 1 日から施行する。

2 2022 年 3 月 31 日において青山学院大学ボランティアセンターの助手として在職した者で、この規則の施行日においてセンター助手として在職するものは、この規則で定めるところによりセンター助手として雇用され、又はその契約期間を更新されたものとみなす。

**附 則 (2022 年 9 月 29 日)**

この規則は、2022 年 9 月 30 日から施行する。

## 2023 年度 シビックエンゲージメントセンター 委員一覧

2024 年 3 月 31 日現在

**運営委員会**

センター長（議長）	飯島 泰裕（社会情報学部教授）
副センター長	左近 豊（国際政治経済学部教授）
大学宗教部長	大宮 謙（社会情報学部教授）
センター長指名（青山）	外岡 尚美（文学部教授）
	中邨 良樹（経営学部教授）
	宮副 謙司（国際マネジメント研究科教授）
センター長指名（相模原）	澤邊 厚仁（理工学部教授）
	堀江 正伸（地球社会共生学部教授）
庶務部長	黒沼 一輝
学生生活部長	藤井 隆司
相模原事務部長	田口 知博
学務部長	乃美 浩一

**実務委員会**

センター長（委員長）	飯島 泰裕（社会情報学部教授）
副センター長	左近 豊（国際政治経済学部教授）
センター助手	秋元 みどり
	佐藤 亜希
	島崎 由宇
	三神 憲一
	水谷 耕平
センター長指名（青山）	山本 珠美（教育人間科学部教授）
	宮副 謙司（国際マネジメント研究科教授）
センター長指名（相模原）	渡邊 昌宏（理工学部教授）
	堀江 正伸（地球社会共生学部教授）
庶務部社会連携課長	黒沼 一輝
学生生活部学生生活課長	太田 浩史
相模原事務部学生生活課長	安東 和喜子
学務部教務課長	伊藤 大輔
相模原事務部学務課長	鴨志田 壽生

**学生スタッフ 青山キャンパス**

青佐 真里奈（経営学部経営学科 4年）
田辺 菜穂（総合文化政策学部総合文化政策学科 4年）
富岡 日暖（経営学部マーケティング学科 1年）
中田 莉奈（法学部法学科 4年）
二通 優衣（文学部フランス文学科 3年）
福井 咲希（文学部日本文学科 4年）

**相模原キャンパス**

小泉 彩乃（コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 4年）
小鮒 巧実（コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 2年）
戸田 うい（コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 1年）
藤原 照人（コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 4年）

## シビックエンゲージメントセンター（CEC）ロゴ

シビックエンゲージメントセンター（以下、CEC）はこれまでのボランティア活動支援に加え、市民協働活動そしてサービス・ラーニングの3つを活動の基軸とし、より自発的な社会参加を促し、社会課題解決に取り組み、社会貢献活動に取り組めるよう支援することが求められている。

一方、名称からどのような役割を担うセンターかイメージしづらく、ボランティアや社会貢献活動に関心がある学生と直接的接点を持つてなくなることが懸念されていた。そこで、CECを学生たちに認知されやすく、親しみを持ってもらえるようなイメージロゴマークを学内で募集した。

応募作品の選考については、大学関係者以外にも本学のキャンパスが所在する東京都渋谷区役所と神奈川県相模原市役所の職員の方にも審査員として協力いただき、最終的には4件の応募作品の中から石原穂乃香さん（当時、総合文化政策学部総合文化政策学科4年）デザイン「Spring」が採用された。



### 作品コンセプト：

「C」と「E」と「C」を組み合わせた誰でも走り書きができそうなシンプルなシンボルになっていて、その気軽さとバネのようなシルエットでフレンドリー感を出し、柔軟性を表現している。

### シビックエンゲージメント研究 第2号

2024年7月1日発行

編集 シビックエンゲージメント研究編集委員会

発行 青山学院大学シビックエンゲージメントセンター

（青山キャンパス）

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

（相模原キャンパス）

〒252-5258 神奈川県相模原市中央区淵野辺5-10-1

印刷 株式会社創志

